
魔王陛下の愛猫

ひーこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王陛下の愛猫

【Nコード】

N2081W

【作者名】

ひーこ

【あらすじ】

もうすぐ結婚を控えていたあたしは、とあるご令嬢の嫉妬によって猫になってしまった！

結婚するまでは死んでも死にきれない！

なんとか人の尊厳を捨てて生きたあたしだけど、更に不幸な事にうっかり空間の歪みに足をつっ込み魔界へと落ちてしまった。

そこで何と！愛しのダーリンと再会、したけど……

あれ？ダーリンが魔王って、どゆこと？

しかも、あたしとの愛の日々を綺麗さっぱり忘れてるって？！

ブローグ

それは、本当に些細な心境の変化だった。

散歩に出よう。

突然思い立ったら、どうしても出たくなってしまい、実行した。

敢えて理由をあげるのならば、留守の間に山のように積み上げられた書類や問題から逃げたかったのかも知れない。

ただ少し、外の空気を吸いに行きたかった。

空に一面に広がる曇天は、鬱々とした今の心境を見事に現していた。

かさり…、と音を立てた生き物の気配に目を向けて、信じられないものを見た気分になり目を見開く。

鬱蒼と茂る赤茶の植物の隙間からこちらを伺っていたのは、灰色と不可思議な黒い斑が入った毛並み。ピンと天を向く耳と尻尾。

珍しい、猫だ。

猫はこちらを伺うように木々の隙間から顔を覗かせ、そのまま氷漬いたように微動だにしない。

一見どこにでもいるような野良猫だが、特別に目を惹いたのは、その瞳だ。

日の光をたっぷりと浴びた葉のような緑色。

妙に心惹かれるその色を見詰めていると、途端、猫は弾かれたようにこちらへと駆け寄る。
足に軽い衝撃。

「にゃあん、にゃあん」

ぶつかるように足へと擦り寄ってきた。

何か懇願するように鳴きながら再び全身で足に擦り寄る。そして印象的なあの緑の瞳で見上げてきた。

恐らく地上界の猫だ。

随分と人懐っこいこの猫は、誤って空間の歪みに落ちてしまったのだろう。

良く見ると猫は全身至るところに怪我を負っていた。模様だと思つた斑は血が乾燥し赤黒く固まつてるものだったのだ。

地上に比べて、魔界の獣は血に飢えたものが多い。大型の猛獣や魔獣の類いならばまだしも、脆弱な魔力しか感じられない猫が今このときまで生き逃れたのは奇跡に等しい。

だからこそ、滑稽だ。

数々の手傷を負わせた血に飢えた獣よりも、比べ物にならない危険な存在がすぐ傍ににいるというのに。

何の躊躇いもなく、猫がひたすら懸命に足に擦り寄る自分こそが、この魔界の頂点に君臨する王であるというのに。

この様は一体何だ？

隠しもししていない自分の内に存在する強大な魔力を感じられないのだろうか？

このまま猫を放置すれば、間違いなく数刻もしないうちに死んでしまっただろう。

手負いの猫が生き残れるほど、この世界はそれほど甘くはない。

——だが、

あの緑の目の光が見れなくなるのは、余りにも惜しい。

そんな考えが浮かんだ自分に驚く。

戸惑いを覚えながらも、擦り寄る猫に手を伸ばすと、遠慮がちに顔を寄せてきた。それに答えて猫の頬を撫でる。すると猫は、大胆に甘えるように顔を擦り付ける。

抱き上げれば、か細く何度も鳴いて頬を舐める。

ザラリとした感触。

決して不快ではない感情が胸に渦巻いた。

「にー……」

やがて猫はゴロゴロと喉を鳴らし甘えるように一鳴きし、顔を抱き寄せた胸に擦り付け、そのままぐったりと目を閉じた。

あたしとダーリン

あたしは、人“だった”。

……悲しい事におもいきり過去形だ。

というのも、無理はない。頭にはピンと存在を主張する三角の耳、ふかふかの体毛に覆われた身体、地には四本足で体を支え、極めつけにはお尻から流れるような尻尾。

今のあたしは、どこからどう見ても“猫”だった。

ちなみに毛並みは人だった頃の髪の毛と同じ蜂蜜色。

金色って言うには、黄色の色みが強くて透明感が余りない。

嘘でも黄金だとかって言うにはあまりに安っぽい色だ。店に換金しに行ったら「あ、金じゃない何かが混ざってますね。残念ですが値引きします」とか言われるレベルだ。足下見やがって。

実はこつそり、ブロンドじゃないことを気にしてて、いつだったかポロツとダーリンに不満を溢した事がある。

そしたらダーリンったら！

あたしの髪の毛の事を「蜂蜜色の優しい色だ」って言ってくれて！

オマケに「甘い香りがする」って言って髪の毛に口付けてくれ

ました！！　きゃー！！！！

…はい。

髪に対するコンプレックスは一瞬にして無くなりましたが、なにか？

そんなわけで、毛並みには人一倍気を使っている。

寝起き、食事後、就寝前のグルーミングは特に欠かせない。尻尾まで毛並みを整えるのが日課だ。

頭から背中にかけて撫でられる感触。

ちらりと目線を上げると漆黒の瞳とあたしの緑色の目がかち合う。

愛しのダーリンだ。

瞳と同じく漆黒の髪は短いので、じゃれつけないのが残念でならない。

切れ長の目とスツと通った風貌はどこか異国の地を感じさせ、最高に色っぽい。鋭い目付きと物憂いげな美貌と相まってどこか排他的な、冷たい印象を感じさせる。それでも笑うと途端に幼い印象になるのをあたしは知っている。

高い背丈なのに威圧を感じないのは、優美で締まったしなやかな体つきのせいだろう。

遠慮がちに、そして恐る恐るとあたしを撫でる手つきはぎこちない。お世辞にも撫で上手とは言えなし、大きな手のひらには剣を握る者特有の堅さがある。けれど、この手は間違いなくあたしが愛している人の手だ。

その事実には、あたしは思わずうつとりと目を細めてしまう。

そんなに慎重に触らなくても、あたしはそう簡単には壊れないよ。

そう言いたくとも、残念ながらあたしの口からは「にゃー」という鳴き声しか出なかった。……後、喉がゴロゴロとも鳴ってますが。

まだ、あたしが人だった頃は、ある国で姫様付きの侍女をしいた。ダーリンは、騎士団の部隊長で、とある伯爵家の養子で、将来有望

な出世株。さすがダーリン！

顔良し、頭良し、有力な後ろ楯アリ。

…とくれば、そんな三拍子揃った有力物件を周りは放つとかない訳で、あっちコッチでダーリン争奪戦が繰り広げれた。

ダーリンと私が結ばれるまで色々と、涙無しには語れない大変な事がありましたとも、うん。

そんな苦難を手取り足取り取り合って、愛するダーリンとあたしは見事！婚約までこじつけた。

結婚まで後、数日。

本来、あたしはそんな儀式をしなくとも、お互いの心さえ確認できれば、と軽んじていたが、いざ、する側になって初めてその神聖さを理解した。

——愛する人と夫婦の契りを交わす。

それがどんなに恵まれている事か。すべての人に祝福され、祭壇で永遠の愛を誓うという事が、何に憚れることなく結ばれるという事が、どんなに幸福かということに。

そんなときに、あの忌まわしい事件があたしの身に降り掛かってしまったのだ。

ダーリンに一際熱を上げていたご令嬢から、お茶会のお誘いを受けたのである。

始めこそ、あたしは「のこのこと顔を出せば、どんな嫌がらせを受けるかわかったもんじゃない！」と断っていたが、身分だけはやらと高いご令嬢に半ば強制的形で約束を取り付けられてしまった。

お茶会当日。

対面に座り顔を合わせたご令嬢の目に、キラリと鈍く輝く狂気の光を見て、ご令嬢が抱くダーリンへの思いが、遙かに基準値を越えている事にあたしは初めて気が付いた。

正直私は油断していた。

こう見えて、姫様付き侍女、そしてダーリンの婚約者という肩書きに落ち着くまでは、世界中を巡りそれなりに名の売れた冒険者だったのだ。

…ぶっちゃけると、現役騎士職のダーリンよりも腕に自信がありましたとも。

例えば暗殺者に取り囲まれても、逃げ切る自信が私にはあった。

そんなあたしが警戒するのは、毒物のみ。

…お茶？

目の前で入れて貰って、もちろんご令嬢が飲んで、何も無いのを確認してからあたしも飲んだ。

…お茶菓子？

ご令嬢の妹が食べてたから、何も無いのを確認してからあたしも食べた。

それなのに！

まさか、お茶とお菓子を両方食べたら作用するなんて、一体どんな手の込みようなのやら。

こんな事ならお茶だけにしとくんだったと嘆いても、身体の熱は消

えない。

だって、とっても美味しそうだったもの！

私の食意地まで計算された見事な作戦に負けてしまった結果、気が付けば猫になっていた。

それから、散々な目に遭った。

お茶会はご令嬢の邸で行われたので、王都に戻る為に何日も猫の身でさ迷うハメになったのだ。

獵師さんに毛皮にされそうになったり、逃げ込んだ森の中で迷子になって飢えたり、獣に襲われたり、生ゴミを漁ったり……

正直、人としてのプライドを何度もブチ壊されたが、その度に、諸悪の根源であるあの令嬢を思いだし「ぜったい泣かす！」と固く心に誓って乗り越えた。

ところが、ぐにやりと歪む空間に足を滑らせ、状況は一変した。

見たことがない植物に半端なく恐ろしい魔獣が生息する想像を絶する世界だった。

いつかは冒険しに行きたいな、と呑気に考えていた魔界、である。人のままなら手放して喜んだであろう災難も、猫の身ではさすがに血の気が引いた。

持ち前の反射神経を駆使して迫り来る牙や爪、炎などからギリギリで避けたり、うっかり捕食植物の蔓に引っ掛かり危うく溶かされそうになったりと、体力を著しく消費し、さすがのあたしも死を覚悟した。

そんなとき、偶然にも探し求めていたダーリンと奇跡的に再会を果たしたのである。

あーん、会いたかったよーう！

あたしは形振り構わずっ飛んで、全身で喜んだ。

ダーリンに抱き上げられたあたしは、安心できる温もりを感じ気が
緩み、いつの間にか寝てしまっていた。

そうして目を覚ますと、再びあたしの頭を悩ませる事態になったの
である。

……あれ？　ダーリンが魔王って、どゆこと？？

猫の日課

あー、幸せ……

闇色のマントの上に丸まり、至福のお昼寝タイムのあたし。

このマントはダーリンが着用していたもので、ダーリンの匂いがたっぷりと染み付いている。オマケに保温効果、通気性、耐久性にも優れた逸品物だ。

「レディ様！　そ、それは陛下のマントです！」

気持ち良く寝ているのに無粋な真似をしてくるのは、ダーリン付きの侍従だ。

まだ幼さを残した顔立ちに、くりくりの白い毛に羊のような角が頭の両上に生えている。

あたしを退かしたいのならマントごと捲り上げればいいのに、それをしないのは万が一あたしの爪でマントが傷付かないようにするためだろう。

でも、そんなことはただの杞憂に過ぎない。さすが魔王陛下の愛用のマントは、あたしごときが寝惚けて爪を立てても引っ掻いても、破れるどころか傷ひとつ付かないのだから。きっとドラゴンの炎だつて遮るに違いない。

そんなことも露知らず、羊美少年は懇願するようにあたしへ必死にいい募る。

そんなに邪魔なのなら、しっしっ！　とあたしを払えばいいのに、この子は一度もあたしに無体を働いたことがない。あたし自身が退けるまで根気強く、ひたすら近くで粘るのだ。しまいには、うるつると青い瞳に涙を溜めるのだが、それが非常に可愛らしい。

美少年に哀願されて心が動かないほど、あたしは冷たくはないので

愛らしい泣き顔をたつぷりと觀賞したところで「よっこらしょっ」と腰をあげるのがいつものパターンだ。

「あああ、毛が……」

今の所、ダーリン愛用のマントを毛だらけにしても、引っ付いてダーリンに擦り擦りしにいても基本的にダーリンからは直接何も言われた事はない。

嘆く羊美少年を尻目に、あたしは日課のグルーミングに勤しむものだった。

毛だらけのマントと羊美少年をそのまま置いて、あたしは早速ダーリンの元へ向かう。

謁見の間の玉座が執務室にいる事が多いので見付けるのは簡単だ。入り口にちょこんと座りダーリンの仕事振りを觀察する。ダーリンがチラッとあたしに気付いてから、きりのいいところでダーリンに近づいてゆく。これもいつもの事だ。

慣れた動作で膝に登り、胸に前足をかけて……

——ちゅっ

これまた日課となったキスをする。

ダーリンは喜ぶでもなく嫌がるでもなく、身動きもしない。ただされるがままだ。もう少し反応してくれてもいいのに、あたしの一方通行で少し悲しい。

でも、嫌がってないって事はやっていいって事だよな？

ゴロゴロと頬に擦り寄る。

その様子を生暖かい目で見詰めてくるのは、たしか宰相さんだ。

「ごほんっ」

ワザとらしい宰相さんの咳払いが聞こえてきたら、引く頃合いだ。
ダーリンの肩によじ登り、そのまま背中と玉座の間に身体を滑り込ませる。

心地よい温もりに包まれながら、そのままずっと寝入るのだった。

また寝るのか！ と自分でも呆れるが、どうも猫になってからやらと眠たくて仕方がない。もともと昼寝が好きな性分だったので、この事態も慣れればなかなか快適で過ごしやすい。
ダーリンの傍にいれるしね！
人のままでは、とてもじゃないけれど……

あれ？ あのまま結婚してたら、あたしどうなってたの??

素性のちよつと怪しい侍女に、将来有望な騎士さま。

「これであたしも貴族の仲間入りなのね。完璧な妻としてダーリンを支えるぞ！」と意気込んでいたあたしだが、対してダーリンは、とんでもない秘密を隠してくれていた。

まさか、あたしは自分の夫になるう人が魔王陛下だなんて、これっぽっちも知らなかった。

思い当たる節なんてまったく、……いや、今思えばちよつとくらいあるような……

いつだったか、広間のシャンデリアの鎖がブチっと千切れた時、丁

度あたしは真下でその光景を見た。キラキラと光を反射させながら落ちて来る巨大なシャンデリアを見ながら「うわぁ…綺麗」だとか間の抜けた感想を抱いていた時だった。

あたしの視界が一瞬にして暗闇に包まれたと思ったら、気が付けばダーリンの腕の中にいた。そういえば足の床が抜けたような感覚も合ったような気もする。

あの時は、砕け散るシャンデリアがあまりに綺麗だったから、真下にいたという事実を錯覚だと思っ事にしたのだ。

幸い死者が出る惨事にならなかったが、ダーリンが助けてくれなければ、きっと美しいシャンデリアの下で醜く潰れて死んでしまっていただろう。

今更になってその時の恐怖にぶるりと身を震わせる。

「一体どなた様のお陰で、この世界が保たれているのか。愚かにも忘れてしまったようすなあ」

聞き覚えのある声に、思わずピクリと耳が動く。

この声は、あたしが働いていた城の元侍従長の声だ。

ピッチリ分けた前髪とダンディーなおヒゲがチャームポイントの洗練された動作の紳士だ。

カッチリと真面目そうに見える装いの中に、茶目っ気を隠し持っており、あたし達侍女仲間の間でも好評価な人物だった。

なんでも、元々魔界出身……、というか闇の精霊らしく、なんとか六柱……名称忘れてちゃったけど、ダーリンに絶対忠誠を誓ってるだとか。

実は侍女時代に、ことある事に口説かれていたあたしは、なるべく顔を会わさないように注意を払っていたのが。

その口説き文句は、

「お願いします。どうか貴女の生む御子様の名付け親になる権利を、

どうかこの私めに！」

……はい。

今なら解ります。

そういう事だったんですね。紛らわしいのよ、まったく！

魔界で見つけた顔見知り、元侍従長だけかと思ったら他にも知った顔がチラリほらり。

極めつけにはダーリンの後見人だった伯爵は、魔界の剣術顧問で、その、なんとか六柱の一人だった。

つまりは、どいつもコイツも！　グルだったのである。

はじめての謁見

何だか穏やかじゃない会話が続いている。

「恐れながら、自身こそがこの魔界の王だと主張しております」

「……少し留守が長過ぎたか。これ以上図にのられて和を乱されるも厄介だ。……潰すか？」

ダーリンが魔王をやっています。

玉座の手摺に気だるげに膝を付き、見下ろすような横柄な態度のダーリン。跪き胸に手を添えながら謙虚な姿勢の元侍従長。

力関係が一目瞭然なこの図は、始めこそ驚いたが、まさしく王者の貫禄がでているダーリンをみて納得した。背中越しでもビリビリ感じる威圧感の上に立つ者特有のものだ。

そんなブラックなダーリンも素敵いー！

「にゃー！」

おっと、興奮の余り思わず鳴いてしまった。

今までの張りつめた、どこか好戦的な空気があったという間に消えてしまう。

あ、どうぞ。

あたしに気にせず続けて下さい。

今のあたしはただの猫。魔王陛下のにゃんこでございます。だから物騒な話なんて、関係ない関係ない。

「おや、もしやそちらが噂に聞くレディ様ですか。せつかくです
ので挨拶をお許し頂けますか？」

そうそう。

実は魔界でのあたしの名前は、『レディ』だったりする。

更に説明すると、付けたのはダーリンではなく宰相さんだったりする。

身体中余すところ無く傷だらけだったあたしは、ダーリンと再会して気が緩み、そのままぐっすりと寝てしまい、気が付いたらダーリンの寝室だった。

しばらくダーリンの寝室で怪我の養生をしていたのだが、どうやらその時に、ダーリンは寝室を入室禁止令を発足したらしく、疑問に思った宰相さんが乗り込んできたのだ。

「一体どんな淑女^{レディ}が貴方を虜にしたのかと思えば、これは……」

ボロ雑巾のようなあたしを見た、宰相さんの第一声がそれだったのだ。

まさかそのまま名前になるとは思わなかった。

……誰もが一度は子どもの頃に親に隠れて生き物を拾い、自分の部屋で匿ったりするけれど、まさか魔王陛下にまで当てはまると思ってもみなかった。

そんな子供っぽいダーリンも大好きですが、何か？

あたしが軽く現実逃避しているとダーリンはゆっくりと頷き、玉座を立った。

え、なんでそこでいきなり立つの？

天下の魔王陛下を差し置いて、ふかふかかつ、ゴージャスな玉座に一人だけ座るだなんて、何て恐れ多い。

だが、まさかの魔王陛下の起立にあたしは対処しきれず、いきなり消えた温もりに身体は丸まり、いつもピンっと立った耳は情けないくらいに頭にぺちゅーんとなった。

謁見の間にいるのは、ダーリンとあたしと元侍従長だけではない。実は護衛の人やら、侍従のひとやら沢山いてるのだ。彼等の視線が一斉にあたしに集まる。

しかも、そのほとんどが角が生えてたり鱗がついてたり、一番怖いのは爬虫類の顔で舌舐めずりした人だ。一度だけだったけど、しっかり見ましたよ。美味しそうなんですか、あたし。

「……ミイミイ」

緊張で口を何度かぱくぱくし、やっと出た鳴き声が、コレだった。

あああああ、恥ずかしくって穴に入りたい！ あたしいっついちおう、それでも成猫なのにい！

甲高い子猫のような鳴き声が広間に響く。

助けを求めるようにダーリンに向かって鳴いたのに、肝心のダーリンはあたしを見てるだけで助けてくれない。

あの婚約時代に、あたしを見かける度に顔を綻ばせて寄ってきたダーリンは一体どこに行った？

実際に、今の魔界でのあたしの現状は放置に近い。

たまにダーリンが気が向いたときだけ、壊れ物を扱うようにそっとあたしを撫でてくれるだけだ。

今のダーリンはあたしを見かけても、寄ってくるどころか目を細めるだけ。それも愛情じゃない。例えるのなら観察のそれに近い。

あたしが“猫”だからではない。

例え、“人”のままだとしても、恐らくダーリンは同じく視線を寄越したことだろう。

ダーリンは、何故かあたしとの愛のメモリーだけ、綺麗さっぱりと忘れてしまっていたのだから。

チクリと胸が痛む。

「ほっほっほっ、そう固くならなくとも。私は魔神六柱の一角を担っておりますネメシスと申します。以後お見知り置き下さいませ、レディ様」

猫にまで丁寧に挨拶をしてくれるなんて、さすがダンディーかつ紳士だ。お陰で少し雲行きの怪しかった心中が晴れる。でも、子どもの名付け親の権利は譲りせんよ？

「レディ様のお陰で魔界は晴天続き。穏やかな日々が続いております。僭越ながら魔界の住民を代表して、この場でお礼申し上げます」

？

よくわからないけど、晴れ女、もとい晴れ猫ってこと？

「今回は急な場でしたゆえ、気が利かず申し訳ない。レディ様は最近地上から来られたとお聞きしましたが、魔界の魚……、ドン・グラなどはもうご賞味なさいましたかな？」

なにそれ、美味しいの？

「ほっほっ、どうやらレディ様は気になるようすな。それでは次

回に持参致しよう」

あたしへの謁見？ も無事に終わり、再びダーリンが玉座へと戻る。玉座とダーリンの隙間はやっぱり安心する。安心するが……助けてくれなかった怨みを込めて、ダーリンに初めて猫キックを食らわした。

ちよっと痛そうに身動いたダーリンに少し溜飲を下げた。

猫の心、飼い主知らず

「ニャツニャツ」

「フシャー！！」

「にゃおくん」

あつちでも猫！ こつちでも猫！猫猫猫！

千年の歴史を持つ魔王城にて、前代未聞、未曾有の猫ブームの到来していた。

ブームの火付け役はもちろん、あたし。

あたしの初めての謁見から数日が経ち、魔界の至るところで噂となっている。

“魔王陛下は猫が好き”

噂を聞き付けた人達が、競うようにこぞって“猫”という“猫”が魔王陛下へと献上された。

あたしと同じ地上の猫から「うっふん」と色気たっぷりの猫耳なお嬢さん方まで、ありとあらゆるにゃんこが魔王城へと集結したのである。

特に猫耳のお嬢さん方なんかは歩く度にしっばがくねくねと扇情的にくねり、正直目のやり場に困る。

最初こそあたしは、猫好きのダーリンが他の猫を可愛がったりするのかと、心中穏やかでは無かった。だが、新参モノの猫も必要以上ダーリンに近付かなかったし、ダーリンもあたし以外の猫を寝室に入らせたりはしなかったのである。まあ、あたしが勝手に寝室に入

っていつているだけなのだが。

ダーリンの寵愛はあたしのモノよっ！

と思ったり、気分が良かったのも事実である。

そんな訳で、魔王城が猫の巣と化しても、さほど変わり無い日常が続いた。

いつものように目を覚ましたあたしは嘆く羊美少年を華麗にスルーして謁見の間へと足を運ぶ。

いつものようにピタリと立ち止まり、異変に気付く。

ダーリンの玉座の両脇に、お色気たつぷりの猫耳お嬢さん方が侍っていたのである。

「……………」

思わず責めるようにダーリンを見詰める。

「……………」

対するダーリンは観察するような視線。

「ゴホンッ」

宰相さんの促しでひとまずお互いの視線は外れた。

いつもならあたしはそのままダーリンと玉座の間に入り込み、再び昼寝をするのだが、

「……………」

このままダーリンの膝の上で丸くなる。

ダーリンの視線が頭に刺さるが、そこは異論を認めない。

猫耳を両脇侍らしているのに、あたしが膝にいるのは許されないというのではないはずだ。いや断固として譲るものか！

そのときだった。

何気なく視線を流したあたしは右脇のお嬢さんと目があつた。

お膝の上のあたしとバチつと視線が絡む。

「……………」

「……………」

一瞬の邂逅。

——フツ

勝ち誇つたように弧を描く口元。見下すような、いや、明らかに見下している目。

今、あたし見て笑ったわね！？

しかも、何か凄く馬鹿にしたでしょ？！？

「シャッ！」

あたしは喉から鋭い鳴き声で威嚇する。

一喝した相手は猫耳のお嬢さん……………ではなく、ダーリンにだ。

お嬢さんに挑発的に嘲らわれ気が立っていたあたし。あろうことが、ダーリンはあたしの尻尾に、全身毛を逆立て二倍に膨れ上がってい

たあたしの尻尾にいきなり触ったのだ。

……確かにふわふわのあたしの尻尾は魅力的なのは認める、認めるが今は勘弁してほしい。

怒られたダーリンは気まずそうに手を定位置に戻した。

あたしはというと、思わずダーリンに牙を剥いてしまい、ちょっと自己嫌悪に陥ってしまった。猫耳への苛立ちを反射的には言え、ダーリンにぶつけてしまったのだ。とりあえず自分の手を舐めて気持ちを落ち着けようとするが上手くいかない。

こういう時は気分転換に散歩をするに限る。

ト、っと軽く足音を立てて床に降りる。

背中に感じる視線を振り払い、謁見の間を後にした。

つまり逃げてしまったのである。

逃げた先にも、悩みの種は待っていた。

災難は続くものである。

今、あたしの目の前に立ち塞がるのは、あたしより身体が一回り大きい白い毛並みの猫。

たくさん猫たちがダーリンへ贈られてきた次の日。魔王城では至るところでキャッツファイトが繰り広げられた。

実はこの猫は、この魔王城にたくさん贈られてきた猫たちの頂点にいる存在。つまりはボス猫なのである。

あたし？ もちろんそんな物騒な催しには参加していません。

しかし、今のあたしは猫。

キャッツファイトに参加していないあたしの順位は、この猫社会では限りなく低い位置にあった。

ボス猫である白猫に遭遇してしまったら、目を会わせずに速やかに縄張りを出なければならなかった。

普段のあたしなら、そそくさと退散するところ……なのだが、

「フーッ！ フーッ！！」

「フウウウッ！！」

虫の居所が非常に悪かった。

かくしてコングが高らかに鳴り響いた。

ような気がした。

その日の夜、ダーリンが妙に豪華な食後のおやつを持って寝室に帰ってきた。

どうやらダーリンには全てお見通しらしい。愛の力！

明日から！

この魔王城で！

あたしは真の女主人として、堂々と闊歩できるのだ！！

ふっ、と黄昏る。

まあ、なかなか大変な激闘だった。引つ掻き回して、噛み付いて、飛び付かれつかれて組んず解れつ……

だが、所詮はあたしの敵では無かったという事だ。

明日という日が待ちど惜しくて仕方がない！

この際謁見の間での事はお互い水に流す。
早速労って貰おうと、上機嫌で出迎えた。

「……レディ、傷が」

あたしの名誉の負傷に気付いたダーリンは、どこか心在らずと呟く。
んもうつ！

あたしは鼻息荒くダーリンの足に刷りよる。
一対一の時くらいは、きちんとあたしを見て欲しいものである。

あたし、頑張ったのよ！

今日の武勲を必死にアピールしていたあたしは、いきなり足からひ
つぺがされた。

いきなりの少々乱暴な動作に、抗議をあげようと顔を上げ、ダーリ
ンの顔を見て固まる。

鋭く軽薄に細められた目に感情を映さない闇色の瞳。それなのに薄
く開いた唇には笑みが僅かに浮かんでいた。

怒ってる。

なんだか、よくわからないけどダーリンが怒ってる……！

まさかのダーリンのお怒りだ。怒ったダーリンは半端なく怖い。
やがてあたしの全身を舐めるように眺めた後、「にゃ」と鳴きかけ
て固まった半開きの口のあたしを置いて、ダーリンはどこかに出掛
けてしまった。

パタンつと存外丁寧に閉じられた扉がダーリンの姿を隠し、怒りの矛先が自分で無かった事に、あたしはホッと息を吐く。
しばらくすると、真つ青な顔をした羊美少年があたしの傷の手当てにきた。

その日の天気は珍しく雷が鳴っていた。

「レディ様、それは陛下の……って、あれ？」

ダーリンのマントの上でたつぷりと熟睡したあたしは、グルーミングもそこそこに早速出掛ける。

羊美少年はマントを手に、何だかちよつと物足りなさげにあたしを視線で追ってきたが、ごめんね、今日はちよつとかまってあげられないのよ。

ととととつ、と軽快な足取りで廊下を歩く。いつもならば足音なんて立てないが、今日ばかりは特別だ。
なにしろ女主人のお通りである。

と、あれ？

異変に気付く。

昨日あんなに城内にそこかしこにいた、猫猫猫！ が綺麗さっぱり姿が見えないのである。

「？」

しばらくウロウロと魔王城をさ迷ったが、猫がいたという痕跡すら見つからない。

なんだか小鬼に悪戯されたような気分だ。

「ああああ、しまった！ レディ様ー！ 出てきて下さい、陛下に殺されるうー！」

物騒な羊美少年の声に何事かときた道に戻る。

あっさりと捕獲されたあたしは再び寝室へと戻されてしまった。

「今日は1日、ゆっくり休んで怪我を養生するようにつて陛下からのご命令ですからね！」

むう、今日は大事なデビューの日なのに。でもダーリンの願いな
ら仕方がない。デビューは明日にしよう。

不満と了承の意を込めて、パタンパタンと尻尾で床を叩く。
足の怪我を舐めながら、渋々羊美少年を見上げた。

「心配しなくても陛下がレディ様が安全に過ごせるように、猫をち
やんと追い出してくれたんですよ」

な ん で す と ？ ！

あたしの華麗なお披露目の、無期延期が決定した瞬間だった。

「僕は始めから、ちゃんと言ってたんですよ。仔猫ならともかく成
猫は縄張り意識が強いからやめた方がいいって、それなのに……
つて、レディ様！？ マントの端っこ咬まないで下さいい！？」

この日、あたしは一日へそを曲げた。

黒革の日記帳

随分と長い、眠りについていたようだ。

未だに頭がぼんやりとし、思考の収束がつかない。

しかし、魔力の枯渇の状況から手っ取り早く回復するために、確か地上で休息を取っていたと記憶しているのだが、いつの間に魔界へと帰ってきたのだろうか？

留守の間はシュベルが万事計らってくれていたようだ。

無限と続く界の狭間にて、空間を押し広げ、そこに世界を創ったのは、たしか千年ほど前の事だ。

千年。

それほどの月日が経ったと考えると、少々感慨深いものがある。

空間を押し広げた当時こそ、歪みが絶えなかったが、千年経った今では世界と随分と安定している。

長く留守にしようとも魔界も城も大事なく機能している。

永きに渡り世界の礎となってきたが、そろそろお役御免となる日も近いかもしれない。

だが、もしそうなたら、

——俺には一体、何が残るのだろうか？

猫を拾った。

鬱々とした気分のまま散歩出掛けた先で拾った。

本来、動物には好かれない。

内に内包する巨大な魔力を恐れ、近付こうともしないのだ。それなのに、恐れるどころか懐く。

一身に慕ってくる猫にくすぐったい気持ちになりながら、同時に締め付けられるような不可解な胸の痛みも感じる。

気になるのは、猫の瞳。

あの緑色の瞳を見てみると、妙に暖かい穏やか気持ちになると同時に、決り出したいという狂暴な矛盾した気持ちに駆られる。

二面に別れた感情は、責めぎあう度に結局決るのはいつでも出来るという結果で決着をつける。

しばらく寝室で匿うことにしたら、あっさりシュベルに見つかった。せつかく帰還したばかりで、何かと慌ただしい城内に気を遣ったというのに。

新たに部屋付きとなったヴォレのアビルに、レディの世話を任せる事にする。

アビルによって綺麗にされたレディの毛並みは蜂蜜色だった。（猫の名前はシュベルが付けた）

清潔になった毛並みを撫でると、気持ち良さそうに目を細める。

少ばかり慎重に撫でてしまうのは、幼い頃に魔力の暴走で簡単に死んでしまった飼い犬を思い出すからだ。

強い魔力も加護も持たない動物はあまりにも脆い。

シュベルに「そろそろ俺は不要か」愚痴を溢したら、

「なにを言っているのですか！ 一時でも私が魔界を治められたのは、貴方がちゃんと基盤を固めたからこそです！ それでも私がどれ程薬湯を消費したことか！」

と、怒られてしまった。

まだまだ隠居はできないらしい。

せっかく良い連れが出来たと思ったのに。

炎獄地方のとある領主のひとりが、かの地を平定したらしい。

炎天の地の者は、燃え盛る大炎のごとく気が荒い。放置すれば燃え尽きるまで周囲を巻き込み、やがて無と返すだろう。

業火になって火の粉がこちらに及ぶ前に、速やかに鎮めなければならぬ。

ネメシスに消火の任を授ける事にした。

そういえば先日、アビルの父親リムトンが挨拶にきた。

以前、眠りにつく前に部屋付きだったリムトンは、怪我が原因で引退する事になったのだ。

残念な旨を伝えると、緊張している息子を示し、

「ビシビシ鍛えてやって下さい」

と朗らかに笑っていた。

ヴォレ族の特徴として、非常に防御に特化しているが故の抜擢だろう。

いざというときには盾にしろという事だ。

リムトンが怪我をしたと言うことは、……そう言う事なのだろう。

追記

ネメシスとレディを引き合わせた。

仔猫の様に鳴くレディに、いつものように好き勝手にしているふてぶてしさは欠片も見当たらない。

謁見の後日。

ネメシスは宣言通り、レディに魔界の魚、ドン・グラを持ってきた。魔界を代表する珍味の一つであるこの魚は大変に大きく、レディ独りでは食べきれぬ物ではないので城の者にも分け与える事にする。

早速レディにドン・グラを与えてみたが、小声で喋るような鳴き声が聴こえてきたので驚いた。

口一杯に頬張り「あうあうあう」と声を出しながら夢中で貪っていた。

あっという間に器を空にし、更には催促するように口をぺろりと舌

舐めずりし、こちらを見詰める。

どうやら大変お気に召したらしい。

あまり甘やかすのはいけないと思うが、どうもこの目で訴えられると弱る。

シュベルに見つかりと小言を言われるので、自分の皿から調理されたドン・グラを落とした振りをして分け与える事にする。

偶然落ちたものが、偶然レディの器に入っただけだ。
何も言われまい。

余った分のドン・グラは、食べずに長期保存に適した燻製にするように指示しよう。

近頃、更に空間の歪みが目立つ。

報告を聞くだけでも、無視できない状況が多い。

もしかしたら誰か上位の存在が、魔界に出入りしているのかも知れない。

歪みが増えれば、それだけで魔界の存続が危なくなる。安定しているようで、まだまだ不安定な世界だ。

領主の離反に空間の歪み。

まだまだ問題は絶えそうにない。

猫という猫が献上されてきた。

多少反対があつたがせつかなので、全て受け入れる事にした。

レディの遊び相手に丁度良い。

レディは気位の高い猫だ。

気分の悪い時は誰であろうと容赦はしない。
触ったら牙を剥かれてしまった。

引っ掛かれこそはしなかったが、素っ気なく何処かへ行つてしまつた。

新たにやって来た猫は、どれも恐れ近付きもしないのに、やはりレ

ディは普通の猫ではない。

損なった機嫌を直して貰うために、今晚はおやつでも持っていこうと思う。

しかし残念ながら、ドン・グラは燻製過程の真っ最中で諦めざる負えない。

その日の夜、おやつの匂いを嗅ぎ付けたか、あっさり機嫌良く寄ってくる。

少々拍子抜けしたが、すぐに異変に気付く。

レディが怪我をしていた。

事の次第を確認する為に部屋を後にする。アビルにレディの手当てを命令しておいた。

事態はあっさり解明される。

猫という猫は、その日の内になんとかするように命じた。

これで大丈夫だろう。

猫は大きな獣が苦手です。

——ゴオオオオオオオ！！

吹き荒れる雨風の中、やつの事で見つけた木のうろに身を滑り込ませる。

頭と両足を縮めて何とか入れる隙間は窮屈で仕方がない。けれど雨ざらしよりも遥かにマシだ。ブルリと全身を震わせ、顔が届く範囲で毛並みを整える。

しつとりと雨で濡れた毛のせいで、身体が冷え込んで仕方がない。

あたし、晴れ猫じゃなかったの？

そんな事を思いながら、強くなってゆく雨足を絶望的な気分で眺める。

そもそもの原因は、考えナシに飛び出していったあたしにあった。

事の始まりは、ダーリンの執務室での出来事だった。

くん、くん、くんくんくん……

ダーリンのニオイが、いつもと違うことに気がついたあたし。

一度この事に気付くと、疑問と妙な不快感に苛まれるまま、本能に身を任せてダーリンの体をニオイまくっていた。

くんくんくんくんくん、くんくん……

途中にあたしの身体をダーリンに擦り付けたりして、ニオイを消そうと試みたりしたのだが、まったく効果なし。

「……………」

すると、何を思ったのかダーリンが持っていた羽ペンをあたしの鼻先にチラつかせたのだ。

「！」

目の前でチョロチョロする白い羽先。

ぴぴーん！ とあたしの耳が上を向く。

ニオイが気になってるのに、羽についつい目が釘付けになってしまふ。ムズムズと身体中が疼く。

こうなると居ても立ってもおれず、羽目掛けてビシバシと手を繰り返す。

ああ、猫の本能……

行ったり来たりする羽を追い掛けて、やっぱりあたしも行ったり来たり。

しかも執務机の上なので、あたしが書類で足を滑らしたりぶつけたり散らばったり。

ダーリンが仕事をしている間は、出来るだけ迷惑かけないように大人しくしよう、と決めているあたしとしては、今の状態はかなり不本意な状況だ。

あーん、ダーリン。そろそろあたしヤバイと思う！

はやく止めないとあの人が、例のあの人があたし達を引き裂いてし

まう……！

どうあっても止まらない本能。

止めてくれないダーリン。

…… ちょっと悲劇のヒロインぶってもいいじゃないですか。

「ウオツホンっ」

そらきた。

喉を含んだ咳払いにダーリンもあたしもピタリと止まる。

振り向くと、やっぱり例のあの人、宰相さんがいた。

この人の存在は、いろんな意味恐怖だ。

まず、名前が覚えられない。

とても長つたらしいだとか、同じ単語が言葉遊びのように続くだとか、そんな理由ではなく、ちょっと別の事を考えたりすると本気で頭から抜けてしまう。

もちろん、それは名前に言えたことではない。

姿形に対しても一緒だ。どんな髪の色だったか、どんな容姿をしていたか、これまたさっぱり覚えていられない。

そんなあやふやな存在感の人なのに、存在そのものは頭から消えない。

存在は認識できるのに、形が記憶できない。

つまり、仕事中にダーリンとイチヤついていると、絶対に邪魔しにやって来るおっかない人がいるのは覚えているのに、それがどんな人だったのか全くわからないのだ。

こうして対峙していると、はつきりと思い出せるのに。

「何をやってるんですか、貴方は。せつかく人が選り分けた書類を散らかして！ だいたいこの場所は執務処理の場であって猫と遊ぶ

場所ではありません。

遊ぶのは結構ですが、時と場所を考えて下さい」

「すまない、レディが構って欲しそうにしていたんだ。……つい」

あ！ 今あたしのせいにしたわね、ダーリン。

「猫のせいにするとは、それでも魔界の王ですか」

そうよそうよ！

言っとくけど、始めに妙なニオイを付けて帰ってきたのはダーリン
なんだからね、この浮気者っ！

宰相さんに叱られたダーリンは、心なしかしょぼん…としている。
魔界で一番権力があるのはダーリンだけど、一番偉いのはきっと宰
相さんだと思う。

「貴女も邪魔するのなら出て行って貰います」

次に溜め息を付きながら、あたしを掴もうとする宰相さん。

やはり、そうきたか。だが、甘い！

宰相さんがその行動に出ることは、最早あたしは予測済み！
猫特有のしなやかな体を駆使してスルリと身を避ける。

「……………」

目標を仕留め損ねた宰相さんは、再び手を伸ばし捕獲を試みるが、
——スルリ。

いくら宰相さんと言えど、あたしの許可なくいきなり抱っこして良いのはダーリンだけです。

繰り出される不埒な手を、右に左に時には股下くぐり抜け、避ける避ける避ける！

あ、ちょっと楽しくなってきた。

逃げ込んだ調度品の間をすり抜けて、再び宰相さんの手の届く範囲にわざと身を晒す。

さあ！ 次はどう出るんですか、宰相さん。

「俺に仕事をしろと言いながら、お前はレディと遊んでいるのか」

「大変不本意ですが、遊んでいると言うより、遊ばれているような気がします」

じりじりと距離を詰めてくる宰相さん。この人、結構負けず嫌いかも知れない。

あたしも接近してくる宰相さんに備えて、身を低くしいつでも逃げるように足に力を込める。

「……レディ」

宰相さんとの攻防を終らせたのは、鶴の一声ならぬ、ダーリンの一声。

低くて迫力のある声は、あたし達を静止させるのに十分な威力を持っている。

あたしを見ながらトントンと机を叩く。

来いってことね、これは。

もちろん行きます。

貞淑な妻（予定）は普段は夫（予定）に従うものですから。

「にゃ」と返事をしながら、ダーリンの側におすわり。

満足気に細められる闇色の目。うつすらと笑みをかたどる薄い唇。間近で見たダーリンの微笑。

とっても眼福な光景に、思わず喉がゴロゴロなる。

視界の端には納得いかないとばかりの表情の宰相さん。

あたしに向かって伸ばされるダーリンの手。だがその手の二オイを嗅ぐと、脱線に脱線を重ねたが全ての事の発端を思い出した。

ふんふんふんふん、ふんふん……

あたしの様子に気が付いたのは宰相さんだった。

「……ああ、ひょっとして匂いが気になっているのでは？」

その通りです。この二オイいったい何？

「匂い？」

「獣は匂いに敏感ですからね。例えば他の動物に触ったとか、ありませんか？」

「そういえば、ロッテに触った」
ゆっくり立ち上がるダーリン。

「……どちらへ？」

「休憩だ」

有無を言わさぬ口調で言い放つ。

こうなるとダーリンは誰にも止められない。

宰相さんもそれを解っているので、あっさりと引き下がった。

扉まで進むと、いきなりの展開について来れずに、机の上におすわりしたままのあたしを見詰める。

あ、ついて来いってことね。

もちろん行きます。

貞淑な妻（予定）は、…以下略。

小屋ぐらいの、黒い大きな生き物がいる。

初めて訪れる魔王城の城門前にそれは、いた。

ダーリンの猫になって、それなりの時間が過ぎたあたしだけれど、行動範囲は驚くほど狭い。

ダーリンの寝室、謁見の間、執務室。この三部屋とそれをつなぐ廊下の一角でたまにお昼寝。それが今のあたしの世界だった。

そのどれもが限られた者しか出入りしない場所ばかりで、あたしは安全な猫ライフを送るためにも、その限られた区域を出ることはなかったのだ。

ダーリンが一緒とはいえ、不安はある。

そんな矢先に、例の大きい生き物と遭遇したのである。

いや、遭遇というのはおかしい。ダーリンの目的は初めから、この

巨大生物だったのだ。

それは、分厚い金属でできた門を護るように、巨体を横たえいる。山のような大きなそれが、生き物だと判断できたのは、呼吸音と共にゆっくりと上下する背中と、ダーリンの身体から臭った二オイとこの巨大生物から同じ二オイがしたからだ。ダーリンに気付いた巨大生物がギョロリと六つの目を向ける。

……六つ？

あたしがその事実を理解する前に、六つの視線があたしを捉えた。全身錆びた鎧のようにギツと動かなくなる。

昔、本で読んだ事がある。

下手な魔術や刃物を跳ね返す、光沢をもつ黒い毛並み。荒い気性と非常に強い縄張り意識を持ち、許可無く足を踏み入れた者をその鋭い牙で容赦なく引き裂いたという、三つ子の首をもつ狼。地上では大昔に絶滅したといわれている。

おおお、魔王様にくつついて魔界で生き残ってたわけですね。で、その魔王様の愛犬はケルベロスですか。さすがです。でも、正直怖いんです。近付けさせないでー！

頭の中でぐるぐると考えが駆け巡る。

後になって思い出せば、三つ子の目に好意の光が気がないでもない。

だが、いかんせん、姿が不味かった。

あたしを一飲みできる大きな口。しかも三つ。

鋭く並んだ大きな牙。しかも三つ。

あたしを簡単にペチャンコにできるぶつとい前足。これは二足。

脳裏に甦るのは、巨獣に追い回され命から逃げ延びた日々。逃げ込んだ先にも、無慈悲に迫り来る牙。

大型の猛獣魔獣が闊歩する魔の森で、あたしという存在は食物連鎖の中では最下層に位置するという厳しい現実を、嫌というほど思い知ったのだ。

眼前に迫る巨大な犬の顔。

鼻息だけで体中の毛がそよぐ。

恐らく舐めようと開けられた口の中に、鋭く存在を主張する牙を見付けて、あたしはとうとう恐慌状態に陥ってしまった。

「ふぎやあああああああ！！」

気づけば形振り構わず駆け出してしまっていた。許容範囲を超える生き物との対峙に、考えるよりも身体が勝手に動く。

つまり、あたしはあたしよりも遥かに巨大な身体を持つ獣に対して、自分の自覚している以上に恐怖心を抱いていたのである。

このときのあたしは、ただひたすら遠くに、この場から逃げる事だけしか考えていなかった。

以上が事の顛末である。

お迎えは静かにお願いします。

逃げ込んだ森のうろの中で、あたしはひっそりと息を潜める。
相変わらず雨は止まない。

本当なら今すぐ来た道を戻りたいのだが、ここの雨ばかりでは身体が冷え込んで満足に動くことも出来ない。何より濡れるのは嫌だ。
大人しく助けを待つ事にする。

ちゃんと探してくれてるよね。……ダーリン。

ほんのちよっぴり、不安になる。

すっかりあたしの事を忘れたダーリンの中では、あたしは相変わらずペットのままだ。それなりに大切にされてる気はする。

けれど、ペットはペットだ。

探すほど愛着が無いかも知れない。

始めから、そんなに興味が無いかも知れない。

孤独に晒されて、負の感情がじわりじわりと頭の中を侵食する。

何であたしの事、忘れちゃったの……？

あたしと過ごした日々は忘れても良いような記憶だった？

そりゃあ、魔王様だもんね！

得体の知れない女との関係なんて、尊い王様には汚点にしかならな
いよね！

酷いよ、そんなの嫌あ。

あたしのこと、忘れないで……

きゅっと目を瞑る。

丸まる猫の身体。今は自分の温もりしか感じない。

「！」

地面にくっ付けているお腹からビリビリと震動が伝わってくる。初めは細かく震えるだけだった地面はやがて地響きとなり、大地を強く振動させる。

……近付いてくる！

身を固くする。

逃げる隙は無い。

出来るだけ息を潜めて、見付からないように遣り過ごすしかない。周りの雑草を踏みあらしながら、姿を現したのはツチアラシと呼ばれる魔物の大軍だった。血の気が引く。

猪のような姿の魔物だが、身体は二回りほど大きいし、牙だって太い。顔を覆う毛はなく、代わりにゴツゴツとした皮膚が剥き出しになっている。ひとたび走りだせば、木だろうが岩だろうが人だろうが、前に立ち塞がるものを薙ぎ倒し、碎きながら走り通す。

「コフーっ、コフーっ」と荒い鼻息が耳に付く。

「おおい、猫いたかぁ！？」

野太い威勢の良い声に、思わず身体が飛び上がりそうになる。

「いえ！ どこにも見当たりません。もう少し手前の方でしょうか」

それに答えて、別の声が響いた。

驚いた。

ツチアラシの上には誰かが乗っていたのだ。

どうやら一頭一頭に騎乗しているらしい。ツチアラシしか目に入っ

てなかったし、見上げるにもツチアラシが大きすぎて気付かなかった。

殆どの者が「猫ー」と叫びながら周りの探索を開始する。

幸か不幸か、ツチアラシに乗る彼らの視線は、木と地面の小さな隙間に隠れるあたしを見付ける事は出来なかった。

「猫ー！　ってどんなやつだっけ？」

「蜂蜜の毛皮だつてよ」

「蜂蜜？　なんか甘くて美味そうだな。種類がクインビーなら最高だなっ」

「馬鹿っ、陛下が大っ変に可愛がってんだよ。食ったら殺される所の騒ぎじゃねえよ」

「じゃ、愛玩動物ー！　出てこーい！」

「非常食ー！」

誰だ今、非常食って言ったやつ！

それにしても、もしかしてあたしを探してる？

出ていこうか、どうしようか悩んでいると、ツチアラシの血走った目がギラリとこちらを向いた。

ひええっ！　こっちみた！？

「ブヒッブヒュヒュッ」

騒ぐツチアラシを騎乗している誰かが、鬣を軽く叩いて宥める。しばらく興奮していたツチアラシも、構って貰えないと理解したのか大人しくなった。

ただし、視線はこちらを向いたままだ。

「少し戻るぞー！」

再び来たときと同じように地響きを立てて、来た道に戻って行った。せつかく迎えらしきものが来たのだが……

む、無理……！ あれは無理いい！

じつとあたしを見ていたツチアラシ。

あの目は絶対あたしを食べる気満々だ。ノコノコ出ていったら絶対にぱくりと食べられる、そんな気がする！……非常食ですから。

あたしの中に、追い掛けるという選択肢は綺麗さっぱりと消え去っていた。

でも、陛下って言うてた。ダーリンのことだよな？

ちよっとはあたし、自惚れてもいいかなあ？

探してくれてた！ その事実がじんわりと暖かく胸に染みる。ちよっと迎えがアレだけど……

沈んでいた気分があっさり浮上した。

我ながら結構単純な猫かも知れない、と思ったあたしでした。

一難去って、また一難。

毛並みを逆らって舐められるような奇妙な感覚に、背中がぶわりと逆立つ。悪寒が走る。

それは勘。ただの予感だ。

しかし、幼い頃から戦場に身を置いた者としては、時としてその勘は予知にも等しい効果を発揮する事をあたしは知っている。生きと死ける者全てに、等しく備わる生存本能だ。

落ち着かない妙な感覚に苛まれる中、あたしのヒゲが反応した。

ザアザアと雨が葉を打つ音に紛れ、確かに何かが近づく気配を感じたのだ。

何かは分らない。

耳を澄ます。――何かが近づくような怪しい物音はしない。けれど、あたしのヒゲは確かに異変を感じとったのだ。

猫になって一番有難かったのは、あたしの両頬に生えたヒゲの存在だ。

このヒゲ、かなり高性能。

微細な空気の振動を察知して、いち早くあたしに伝えてくれる。相手が音を消して忍んでくる場合に効果を発揮するのだ。

ただし、湿度の多い場合はほとんど性能が落ちる。今の状況はまさにソレだ。

頼りのあたしのヒゲは、雨で湿気が多くて上手く空気の振動を掴めないのだ。

初めは勘違いかと思ったが、身震いするような悪寒とヒゲによって、あたしは確信した。音も無く近づく何かは、速度はかなり遅いが、真っ直ぐにこちらを目指してくる事を。

……これは、まさかあたし、狙われてるんじゃないですかね？
食べられる覚悟でお迎えの前に出た方が良かったかしら。

逃げ場のない木のうろに留まるのは危険かも知れない。

少し考えて、うろの中から這い出る。

頭の中で逃げ道の順序を組み立てながら、何気無く何かが来るらしい方向を見て、全身の毛が一斉に逆立った。

ぶよぶよのドロドロとした、粘液の塊のような物体が視界に映る。成人した肥満の男性が脳裏に甦る。うん、丁度それくらいの大きさだ。

これも無理いいいっ!!

踵を返しあたしは猛烈な速度で森の中を駆け抜ける。

あたしは見た。

ゼリー状の体の中にあつた、“食べかす”を。

白い剥き出しになった恐らく骨にドロドロに溶かされた恐らく肉。

捕まれば、最後。

あたしの無惨な末路がそこにあつた。猫の視力はとっても良いのです。

こ、ここまでくれば、大丈夫よね……

幸運な事に、ノロノロとした移動速度のドロドロはあつという間に見えなくなつた。

鬱蒼と茂る草に身を隠しながら辺りを伺う。

乱れた息を整えながら、見つけた大きい葉っぱの下で雨宿りする事にした。

辺りに危険はない。

さらに幸運な事に、吹き荒れる雨が他の獣からあたしの気配を巧く隠してくれたらしい。

ホッと息を付いたのも束の間、しばらくして再びあたしのヒゲが異変を訴えた。

お馴染みの悪寒とヒゲの反応。ゆっくりとした速度で、物音を立て

ず移動するソレ。

この反応には覚えがある。

さっきのドロドロ！

慌ててその場を離れる。

再び危険の有無を確認して息をついたら、またヒゲが異変を訴える。その後もあたしがどんなに逃げても、ドロドロは遅い速度で確実に追い掛けてきたのである。

そろそろ限界に近い。

ずっと逃げて走ったばかりの身体は、あちこち痛いし、だるくて重い。

なにより精神的な疲弊が激しかった。

逃げてても逃げてても追いかけるドロドロに、あたしは成す術もなく体力だけが削られていった。

思えば、他の獣に遭遇することは無かったのは、もしかしてこのドロドロから隠れているのかも知れない。

あたしは考えを巡らせる。

今は木の上で休息中である。

よく考えれば、今まであたしは地面に近い場所ばかりに隠れていた。

ドロドロはいつもズルズルと静かに地面に這うように進む。

ひよっとすれば、高い場所は大丈夫かも知れない。

そんな一縷の望みに縋るように木に登ったのだ。

この木の上で、あたしの最後の砦だ。

ぴぴっとヒゲが反応する。

ごくり、と喉を鳴らす。

——来た！

這うように進むドロドロは、音も立てずに真っ直ぐにこちらを目指す。

上からだとよく分かる。

草を踏みついたり押し退けているのではなく、すり抜けているのだ。一度ゼリー状の体に取り込んで、そのまま移動して、そのままの状態で身体から吐き出す。

だから音が聞こえないのね。

距離があるからか、冷静に観察できた。

あたしの場合のはあのまま取り込んで、きつと吐き出さないに違いない。

ゆっくり近付くドロドロは、あたしのいる木の下で動きを止めた。しばらく周辺をうろつくとさ迷いう。

そのドロドロの様子にあたしはホッと息を付いた。

やっぱり高い所は駄目みたい。

けれども、このままドロドロが去ってくれないと、あたしは動く事は出来ない。さて、どうしたものか、と思案しつつ体力回復に専念する事にした。

んん？

にゅーっ、と触手のようなものが視界の端を過る。

ギョッとして慌てドロドロを見ると、細く長く体を変化させてゆっくりと高度を上げ、あたしに接近してきたのだ。

「ここ、これ以上近付いたら、痛い目みるからね！」

「シャツシャツ」と牙を見せてドロドロ触手を威嚇する。

あたしは出来るだけ身体を低くし、じりじりと後退する。このまま近くの木に飛び移り逃げる予定だ。

不意にガクンと体勢を崩す。

後ろ足に、ねつとりとした感触。

ドロドロ触手が絡んでいた。

しまった、前のドロドロ触手は罠だったんだ！

爪を立てて、必死に木にしがみつく。

引きづり降ろされたら、最後だ。

無惨な末路はすでに見た。

あんなのになりたくない、絶対に！

「にー！！にー！！」

あたしの声で他の魔獣が集まろうが、この際何でも良い。

この状況から逃れられるのなら、何だっていい。

あらんかぎりの声を振り絞って、助けを呼ぶ。

助けて、助けて！ 師匠！ 姫様！ 誰か、助けて、ダーリン！！

——グアア、アアルルル！！

突如聞こえた獣の咆哮。

雨で湿気る空気を切り裂くように、喉の奥から放たれるそれは聞くものの戦意を根こそぎ奪う威力を持っていた。

あたしが失意の底に叩き込まれ無かったのは、触手に意識が行ってしまっていたからだ。

下で「ぶちゅっ」と何かが潰れるような鈍い音が聞こえた。

足の束縛が無くなり、枝の上に身体が安定する。

安心したのも束の間、大きな身体の何かが、軽々とあたしがいる木の枝まで飛び乗ったのだ。

見事な跳躍をしてみせたのは、——虎によく似た魔獣だ。

逞しい四肢に立派な赤褐色の毛並み。

虎によく似た顔に、鋭い牙。そして額にはもう一つ、目が開いていた。

「ふ、フウーっ」

新たな敵の登場に全身の毛を逆立てて、あたしは少しでも身体を大きく見せる。

今すぐ逃げたい。

けど、きつと逃げられない。

矛盾した気持ちに恐慌状態に陥りかけたあたしだが、すぐに頭の中が真っ白になってしまった。

圧倒的な力の差に、すっかり気の動転したあたしは、うっかり足を滑らせ木から落ちてしまったのだ。

「みい……」

あまりの衝撃に思わず呻いてしまう。

びろーん、と首の皮が引つ張られる感覚。それと同時にあたしの身体が地面に浮いた。

何とあたしは、虎モドキにパクつと首根っこを食わえられていたのだ。

ぶらぶらと揺れる、あたしの身体。

相変わらず雨に身体は濡れているが、何故か妙な安心感に包まれ、身体力が自然と抜けてしまった。

端から見れば、親虎が虎の仔を運んでいるかのように見えることだろう。微笑ましい光景だ。癒される。

いやいや、騙されないであたし！

きつと巢に持ち帰って食べる気なんだから！

「にー！ にー！」と暴れまくるあたしを我に返らせたのは、予想もしない声だった。

『食わねえつつの』

『！？』

もごもごと何かくわえているかのような、くぐもった声に抵抗を止める。

虎さん、今、喋りましたか？

虎さんと仔虎サイズ

「絶対に、貴女に好意を抱いているのよ」

鏡に映る少女は悪戯っぽく笑う。

流れる水よりも澄んだ印象を受ける銀色の髪。

その艶やかな髪に櫛を入れながら女もまた笑った。

「まあ、姫様。侍女たちの語る恋物語の聞きすぎですわ。あた……、私のような一介の侍女よりも殿方の興味は、日に日に美しくお成りにあそばせる姫様にこそ向いているのですよ」

「私の前ではそんなに堅苦しく話さないで、ね。……私に矛先を向けようとしても駄目よ？ あの人は今まで少し怖い雰囲気の人だったけれど、貴女に話すようになってからは、とっても素敵な人になったわ」

女は鏡に映る自分と目が合う。

干した藁のような色の髪は、手入れこそ欠かさないが、取り立てて称賛されるような綺麗な色でもない。

特別目の引く美人でもない、可もなく不可も無いごく平凡な顔。

鏡越しに、少女と目が合う。

好奇心に煌めく青い瞳は、さながら研磨された至宝よりも美しい。

珍しい高貴溢れる銀色の髪。瑞々しい果実のような唇。

女は思う。

鏡に映る少女にこそ、主役に相応しい。

「だーから、それは恋物語の聞きすぎっ、です！ 彼女たちの夢が詰まったお話は色々とは現実的なんです。姫様みたいな美人ならともかく、あたしが、」

「笑うと、とても美人だね。それに時々すごく、艶っぽい」

「つ、つや?! どこでそんな言葉を覚えたんですか!」

「本当よ。時々ゾクツて背中がなるわ」

ああ、それは多分……、あたしの魔力に当てられたから、かもしれない。

女はそう思ったが、口にはしない。口にしたところで、夢をみる乙女の目を醒ますことは出来やしない。
ならば、そのまま醒めない夢を見続ける方が幸せだろう。ただ、その恋物語の役者が台本通りに動くかは約束しかねるが。

有り得ない、し、あつてはいけない。

誰か一人を懇意にするなど。

あたしは誰にも囚われたりは、しない。

「み、にゅー」

あたたかい。

沈んでいたあたしの意識がゆっくりと浮上する。

『可哀想に、まだ目も開いてない、…、でしょうっ…』

「集落で…、…のか?」

すぐ近くで聞こえる会話に、あたしの耳がピクピクと反応した。
なんだか久し振りに昔の夢をみた気がする。

『それが、どの家の子でも無いみたいで。……困ったわ』

「それなら俺が面倒見る。もともと俺が見つけたんだしよ」

『あらやだ。散々手を焼いてくれたやんちゃ坊主が、そんなこと言うなんて、大人になったのねえ。でもその子、女の子よ。女の子はみんな繊細なのに、がさつなあんに面倒見きれるかしら』

「はあ〜？ 皆？ 一部は除くんじゃねえの？」

『言ったわね、あんた。まあ、良いわ。困った事があつたら言いに来なさい。』

…… あら、まあまあ！ 目が覚めたのね、大丈夫？ 怖かったでしょう！』

うつすらと目が開いたあたしに気が付いた声の一人が、あやすように絶妙な力加減で優しく撫でてくれた。

口調から推測するに、きっと女の子の人だ。

全身が暖かいふかふかの何かに包まれている感触。人肌のそれは、とんでもなく気持ち良くて安心できる。

心地好い微睡みの中で、あたしは暖かい何か頬を寄せる。

『あらあら、くすぐつたいわ。……やっぱり私が面倒見ようかしら。女の子、欲しかったのよねえ』

「俺が面倒見るって言うてんだろが。……おい、目が覚めたか。名

前は何ていう？」

あたしを見下ろすのは、見たことも無い赤毛の男だ。気の強そうな眉に力強い眼光。鍛えられた体は兵士と言うよりは、健康的な褐色の肌に相まって、どこかの街のガキ大将のような印象を受ける。

はて？ この人どこかで会ったような……

何か引つ掛かるような疑問を頭の隅に追いやりながら、無駄だと思いつつあたしは名乗る。

『レディ』

にやん言葉、頑張つて訳して下さい。

本当の名前を名乗ろうかと思ったが、魔界でのあたしの名前はレディだ。

ダーリンもあたしを探してくれているし、それならお迎えに来やすいように名前は変えるべきじゃないと判断したからだ。

うん、あたし森で迷子になっちゃったのよ、確か。

そこまで思い出すと、急速に頭が働きます。

そして、ドロドロに襲われて、食べられそうになった所に――。

ふと、あたしを包むふかふかに目を向ける。

三つの目とパッチリ目が合う。

あたしの全身はピシリと硬直した。

『遠慮しなくて良いのよ、母親だと思って甘えて頂戴、レディ』

ペロリとあたしを舐めるのは、あたしを助けた虎さんにそっくりの

虎さんでした。

えええええ？

……ちよつと頭を整理する時間を下さい。

あたしが三ツ目の虎さんの集落に保護されてから、数日がたった。
この虎さん、魔界ではヴェルガーという種族らしい。

虎に良く似た外見と、額に魔眼と呼ばれる三ツ目の瞳を持っている。
体毛には電気が貯まりやすいらしく、体内に電気を貯める電気袋があるらしい。

あたしがお世話なっているのは、その集落の姉弟、エネリとガウディ。
イ。

ガウディはあたしを助けてくれた恩人もとい、恩虎、いや恩ヴェルガーだ。

同じ猫科（？）だからか、あたしの言葉もしつかりと理解してくれている。

基本的にはガウディに面倒を見てもらっているあたしだが、集落の周辺を見回る役割を持っているガウディ出かけるときにはエネリの所に預けられる。

その見回りの時に「にーにー」鳴いていたあたしを発見したというのが、事の真相だった。

働かざる者、食うべからず。

そんなあたしのお仕事は、エネリの子供たちの面倒を見る事だ。

ポワポワの毛皮にあたしより少し大きい身体の四ツ子ちゃんたちは、観ている分には愛くるしいが実際に面倒見るとなると、これまたかなり大変。

『れでい、あそんで』

『あそんであそんで』

舌つ足らずのおねだりは最高に可愛さ満点だが、全匹わんぱく坊主ばかりだ。

一匹が飛び掛かってくると、もう一匹、また一匹と狭い部屋の中で纏れるようにしてじゃれ合う。

コロコロ転がったり、追いかけたりの激しい全身運動に、魔王城ではほぼ1日寝てばかりだったあたしは、あつという間に全身が筋肉痛になってしまった。……歩く度にギシギシ痛い。

天気が良ければ、外でも遊ぶのだがあいにくの嵐続き。

ガウデイいわく、雨の日には例のドロドロが活発になり、増殖を繰り返しながら個体数が増えるので、とても危険らしい。……確かに物凄く危険でした。

「外には出るなよ」と口を酸っぱくして注意されている。もちろん出ませんとも。

たつぷりと遊んだあとは、みんな木の弦で編んだ籠ベッドでお昼寝の時間だ。

こうなるとわんぱく坊主もしばらくは目を覚まさないで、その間はあたしも一緒に休む。

籠ベッドにぎゅうぎゅう詰まった仔虎の隙間に、身を滑り込ませてあたしもお昼寝。

「レディがうちの仔の面倒見てくれてるみたいで、ホント助かるわ。最近雨続きで退屈そうにしてたのよ」

『ん、雨どころか嵐だよ。……陛下の機嫌が悪いんだろうな。なんか向こうであつたのか?』

「さあね、長なら何か知ってるかも知れないけれど」

うとうとしていると二人が帰って来たらしい。

エネリが人型をとっていて、ガウディが虎さんになっている。初めに見たときは逆のパターンだ。

人型のエネリは、これまた赤毛のグラマス美女だ。野性味溢れる妖艶さがまた堪らない。キュツと締まったお尻なんて、女のあたしでもゴクリと唾を呑み込む色っぽさだ。

『ん、まあ、まあ？』

『いにのにおいもする』

『ねみゆい』

もそもそと覚醒しだす仔虎たち。

みんな思い思いに伸びしたり欠伸したりするので、籠ベッドの中で寝ていたあたしも足が当たったり尻尾が当たったりと、もみくちゃにされる。

『帰るぞ、レディ』

『うー、まだ眠たい』

眠気まなこで渋っていると、パクつと首根っこをくわえられる。

ヴェルガーの集落は巨大な岩場の中を大胆にくり貫かれて出来ている。

エネリの巣穴とガウディの巣穴は姉弟だけあって虎穴の中で繋がっているから、あたしが歩いても別に危険は無いのだから、何故だかいつもくわえられる。

『ちよつとちよつと、あたし自分で歩けるわ』

ブラブラ揺れながら抗議を唱えるも聞き入れられた事はない。

『まだ、目も開いてねえ子供が遠慮なんかすんな』

あつという間にガウディの巣穴に到着した。

べろんべろんと舐められ、あたしの蜂蜜色の毛並みが綺麗にされる。

身体を舐め回されるなんて、ダーリンにもされた事無いのにー！

いつもいつもされっぱなしのあたしだが、今日こそは断固拒否しなければ！　ダーリンに合わせる顔が無い。

『じ、自分でできるってば！　あたし目ならパッチリ開いてるでしょよ』

『何言つてんだ、思いつきり閉じたまんまだろ？』

再びべろんと額を舐められる。

ん？

……何だかものすごく、嫌な予感がする。

一つの可能性にぶち当たってしまったあたしは、しどろもどろにガウディに聞いてみた。

『あのおう、それは皆さんの額に開いてる第三の目の事でしょうかね』

『？』

『おう。いるんだよなあ、たまに。目も開いて無いのに妙にませてる大人ぶってる奴が』

……一生、開く予定はございません。

やっぱり五月蠅いお迎え

ヴェルガーの子供に間違えられてました。

なんてこった。

生まれてこのかた、順調に育ってきたあたし。

急激にボーンっと育つ場所も無かったけれど、成人してから子どもに見られた事は無かったあたしは、その可能性に気付くのに時間がかってしまった。

そりゃあ、たくさん食べ物おねだりしましたよ？

そりゃあ、仔虎ちゃん達と一緒にぎゅうぎゅうに籠ベッドに詰まっていたりしましたよ？

そりゃあ、寝ぼけてENERGに擦り寄りながらゴロゴロしに行っちゃいましたよ？

はうああああああー！！

思いつきり間違えられるよ、それ！

穴があつたら入りたーい！！

恥ずかしさに身悶えてたあたしだけれど、それ以上に憐れだったのがガウディだった。

『えっ、スマン？ えっ、いやっ、えっ、えっ？ いやっ、俺そんなつもりは！』

と、言いながら座りながら後退。あたしと距離を取った。器用ですね。

可哀想なくらい慌てながら弁解してくれた。

本来、ヴェルガーに問わず獣が獣をべるんべろん舐め回す行為はよっぽど親しい相手にしかない。それこそ、家族だとか伴侶だとか。そうとは知らずに成人女性にべるんべろんとしてくれました。

まったく、もう！

でも、心配してくれて面倒見てくれて、文字通り猫可愛がりしてくれた訳だし。

うむ。この際、目を瞑ろう。

あたしが成人してる事と猫という種族だという事が知られても、生活にそんなに変化は無かった。

ガウディとエネリは、あたしを子ヴェルガーだと思って保護してくれた訳で、もしかすると放り出されるかも！と戦々恐々としていたのだが、そんな心配も杞憂に終わった。

あんなに良くしてくれた恩ヴェルガーさん達に、少しでも不信を抱いたあたしが恥ずかしい。

変わった事といえば、成猫と知られた日を境に、あたしはエネリの巣穴で仔虎ちゃんと一緒に寝ることになった。……エネリは「娘が増えたわ！」と凄く喜んだが、恩ヴェルガーには何も言っまい。

唯一の不満は、ダーリンに会えない事ぐらいだ。

普段は思い出し、ため息つく暇もない。

仔虎ちゃん達とお留守番という充実した日々を送るあたしは何かと忙しい。体力も使う。

けれど、ふとした時に考えてしまう。

仔虎ちゃん達は散々暴れ回ったあと、ゼンマイの切れた玩具の様にぐっすりと眠って動かなくなる。

そんなとき、唐突に出来てしまうのだ。

誰にも邪魔される事のない時間。

あたしだけの時間。

乱れた毛並みを整える。

ペタリと床に寝そべる。冷たい床は、お世話で火照った身体にちょうど良い。

ぽっかり空いた空虚の時間。

背中がさみしい。

いつも不器用にも撫でてくれる手が無いことに、悲しくなるのだ。どうしようもなく。

ダーリンに会いたいなあ

でも、いない。ここには、どこにもあたしのダーリンはいない。

この世界にあたしは独り。

そんな錯覚にブルツと身を震わせ、暖かさを求めてぎゅうぎゅうに詰まった籠ベッドにあたしも身を寄せるのだった。

変化は訪れる。

今日も仔虎ちゃんの面倒を見たあたしは、くたくたになって集団で

籠ベッドで寝ていた時だ。

エネリでも無く、ガウディでもない。

知らない気配にあたしの意識は一瞬で覚醒する。

仔虎ちゃん達に埋もれた体勢のまま、あたしの身体が緊張した。

「ただいま、帰ったよ」

知らない声。

「うふふ、お帰りなさい」

顔を上げずに感覚だけで辺りを探っていたあたしは、その後から聞こえたエネリの声に緊張を解く。

エネリの声はいつに無く柔らかい。

端切れの音が静かな空間に響く。会話が途切れる。

とても甘い雰囲気だ。

何をしているかは野暮なので、様子を探らない。

大丈夫、この人は敵じゃない。

害は無いと判断したあたしは、再び寝入る事に決めた。

「ずいぶんと休暇が遅れたのね。私、忘れられたかと思ったわ」

「僕が君と子供達の事を忘れるはずないよ！……実はこうして帰ってこれたのも仕事だからなんだ。城では随分大変な事になってる」

「あらやだ、そんなに？……大丈夫なの？」

「こうして君の顔と子供たちの顔を見るくらい、目を瞑ってくれる

さ」

優しい沈黙が支配する。

「……陛下がそんなに無茶をなさるなんて、驚いたわ」

「いや、陛下は何も仰らないよ。ただ、知っての通り嵐だからね。天気が陛下の御心を現してるから、周りが何とかしようと奔走してるわけさ」

「ふうん。あなたは私と違って、弱っちいから無茶しちゃ嫌よ?」

「酷いね、引き際ぐらい心得てるさ。さあて! 僕の可愛い子供たちはみんな大きくなったかな」

ひょいっと、こちらを覗き込む気配。

一瞬の沈黙。

後、しきりに何か数える気配。

ゴクリと喉がなる音が聞こえた。

「うん? ……エ、エネリ? 何だか一匹増えてないかい??」

「そうなの。待望の女の子よ! 可愛いでしょ?」

「へ、へえ? ……こういう、色って、蜂蜜の毛並みって言うんだよね?」

「そうとも言つかしら?」

「……いつからウチに?」

「最近よ。ガウデイが森で助けたのよ。迷子みたいなんだけど、この辺りの子じゃないみたいで、ウチで面倒みてるのよ。あ、この子のサイズで大人なのよ。驚いたわ、猫っていう地上の種族なんですって！」

「ねねね、猫お！？」

狼狽した様子に、あつという間にまったりとした雰囲気がぶち壊された。

……うるさい。

あたしはムクツと起き上がり、パッチリ目を開く。

薄い茶色の瞳と目が合う。

ボサボサとした纏まりがない茶色の髪に、仕立ての良い服。

ヴェルガーの皆さんは露出度の高い服ばかりなので、身体を殆どを服で覆う男は新鮮に見えた。魔王城、というか一般的にはこれが普通だけれど。

あたしにとっては久々に見る、せつかくの一般的なのに、服に着られている感が凄く強いので残念な感じだ。

ヒョロつと背が高いだけに、無駄にひ弱な印象も受ける。

「み、緑……。た、大変だ……！」

どこか野暮ったい雰囲気漂う男が、後退りながら巢穴を飛び出して行った。

「どうしたのかしら？ あの人ったら」

『エネリ、今の誰？』

「私の、だ　ん　な！」

野性味溢れるセクシー虎女のエネリと、さっきのダサイ……ごほんごほんつ、気弱そうで引きこもりみたいな人が！？

それでも、物凄くあまーい雰囲気が漂っていたので、関係はすこぶる良好のようだ。

『……ふ、ふうん』

人の好みは、人それぞれ。

あたしは何も言うまい。

あ、でも馴れ初めぐらいいは聞きたいかも！

好奇心が疼くが、エネリの様子をみていればわかる。

これは第三者、ガウディにでも聞いた方がいいと思う。

聞けば最後、寝かせてもらえない気がしたので、あたしは懸命に興味無い振りをした。

……あたしの勘はよく当たる。

翌日、ツチアラシが攻めてきた。

いや、やってきた。大漁に。

ヴェルガーの集落の周りにツチアラシの群れができた。

ツチアラシはとっても怖いけど、ヴェルガーの巣穴は大岩の高い位置にあり、奴らは中には入れない。まさしく高見の見物で暢気に構

えていたあたしだが、失念していた。
奴らの上に騎乗していた人達が数人、集落に入ってきたのである。
ゆっくり観察できたのは、そこまでだ。
今のあたしは、それどころではない。

『にいいぎゃあああー！』

バリバリと爪を立ててあたしは抵抗する。

「レディ、さまあゝ？ 帰りまちゅよゝ？」

エネリの旦那と格闘中のあたし。
巢穴のすぐ外にはツチアラシの二オイをプンプンさせてる人が待機している。

あたしはすぐにピンときた。

あたしをツチアラシ集団に差し出すつもりね！

あれは駄目。絶対にイ・ヤ！ とあたしは抵抗する。

ツチアラシ怖い。大きい獣怖い！

迎えに来たのはわかるが、その迎えの人が安心できるかと考えて答えは、否。

信用できない人と一緒にツチアラシの傍に近寄りたくない。乗るだなんて言語道断、あたしは断固拒否する。

喧嘩売ってんの？ その赤ちゃん言葉。

と、売り言葉を買えないくらい必死だ。

逃げて逃げて逃げまくること、とうとうエネリの旦那が籠ベッドの中であたしを捕まえたが、対してあたしは爪を立てて抵抗。

「大丈夫、大丈夫。怖いことなんて何もないでちゅよ。」

『いいやああ！　って、言ってる、でしょ！』

嫌がっているのに、ことごとく無視。

抵抗も虚しく、籠ベッドに引っ掻けた爪を一本づつ剥がされていく。

——グルルルル……

地の底から響くような唸り声が突如部屋に響く。

まるで背中に冷水でもかけられたように冷気が走った。背筋が凍るというのは、きっとこの事を言うんだらう。

旦那さんと仲良く一緒にビクウツと身体が跳ねた。

音の方向には、赤褐色の力強い毛並みを持つ大きな虎の魔獣。

「ガ、ガウディ……？　な、何でそんなに怒ってるんだい？」

ガウディは音も立てずに近くに寄ると、旦那さんの方に顔だけ向けて、いきなりクワツと牙を見せた。

思わずあたしから手を放す旦那さん。

ふー、助かった。

安堵するあたしはガウディにパクつと首根っこをくわえられ、そのまま虎の子よろしく運ばれていった。

罾と猫

『大丈夫か？』

『ありがとー。た、助かったかも』

首から下の身体をぶらぶら揺らしながら、あたしはガウディの巣穴に避難した。

巣穴同士が直接中で繋がっているから、外に待機していたツチアラシライダーの皆さんにも鉢合わせない。
最適な避難場所だ。

ぽすつと下に降ろされたあたしは、次に労るように身体を舐められる。

うーん、見事なまでの子ども扱い。

成猫とバレた後も表面上は大人扱いしてくれるガウディだが、こうした所々にまるで子どもと接するかのような態度が現れる。

なにくれと構ってくれた理由を聞けば、初めは通常のヴェルガーの子どもに比べて、ひ弱な体型のあたしを心配してくれたの事だったらしい。

それはそれは。

確かに大きさこそ、それほど変わりはないが、仔虎ちゃんとあたしの足を見比べてみれば、その差は一目瞭然だ。

仔虎ちゃんの足はしっかりとした骨太な足だ。対してあたしの足は小さく、仔虎ちゃんの半分の太さしかない。

これは成長後の大きさの差に関係しているのだろう。

残念ながら、どうあがいてもあたしはこの大きさが限界で、仔虎ちゃん達は今後によきよき大きくなるに違いない。

『つたく、いきなり何だってんだアイツ』

アイツとはきつとエネリの旦那さんの事だろう。

思いきりあたしを子ども扱いどころか赤ちゃん扱いしたエネリの旦那さん。許すまじ。

けれど、今はツチアラシの恐怖の方が強い。

『こつちに来たりしない……？』

『それはない、例えエネリの番で^{つがい}あってもここは俺の場所だ。エネリならともかく許可無く入るとどうなるか、ヴェルガーじゃなくても分かる常識だろ』

やはり虎の魔獣なだけに、ものすごく縄張り意識が強いのだろうか？首を傾げていると、苦笑いしながらガウディが教えてくれた。

『もともと俺らの種族は魔界にバラバラに散って生活してたんだよ。集落ができたのはつい最近。あんまり他者を受け入れることには慣れてない。』

それが集団で生活するようになったんだ。そのときに定められた暗黙のルールが、他人の巣穴には絶対に入らない』

『入ったらどうなるの？』

ガウディが牙を剥き出しにして笑つ。牙と共に野生の本能が剥き出しにされた壮絶な笑み。

『——死だ』

あたしにも、おすわり後退が出来ました。

『おいおい、そんなにビビんなよ』

いたいけなニヤンコをあまり驚かさないうで欲しい。

思わず隅っこで縮こまってしまったあたしをガウディが尻尾で誘い出す。

目の前で興味深い動きをするふさふさに、あたしはたちまち虜になつてじゃれつく。

ああ、本能……

逃げるふさふさを追いかけて、あつという間に疲れてしまった。

対してガウディは余裕綽々。尻尾しか動かしてないから、それも当然か。

でも、やはり疑問が残る。

他者を受け入れ難いのであれば、ヴェルガー同士でさえ入るのを躊躇う巣穴にあたしを連れてきてくて、なおかつ面倒見てくれたのか。

『なんであたしを助けてくれたの？』

『ヴェルガーの子どもに見えた事は知ってるよな』

あたしは頷く。

さも当然の事のようにガウディは続ける。

『子どもは宝だろ?』

べろんと舐められる。

何だかまた、成猫なのを忘れられてる気がする。どこまでも、子ども扱いなあたしだった。

それに命が救われたのだから、もう文句は言うまい。

いいニオイがする。

ガウディの巣穴に籠るあたしの鼻先を掠めたのは、とんでもなく食欲そそるニオイだった。

いやいや、絶対に出ないわよ。

自分に言い聞かせるように頭を振る。

今は見回りに出たガウディに口を酸っぱくされて注意された。

あたしさえ出なければ大丈夫、だそうだ。

『それでもね、もし、あたしが出なくても、ガウディが留守の間に誰が入ってきたら……』

『誰かが入ればニオイですぐに分かる。絶対にソイツは逃がさない』

だ、そうです。

そう言ったガウディはやっぱり壮絶な笑顔でした。

頼もしい限りです。おすわり後退!

そんなあたしに早くも危機が訪れた。

勘違いしないでほしい。

あたしは毎日たっぷりご飯を食べさせてもらっている。決してお腹が減っている訳ではないのに、凄く美味しそうな二オイで口の中が涎でいっぱいになってしまった。ぺろりと口を舐める。それくらい異常な、食欲そそる二オイなのだ。気になって気になって、おちおち昼寝もできない。

見るだけなら、大丈夫よね？

チラッと確認したらすぐに引込む。よし、それで行こう。

香しい二オイに惹かれ、巣穴からそつと顔を出す。

恐る恐る周囲を見渡すと、二オイの正体は呆気ないほどすぐに判明した。

ドン・グラ！

魔界のお魚。あたしの大好物だ。

いつだったか、ネメシスが謁見の間での宣言通りあたしにお土産として献上してきたものだ。

ドン・グラだわ、わーい！

って、ノコノコと誰が行くものか！

巣穴からほんの少し離れた場所に、これ見よがしに置かれたドン・グラ。あの香りは燻製に違いない。

豊潤にして濃厚でありながらも、舌先を憐る上品な味わい。一度食べたら癖になるあの魔性の歯ごたえ。

ご丁寧にも皿の上に、まるで食べてくれと言わんばかりに惜しげもなくその姿を晒して鎮座している。

切断面が艶やかに輝く切り身の堂々たるその様は、威厳さえも感じ

させる。

罨だ。罨に違いない。

ドン・グラに釣られて出ていったら最後。

あたしがあのドン・グラを、まずはじめにニオイを楽しんで一思いにパクつと口にして、切り身を口に含みながら舌先を転がして味わって、切断部分からまた旨味が染み出すドン・グラの燻製を噛んで噛んでまた味わって――

.....

あたしとしたことが。

焼いてよし、煮てよし、炙ってよし、生でもよしと三拍子ならぬ四拍子揃った高級食材の出現に動揺してしまったようだ。とにかく食べている間に捕獲されるに違いない。

ぴつとヒゲが反応する。

あたしが巣穴から姿を見せたことで、何者かが少し動いたらしい。やはり待ち伏せされている。

こんな子供騙しに引つ掛かるあたしではない。

巣穴へと身を引き返そうとして、足を止める。

それにしても、堪らないニオイだ。食べたいなあ。

まあ、ニオイくらいなら減るものでもないし、近づくわけでもないし、少しくらい楽しんでも損はない。

せっかくなので、よりニオイを楽しむ為に目を閉じて鼻をすんすんさせる。

あー、いいニオイ。

すんごく美味しそう。

食べたい、ドン・グラ食べたい。

食べたい、食べたい。

いいニオイ。

やっぱり食べたい。

食べたい、食べたい。

食べたい、食べたい、食べた——パクっ。

おいしい！

「それ、今だ！」

『！？』

視界が真っ黒に覆われる。

ニオイだけニオイだけと言いつつ無意識のうちに近づいてしまった
あたしは、あっさり捕まってしまった。

なんたる失態。間抜け過ぎて言い訳もできない。

「ふー！ ふ、ふにー！」

ちゃっかりドン・グラを食べ終わったあたしは必死に暴れる。

なにか布の様な袋に詰められてしまったらしい。

ゆっさゆっさと揺れる感覚に胸が気持ち悪くなってくる。

「大変……す！」

「はぁ！？ 何考え……あの……！」

布越しに伝わる世界が何だか騒がしい。

「ふぎゃー！」

ここぞとばかりに、暴れまくる。

痛ったい！？

お尻をぶつけて痛さに悶える。

いきなり袋ごと床に置かれた様だ。いや、あの衝撃は落とすに等しい。

信じられない。か弱い女性に対してなんという暴挙。

こうなったら、絶対に引っ掻いてやる！

毛を逆立てながら、袋から這い出たあたしは思わず目を疑う。

一番、会いたかった人。

すぐ近くに佇む。

漆黒の髪と瞳を持つ、闇を纏う人。

あたしのダーリン。

リボンをめぐる攻防

あたしは駆け出す。

「にゃあん、にゃあん！」

ダーリン目掛けて一目散に駆け出す。

足にぶつかる様に身体を擦り寄せる。

しばらく周りをくるくる回った後、前足を上げて立ち上がる。

あたしの意図を理解してくれたダーリンは、すぐにしゃがんでくれた。

「にゃー、にゃーあん」

端正な顔に頬を寄せて、今まで会えなかった分も合わせて舐めまくる。

で、あれ？ ダーリンさつきから何にもしてくれないけど、そんなに心配してなかったの？

ふと、気が付いたあたしは頬ずりを止めてダーリンを不安げに見詰める。

ダーリンは僅かに顔を緩ませて、優しく一撫でされた後、ひょいと抱き上げられた。

あ。

あたしが落ち着くのを待ってくれてたわけね。

余りにも冷静なダーリンの反応に、形振り構わず飛び出していったあたしは恥ずかしいと感じてしまう。

本音を言うならもう少し熱烈に喜んで欲しかった。

ダーリンが歩く度に、人垣が見事に割れて道が出来る。

人混みの中から、真っ青な顔のEneriが飛び出してきた。

『Eneri、ありがとう。やっとお迎えが来たの』

「えっ？」

あたしがEneriにお礼を言つと、一瞬虚を付かれた様な表情をした。

「大丈夫だよ、Eneri。こっちへおいで。……失礼致しました、陛下」

Eneriの旦那さんが優しくEneriを諭す。

ダーリンは特に気にした様子もなく、奥に用意されたふかふかの椅子に座った。

両脇にはツチアラシライダーの皆さんがダーリンを守るように待機。わらわらと集まり膝を付くヴェルガーの皆さん。

息を切らして入ってきたガウディが、Eneriに素早く取り抑えられ、姿勢を低くしたのが見えた。

ヴェルガーの集落広場が、あっという間に謁見の間みだいになった。

「今度は我らヴェルガー集落へようこそおいで下さった」

ヴェルガーの真ん中にいる、一番大きな体の人が口を開くと、皆一

齊に頭を下げた。

「そう固くならずとも良い。今回の訪問はただの視察だ。紙面の報告だけでは全ての現状など到底理解出来るものではない。集落が出来てまだほんの十数年、だいぶと様になってきたようだが、不自由はないか？」

「おかげさまで順調です。全ては陛下のお力添えあってこそ。我ら一同、感謝しても仕切れぬほどでございます」

難しい話が始まってしまった。

思わず欠伸が出てしまう。

ダーリンはあたしを迎えに来てくれたのではなく、どうやらもともと視察にきたらしい。

偶然に感謝しよう。

神様、ありがとう。

といつてもあたしの知っている神様は皆当てにならないけど。

生活状況や付近の様子、最近のヴェルガー誕生など難しい話をひとしきりし終わった後、ダーリンはふと思いついたかのように、綺麗なリボンを取り出した。

ん、何？

うとうとしかけてたあたしは瞬きを繰り返す。

目にも鮮やかな美しいリボンが、あたしに御披露目するかのよう広がられた。

これは、まさか！

眠気が綺麗さっぱり吹き飛ぶ。

ダーリンからのプレゼント！

興奮のあまりに椅子から降りたり登ったり、降りたり登ったりを繰り返す。

わぁー、素敵！

青空のように染め上げられた光沢の布地に、金色の刺繍が施されている。真ん中には透明感のある紫色の石が付いており、石の留め金はあたしの毛が絡まらないように考えて造られているみたいだ。早速ダーリンが着けやすいように、おすわりをして背中を向ける。

ね、ね、はやくつけて？

チラチラと振り向くあたしの熱視線に、ダーリンは満足したような顔であたしの首にリボンを通す。

何だかすごく、くずったい。

首周りにリボンが優しく擦れる触覚的なくずったさもあるが、あたしが感じたくずったさは気持ちの方だ。
何だろうか？

嬉しさと同時に気恥ずかしさも込み上げ、二つの気持ちが胸の中で混ざり様々な思いに変化する。

期待、惑い、歓喜。

そして生まれる、暖かい感情。

胸を打つ動悸。

トクントクンといつもよりも速く脈を打つ。

……どうしよう？　今すぐく、抱き付きたい。

人のままだったなら、あたしの顔はきつと真つ赤に染まっていた事だろう。

それに人前で自分からダーリンに抱き付き胸に顔を埋めるだなんて、そんな恥ずかしくてはしたない事、絶対にできない。

猫で良かった。

ふわふわとした熱に浮かれ、振り向いた。

視界を掠めた光景にあたしの身体が固まる。
思わず目を疑う。

なんで？

『……………』

かたむすび！？

ギュツと固く、素早く二回結ばれたであろう結び目には、あたしの毛が巻き込まれて大変な事になっていた。オマケとばかりに左右には余ったリボンがびろーんと垂れ下がっている。

しかも振り向き様にそれがぺちつとあたしの身体に当たった。

なんて色気の無い結び方！

なんだかもう、色々と台無しだ。

さすが魔王陛下の不器用さには畏れ入る。あまりに男らしくて涙が出てきそうだ。

いやいや、なんで固結びなの！？

こんなリボンを首に結ぶのなら、蝶々結び。これ、絶対に譲れません。

そんな結び方だとすぐに外れる？ そんなもの、ちょっと工夫すれば大丈夫だ。初めから蝶々結びに固定したものをリボンに縫い付けでもいい。

色々出来るものだ。その気があれば。

とにかくこれは却下。

あたしはすぐに外しにかかる。

後ろ足を使って、控えめにちよいちよいつとりボンの結び目を弄るが思うように上手くいかない。

「レディ」

諫めるようなダーリンの声。

もちろん無視します。

貞淑な妻は普段は夫に従うものですが、これだけはいただけません。貞淑な妻にだって譲れないものはあるのです。

そう、ダーリンに貰ったからこそ妥協はしたくない。綺麗に可愛く着けたいのだ。

プイッと顔を背けて、再びちよいちよいつと結び目を弄りだす。

何度も弄ったせいか、やっと結び目が解れてきた。それにしても、巻き込まれた毛が痛い。

仕方ないな、という雰囲気のダーリンは、ひょいっとあたしを抱き抱えると緩んだ結び目を固く縛る。

元の位置に降ろされたあたしは、結び目を確認して思いきり顔をしかめた。

『……ちよつと！』

今度は苛立ちから、激しくちよいちよい弄る。

「レディ、外すな」

『そう言うのなら、ちゃんと蝶々結びにして。信じらんない、なんで固結びなの！』

乙女心をわかってない！

すぐさまダーリンに抗議する。

だが、ダーリンに聞こえているのはいつも低く「うにゃー！」
っというあたしの不満たつぷりな鳴き声だ。

緩んできた結び目に、またもやダーリンがあたしを抱き上げギュツと縛る。

もしも、あたしが自由に動く五本の指があつたのなら「もう、ダーリンだったら不器用なんだから」とかなんとか、幸せそうに苦笑いして自分で直して終わりだっただろう。

だが、今のあたしは猫。

自由に動く指先のかわりに、ぷにぷにしているピンク色のにくきゅうが付いている。

細かい作業にはてんで不向き。リボンの結び目を少し緩めるのも、後ろ足を忙しく動かすかなりの重労働なのだ。

何度か同じ事が無言で繰り返されたのち、とうとうあたしはキレた。

『だから、固結びは駄目って言うてるでしょ！ そんな可愛くない

結び方は嫌ー！』

ベシベシベシベシッ！

あたしのお腹に回されたダーリンの腕に、猫キックを連続で食らわせる。

「このっ、さっきまでは大人しかったくせに。一体何が気に入らない！？ 命令だ、着ける！」

『蝶々結びなら喜んで着けるっていつてるでしょ、ダーリンの馬鹿あー！』

暴れまくるあたしにダーリンもムキになって抑えに掛かる。

負けじとあたしもクワツと牙を見せた。

「……お、畏れながら陛下。レディはリボンを着けるのを嫌がってがつているではありません。結び目が気に入らないと申しております」

第三者の介入にあたし達はお互いピタリと攻防を止める。

みんなが啞然とした表情でこちらを見ていた。

ダーリンがあたしを放す。

そして、すぐ気まずそうに、着席した。あまりの熱戦のあまり立ち上がっていたようだ。

あたしも気恥ずかしさのあまり、顔の毛繕いをして気を紛らわせる。

痴話喧嘩、みられたよ！

しかもかなり低次元の！

ヴェルガーの皆さんはあたしの言ってる事はしっかり理解できるわけ。

会話(?)を聞かれた以上はいつものように、澄ました顔で「我関せず」の姿勢を貫けない。

油断した、思いきり。

魔王城ではあたしのにゃん言葉を理解できる人は居なかったの、いつでも言いたい放題言っていたのだ。

伝わらないもどかしさもあつたが、言いたいことを誰にも気にせず口に出来る環境は鬱憤が溜まらないので、あたしはいつでも気分爽快。

今回もその要領で、思いきり、ぼろカスに、魔王陛下に悪態つき、さんざん駄々を捏ねました。

「レ、レディ」

恐る恐るあたしを呼ぶEneri。

ダーリンとの喧嘩を止めてくれたのはEneriだったのだ。

呼んでくれた事にこれ幸いと、何かと目立つダーリンの傍をそくさ離れる。

傍に近づいて気が付いたのだが、Eneriの顔は緊張のせい少し強張っていた。

額にはうつすらと脂汗が滲んでおり、張り付いた髪がなんとも色っぽい。

不謹慎な事を考えてしまったが、もしかすると具合が悪いのかも知れない。

『……Eneri、調子悪いの?』

「えっ、そんな、事はない、わ」

それなら、良いのだから。
くりつと首を傾げた時に、エネリの後ろの人と偶然にも目が合った。
その人は、何故かビクツと驚いた後、気まずそうにあたしから目を逸らす。

『……………』

何だか急にいけない事をした気分になった。
あたしが目を逸らすと、再度視線を感じた。
もう一度素早く後ろの人を見ると、再び同じことが繰り返される。
後ろの人も、その隣の人も、斜め前の人も。
何故か固唾を飲んで、あたしの一挙一動を凝視している。
まさか、初めから皆さんの視線はあたしを追い掛けていたのだろうか？

きっとダーリンを大勢いる観衆の前で罵倒したことに関係あるのだろう。

視線が痛い。とても。

そういえばダーリンは魔界でとても偉い、魔王陛下だった。
あたしだって仕えていた姫様がいきなり罵倒されれば、殺気の一つ二つくらいは簡単に芽生える。

ダーリンはあたしだけの人、ではなかったのだ。

あたしが知っている魔界は、ヴェルガーの集落のほんの一部と魔王城の狭い一角。

本当の意味で、あまりにもダーリンを知らな過ぎた。

自分の無知に少なからず衝撃を受ける。

一緒に生きる覚悟。“魔王陛下”を愛するという事。

このままでは駄目だ。

漠然とした焦りがあたしに押し寄せる。

もっとあたしは、知らなければいけない。

知りたい。この世界の事を。

キュツと弱く首が締まる感覚に我に帰る。

見れば、エネリはあたしのリボンを蝶々結びにしてくれていた。

『！』

綺麗に結ばれたリボンに、始めに感じた嬉しさが甦る。

『エネリ、ありがとう』

いつものように、すりすり甘える。

一瞬顔を緩ませたエネリは、すぐにちよつと引きつった顔になった。
やっぱり具合が悪いのかも知れない。

それなのにあたしは、大人気なく駄々を捏ねて、わざわざリボン
を結ばせてしまった。

思えば魔界に来てから、いろんな人に迷惑ばかり掛けている。

ダーリンを初めとして、宰相さん、羊美少年。

ガウデイにエネリ。

ツチアラシは怖いけど、迎えに来てくれた人達。

いろんな人の善意によって、あたしは生かされている。

もっと、しっかりとしないと。

猫だという、今の現状に甘えてはいけない。

まずはダーリンのペットという立場から、相棒になろう。

ダーリンは猫に癒しを感じていたわけで、きっとあたし個人に対して癒しを感じたわけでは無いのだ。

ふかふかの毛並みに愛嬌ある動物なんて、それこそ猫以外にも山ほど存在する。

以前に沢山の猫がやってきた時は、奇跡的にダーリンが目移りしなかっただけで、今のあたしの立場はあまりにも脆い。

だから相棒に、パートナーになる。

“あたし”にしかできない事を見つけて、ダーリンに認めてもらうのだ。

一つの決意を胸に固める。

でも、その前に。

うん、仲直りしよう。

まずは、思いきり嫌がって暴れて困らせてしまったダーリンに謝ろう。

ダーリンの方に向き直って立ち止まる。

尊大に組まれた長い足。どこか気だるげに付かれた頬杖。反対側の指ではトントンと一定のリズムで腕置きが叩かれている。

なにより表情が無い。妙にまっさらなのが余計に怖い。

な、何でそんなに不機嫌そうなの？

いや、不機嫌なのは分かる。だってあたし、すごく嫌がったし。猫キックしたし。

あたしが聞きたいのは、それを差し引いても余る、その非常に恐ろしい霧囲気は一体なぜ？ だ。

もしかしてエネリにすりすりしたことが原因とか？

そんなまさか、という思いとそれを掻き消すような過去の出来事が
脳裏に甦る。

そつえば貴方、あたしが姫様姫様ばかり言つてると、よく嫉妬し
てましたね。

仕えている主の事を気にかけるのは、侍女として当然の勤め。褒め
られこそすれ、それに対して拗ねられるなんて、あたし初めての経
験でしたよ。

もちろん惚れられた立場にあぐらをかいていたあたしは「いやん。
可愛いなあ、もう」なんて暢気な事を考えてました。
それがまさかの魔王陛下。無知とは恐ろしい。

さしずめ今回の不機嫌は、いつも自分にしか懐かないペットが、預
かり知らない所で他人に懐いてしまった事に対する独占欲ゆえだろ
う。頼むからその独占欲、少し閉まって下さい。

さつそく先ほどの覚悟が試される気分だ。

意を決してダーリンへと足を進める。

威圧感たつぷりのダーリンの視線にあたしの耳がぺちゅんとなる
が、ここは我慢。あたし、やるときはやる女、もとい猫です。

勇気を出して「ごめんね」の意味を込めて、ダーリンの足に頭を寄
せる。すりすり。

「はあ」とダーリンが溜め息を吐けば、威圧感はあるという間に消
え失せた。

ひょいっと抱き抱えられたあたしはダーリンのお膝に座らされた。
どうやら許してもらえたみたいだ。

「リボンの結び目が気に入らないと、レディがそついったのか？」

ダーリンが問いかけた相手はエネリ。

本当です。

でもそれに関しては十分反省しているし、恥ずかしいので蒸し返さないで欲しい。

「は、はい」

「他には何と言った」

「その、固結びは可愛くない。蝶々結びにして欲しい、と」

だーかーらーやーめーてー

ダーリンは少し考える素振りを見せる。何か思案するように闇色の瞳が伏せられた。

「それはレディと、かなり高度な意志の疎通が出来るという事か？」

「はい。それも魔獣のような一方的な感情の吐露ではなく、お互い会話が成立します。おそらくレディ……様、の知能は我らと同じ高さと考えて間違いないでしょう。地上の種族の事は詳しくは存じ上げませんが、我らと同じ二つの姿をもつ一族の可能性があります」

妙に勿体ぶった動作でダーリンは頷く。

「……興味が出た。しばらく滞在する」

ダーリンの一存で、あっさり滞在が決まった。

あーん、が目標です。

晴れ。

あんなに鬱々とした雨が、あっさり晴れた朝。

くわぁっと欠伸の後は、前後の足を上下から引つ張るような感じで伸びをする。

猫のあたしの身体は驚くほど柔らかい。あっという間に全長が二倍ほど伸びてしまうのだ。

あたしの手がダーリンの頬に触れる。

そう、魔界に来てとうとうあたしはダーリンと一緒にベッドで寝たのだ！

決してやましい事はしていません。

今までは乙女心の準備とやっぱリペットの分際で厚かましいかしら？ と、ご遠慮して床に敷かれたダーリンのマントの上で寝ていたのだが、昨夜勇気を出してベッド上に飛び乗ったのである。

ぽふっと音を立てたあたしを、ダーリンは微笑まし気に見てくれた。これならいけるわ！

心の中で拳を握り締めたあたしは、それでも一緒にの毛布に入る勇氣はまだ無く、枕元の少し離れた場所に丸くなった。未婚の男女が一緒にベッドの上に座るだけでも凄くはしたないのに、一緒に寝るだなんてそんな破廉恥な事、あたしには出来ません。

こんなに近くでゆっくりと、無防備なダーリンを見るのは初めてかも知れない。

またとない機会にダーリンの寝顔を思う存分堪能する。

規則正しく上下する胸。ほんの僅かに開いた薄い唇。通った鼻筋に今は伏せられた瞳。

なんだか、新婚さんみたい。

くすぐったい気持ちを誤魔化すように、ぷにぷにとダーリンの頬をつつく。

まだ眠っているダーリンは、少し眉を寄せながらあたしの手を掴んだ。

ぷに、ぷにぷにぷにぷに

一度力を込めたダーリンは、しばらくの間あたしのにくきゅうを堪能するかのように何度も感触を確かめる。

やがてうつすらと目蓋を開いたダーリンは眠気瞳であたしのにくきゅうを見つめた。

ぷにぷにぷにぷに

再び確かめるように、にくきゅうに力が加えられる。

ちよっ、ダーリン可愛いっ！

誰もが畏れる魔王陛下が、いつも刃物のような鋭い雰囲気纏っているダーリンが、猫のにくきゅうを片手に半分夢の世界。

このアンバランスさが堪らない。この落差は反則だと思います。はい。

ぼーっと半分寝ながら、にくきゅうをぷにぷにするダーリンの図にあたしは朝からメロメロだ。

そういえば、ダーリンがあたしのにくきゅうをこんなにじっくり触ったのは初めてかも知れない。

こんなことなら、もっと早くダーリンにくきゅうを与えればよかった。

ダーリンがこちらに身を乗り出す。背中に少し重たい感覚。

なんと、ダーリンがあたしを寄せて背中の毛皮に顔を埋めているではないか！

余りのドキドキと嬉しさに思わずゴロゴロと喉が鳴る。

今朝は色々と初めて尽くしだ。

「暖かいな。レディはいつも陽だまりの匂いがする」

いつになく柔らかい口調に、何だかあたしまで優しい気持ちになってくる。

いや、ちょっと待て待て。

最近はずっと雨だったのでろくに日向ぼっこ出来なかったのだが。魔王城では毎日のように日向ぼっこしていたので、もしかしたらその時の二オイが残っているのかも知れない。

いやいやちょっと、更に待って欲しい。

あたしが魔王城から飛び出して、もう十数日ぐらい経つはずなのだが、その二オイが残っている？

毎日グルーミングしてたのに！

これは乙女として由々しき問題だ。

今すぐ水浴びに行かなければ！

だが、ダーリンがあたしの背中に顔を埋めているので、身動きが取れない状態だ。

『……………』

ダーリンが嬉しそうなら、あたしも嬉しい。

まあ、いつか。

しばらくして、ダーリンが支度をする。

羊美少年がテキパキとダーリンの準備を整えていった。

あたしは羊美少年にも心配を掛けたようで、久しぶりに顔を会わせた時には「もう、一人で飛び出しちゃ駄目ですからね！」と半泣きで怒られてしまった。

でもその時に何故かまた、おやつを貰った。

ダーリンにくっついてやって来たお城の人達は、何故かあたしに「心配した」等の言葉と共におやつを貢ぐ。

美味しく頂いたので、あまり深くは考えないようにしよう。

「レディ」

ダーリンに呼ばれて顔を上げる。

ダーリンと再会を果して、少し変わった事がある。

「今日は外に見回りに行く。その間は、エネリ・ブラウに頼んだ。行ってくるという」

ダーリンがあたしに喋りかけてくれるようになったのだ。

これはもう、嬉しかった。

可愛がってくれてたのはわかるが、やっぱり態度だけでは不安になる。

初めて喋りかけられた時、凄くはしゃいだあたしを静めるのにダーリンが苦労したのはまた別の話である。

しかし今回は内容がよろしくない。

お留守番通告をされてしまった。

今日もダーリンに付いて回ろうと思ってたのに。

“相棒”としての在り方を模索中のあたしにとっては、あまり嬉しくない状況だ。

でも、貞淑な妻は夫に……、猫のままの今では夢のまた夢の話なのでちよつと封印。

とにかく迷惑を掛けたくないの、大人しくお留守番する事にする。「にゃあつ」と了承の意味を込めて鳴くと、満足そうにあたしを一撫でして羊美少年と出て行った。

眠気に負けたあたしは、しばらくダーリンが寝ていた場所で暖をとる。そのぬくもりが冷める頃、あたしの頭もようやく覚めた。

ダーリンが出ていった後の部屋はなんだか、さみしい。

『……………』

最高だ。

最高の寝心地だ。

『ねえ、ねえ。みんなおいだよ。とっても気持ちいいわよ』

隅っこの方で集団で縮こまっている仔虎ちゃん達に声を掛ける。

『こわい』

『こわあい』

『れでい、それ、や』

『やー』

こちらを見詰める八つの目には確かな恐怖が浮かんでいた。

みんな大好き、籠ベッド。

あたしは今、その籠ベッドを独り占め状態で寝そべっている。

もともと寝心地抜群だった籠ベッドは、あたしの独断によってシーツが代えられ、更に最高の寝心地が約束された。

それなのに仔虎ちゃん達は一向に寝ようとしないう。それどころか非常に怖がって近づこうともしなかった。

あたしは首を傾げる。

本当に最高ののに、——ダーリンのマント。

「ひいひい！？」

引きつった様な悲鳴に振り向けば、エネリの旦那さんがわたたと壁際にくっついていてた。

『何よ、なにか文句でもあるの?』

この人には赤ちゃん言葉で散々追いかけて、あまりいい感情はない。

じとつとした目で見詰める。

「レディちゃまゝ、そ、その下に敷いているのは何かなあ? パパにも見してほしいなあゝ」

うえ!

わきわきと両手を動かしながら迫る旦那さんに、背中が逆立つ。誰がパパなのよ!? と、突っ込めないほど、何だか目が尋常じゃなかった。

仔虎ちゃんの所まで逃げ込む。

「うわあっ!? やっぱり陛下のマント……。な、なんてものを持つてきてくれたんだ」

仔虎ちゃん達の影に隠れながら、そつと旦那さんの様子を伺う。

「け、毛だらけ」

籠ベッドから、せっかくここまで頑張つて引きずってきたダーリンのマントを摘まみ上げる。

いや、それ汚物を摘まんでいるようにしか見えません。何て失礼な人だ。

「不味いぞ。レディちゃまが勝手に持つてきたとは言え、このまま

ここにあれば、絶対お咎めを受けるのは僕……。こうなったらいつそ証拠を隠滅すれば、」

「何をぶつぶつ言ってるの、あなた」

『ままあ』

『エネリ』

『ごはん』

仔虎ちゃん達がぼてぼてとエネリの周りに集まる。もちろんあたしも一緒にだ。

「エネリ、大変だ！ こ、これ……」

「あらやだ、もしかして陛下の？ ……レディ」

『なあに？』

「持ってきたやつなの？」 『あたしのお気に入りなの』

ダーリンのニオイが染み付いたそれは、いつでもあたしを安心させる。

「大丈夫よ、そこに置いておいで」

旦那さんに腰に手を当て指図するエネリは、なんだか物凄く頼りになる雰囲気かでてました。

「レディ、今日は陛下と一緒にいなくてもいいの？」

『今日は長さまと外の見回りに行くんだって。だからあたしはお留守番なの』

「なら今日は、みんなで魔力の扱い方を勉強しましょうか。ほらほら、みんないらっしやい」

あたしは首を捻る。

以前はあたしの中にあつた魔力は、猫になつたせいかな今ではほんの微弱なものしか感じられないのだ。

扱い方ならもう知っているが、元となる魔力が無ければ話にならない。

残念ながら、せつかくのお勉強はあまり意味の無いものになりそうだ。

そんな余り乗り気ではないあたしに気付いたエネルギーがにんまり笑顔で話し掛ける。

「レディ？ 地上にいた頃は魔力があつたのかしら？」

あたしは頷く。

「なら、地上と魔界が別の世界なのは知っているわよね。ここは貴女のいた世界とは理も成り立ちも違うの。当然、魔力の扱い方も体に留める方法も違ってくるわよね？」

『……………』

ええと。

ぼそりとあたしの耳元で囁かれる。

「私たちみたいに、人型とれるかも知れないわよ」『や、やる、あたしやる!』

やっぱり人型でダーリンとイチャイチャしたい。

お食事の時に、あーんってしたり、あーんってされたりしたい。

もちろん今だってあたしは、ダーリンに一方的にあーんってしてもらっている。……ダーリンは手掴みですが、何か？

『頑張つて、あーんってできるようになるわ!』

「……あーん？ 何だか良くわからないけど、目標があるのは良いことだわ」

かくして、あたしの特訓は始まった。

その頃すぐ隣では、エネリの旦那さんが仔虎ちゃん達に拒絶されてシヨックを受けていた。

「パパだよ、忘れちゃったの!？」

『ばあ、こわい』

『こわあい』

あたしを捕獲するときに、仔虎ちゃん達も実は巣穴にいたのだ。いきなりの父親の暴挙に怯えて隅っこで震えていたのである。あれだけ巣穴で暴れて怖がらせたのだから当然の結果だ。

ふふーん

それを横目に、ちょっとあたしの気が晴れたのは言うまでもない。

へーんしん！

エネリから「まずは自分の魔力を感じるところから、始めましょうね」と言われ、現在瞑想中のあたし。

目を閉じて自分の身体の中に巡る内なる力に意識を傾ける。

以前なら意識を向けなくとも感じられたあたしの魔力は、今はこうして集中しなければ欠片も感じられない。

魔界では、ヴェルガーのように獣の姿と人型の二つの姿をとれる一族は、二つの姿の種族と呼ばれる。かなりそのままだが、変な名称を付けられるよりよほど覚えやすい。

その二つの姿の種族の起源は、過去に起こった魔界での深刻な人口減少が原因だそうだ。

多種多様の種族が集まった魔界では、始めは子孫を遺すには当然同じ種族としか遺せなかったそうなのである。

必然的に起こった問題が、魔界の人口低下だ。

そんなとき、種の存続の危機に一筋の光が射し込んだ。これこそが二つの姿の一族の始まりである。

比較的知能の高い獣達が何を思ったか人型をとる事で、同じ人型をとる別の種族と契る事が可能となったのだ。

二つの姿の種族とは、魔界の環境に合わせて見事適応を果たした種族なのである。

よって一般的に魔界では、多種族とも交配可能となる人型をとれるようになる、一人前と見なされるのだ。ヴェルガーにいたっては、額の第三の瞳が開く事も条件となる。きっと他の種族にも色々な異なる条件があるのかも知れない。

ちなみにエネリの旦那さんは純粋な人だそうだ。どおりであたしの

にゃん言葉が伝わらなかった訳である。

異種族の結婚で生まれる子どもは、強い方の親の種族になるそうだから、納得。旦那さんは見るからに弱そうだから。

非常に興味深い。

もともと歴史に興味があるあたしはもつと聞きたかったが、隣で退屈そうに欠伸をしている仔虎ちゃんにエネリが気付き、さっそく実践に移る事となったのだ。

ところがその実践も、仔虎ちゃんにとっては退屈だったのである。

『あそぼ、あそぼ』

いきなりの衝撃を身体に受けてあたしの集中が途切れる。そのままバランスを崩したあたしは、突撃してきた犯人と一緒に床を転げ回った。

犯人は言わずもがな仔虎ちゃん。

あたしと一緒に瞑想していた仔虎ちゃんは、黙ってじつと動かない、と言う苦行に堪えきれきれず、あたしを巻き込んで遊び出したのだ。つまり飽きてしまったのである。

やはり遊びたい盛りの子ども。一人（頭？）が遊び出すと、残りの仔虎ちゃん達も身体をウズウズとさせてそれに便乗してきた。

『こら、あたし瞑想したいの！』

『きゃー』

何度あたしが諫めても聞きやしない。それどころか抑えにかかるあたしを嬉々として避ける。

あたしの闘争本能に火がついた。

『くおらあー！』

『きゃーきゃー』

—— グルアアア！！

突如響いた咆哮にあたし達はピタリと動きを止める。

『エ、エネリ』

いつの間にか三ツ目の虎型に戻ったエネリがにっこりと微笑んだ。つもりのようだが、鋭い牙が剥き出しにされて、とても恐ろしい。

『さあ、続きをしましょうね』

異論はございません。

みんな背中の毛を逆立てながら、のそのそエネリの傍に戻りました。

それからのあたしは、ひたすら時間の許す限り瞑想をした。

なんと言ってもご褒美は、ダーリンへのあーん、である。

俄然ヤル気が出てきた。

今日もあたしはダーリンへの朝の挨拶の後、瞑想できる場所を求めて颯爽と散歩に繰り出すのである。

やはり精神的な部分が影響する行為でもあるので、落ち着ける場所だと効果倍増なのだ。

ベッドからぴょんつと飛び降りたあたし、なのだが。

あ、あれ？

いつまで経っても足が床に付かない。底が抜けたという事ではなく、浮いているようなのだ。

ひよいひよいとあたしの足が虚しく宙を搔く。

首を捻るとあたしの身体から手が生えて、いや、手が支えていた。そのまま視線を上にする。

……ダーリン！

あ、今日は一緒にいろって事ですね。

もちろん従います。

だってあたしもダーリンといたいからだ。

てなわけで、今日はダーリンと一緒に公務に勤しむ事になった。

晴れ渡った空。

赤茶色の葉を繁らせた木々が果てしなく続く。その地平線の先には巨大な建築物を思わせる影がうつすらと浮かんでいた。

ダーリンのお城だわ。

広大な絶景を特等席で眺め、ご機嫌なあたしは何気なくチラッと視線を下にずらすと、思わず毛が逆立ってしまった。

絶壁！

にくきゅうから冷や汗が出る。

今、あたしはヴェルガーの集落の一番高い場所、大岩の頂上付近に

いた。

一番高い場所といっても、ヴェルガー以外の来客、つまり人の足で入れる一番高い場所であって頂上ではない。

ちなみに本当の頂上ではヴェルガー獣型の人だらーんと寝そべって日向ぼっこしてました。いいな、あれ。

ここでは床にあたる岩の一部が大きく掘られていて、そこには雨水が並々と貯められている。

ダーリンはさつきから、うんたらかんと水の浄化作用の事や排水などの説明を受けて、頷いたり指を指したり忙しそうにしている。あたしは景色を楽しんでいたと言っ訳である。

あ！

見知ったヴェルガーを見つけて、あたしは傍まで歩いて行く。

ガウディだ。

今は虎型でおすわりしたり、辺りをうろついたりと何だか落ち着きがない。

『ねえねえ、何してるの？』

挨拶がてらに軽く尻尾を振りながら訪ねる。

あたしに気付いたガウディも、軽く尻尾を立てながら迎えてくれた。

『よう、何してるように見える？』

『うろろろっ』

『……護衛だよ、護衛！』

つまりさっきのうろろろは、辺りを警戒しての事だったらしい。

『リボン似合ってるじゃねえか』

『えへへ、でしょ？』

お気に入りを買められると嬉しくなってしまう。すりすり。最近、あたしは感情や好意を態度で表す様になってきた。ガウディの太い足にありがとこの意味を込めて擦り寄る。

『ところで、ここは何する所のなの？』

『洗い場兼水飲み場みたいなもんだ。あっちこっちに水を貯める窪みがあるだろ？ まだ外に出すには危ない子どもがよく使うんだ。もちろん親と一緒にな』

そういえば、上から見た景色に川や池の類いは見当たらなかった。離れた位置にあるのかも知れない。

あたしはふわふわ毛並みのエネリの仔虎ちゃん達を思い浮かべる。確かに、大人ヴェルガーなら魔の森を突破できるが、子どもなら危ないだろう。

『ふうん』

せつかくなので、窪みの一つを近くでよく見る。

『それは浄化前』

透き通った水の底には、泥や砂等の沈澱物があった。雨ざらしなので、仕方ないかもしれない。

くんくんニオイを嗅いでしまうのは、もはや本能だ。

水底にキラリと反射する何かを見つけて、あたしは思わず身を乗り出す。

そして呆気なく、どぼーんっという音立てて落ちてしまった。

溺れる、溺れるー！

バタバタ前後足を動かす。

窪みは意外に深かった。

「ミイミイ！」

あたしの甲高い声が辺りに響く。

『……うん、こういう事があるから親と一緒に、なんだ』

濡れ猫となってしまったあたしはガウディにくわえられて、あっさりと救出された。

でも、その『期待を裏切らないヤツめ』みたいな目で見るのは止めて下さい。

そのまま駆け付けたダーリンの近くでぺちゅと放される。

風が吹く。

寒いいい……！

大岩の頂上付近であるこの場所は、風が吹き荒びとんでもなく寒い。すっかり身体が冷え込んでしまったあたしは、暖かい場所を求めて本能的にガウディの腹下へ潜り込んだ。

『つ、冷た！』

ガウデイの抗議は無視する。
今は身体を暖める事が優先。

あったかい

ぬくぬくと毛皮に包まれて、ほっと息を吐く。

「……………」

その様子を一部始終見守っていた魔王陛下が、ズボッとガウデイの腹下に手をつ突っ込んだかと思ったら、いきなりガシッとあたしの身体に手を固定。抱っこの体勢ですね。
そしてあたしは何故か、

ズルズルズルズル

引きずり出されました。

曝されたあたしの身体は、たちまち冷え込む。

な、なにをするの、ダーリン!?

抗議するように見詰めても、取り合ってはくれない。

一瞬の隙を突いてダーリンの手から逃げ出したあたしは、再び潜り込もうと頑張るが、何故か同じようにダーリンに引きずり出される。

猫の目で見てもわかる、その魔防加工が施された高そうな服を、あたしの水気たっぷりな身体で汚せと!?

無理です。

あたしにはそんな怨みを買う勇氣、ありません。

思い返すも侍女時代。

愛くるしい毛皮のカタマリ、フランちゃん。姫様が大層可愛がっていた犬がいたのだが、普段は賢いそのワンコ、何を思ったのか雨上がりの庭で走り出し真っ白な毛並みを泥色に染め上げた。

そのあとお約束のごとく姫様に抱っこをねだり、なんと姫様のドレスまで泥だらけに。

侍女仲間と苦笑いしながらドレスの着替えを手伝ったのち、あたしは汚れものを洗濯係の下女へと頼んだ。

その後、お優しい姫様は自分の落ち度で汚したドレスを洗う下女に申し訳なく思い、さりげなく差し入れを提案したのだ。

姫様からの心こもった差し入れを持って行ったあたしは洗濯場にて聞いてしまったのだ。

「あのバカ犬、私たちの仕事を増やしやがって」などの罵倒怨嗟呪詛の類いを。

しつかりと聞きました。聞きましたとも。

入って行ける雰囲気では無かったので、差し入れを持ったまま逃げ帰りました。

つまり、このままだとあたしも「あのバカ猫め、躑なおしてくれる！」などと影で言われる羽目になってしまう！

マント？

あれはあたしの心の安寧の為に必要不可欠なもので、あれに關してはどんな罵倒も受け付ける。でも渡しません。

しかし！

自分で覚悟をした事については構わないが、それ以外の事ではマントの前科があるだけに極力避けたい。

よって拒否。

いーやー！

必死に抵抗するあたしは、あっさりと裏切りにあってしまった。

『頼む、俺の為に陛下の所に行ってくれ』

パクッとガウディにくわえられたあたしは、ペッとダーリンの前に吐き出されました。

素早くあたしを取り押さえるダーリン。なに、その連携？

あれよあれよと言う間にダーリンの胸に抱かれたあたしは、高級な御服様をしっかりと汚してしまった。

……今度、洗い場の皆さんにドン・グラを貢ぎにいこう。

固く心に誓いながら、怨みを込めてどこか満足気なダーリンを蹴った。

そんな事もありながら、あたしの魔力は順調に戻ってきたのである。

「レディの魔力、だいぶ高くなってきたわね」

エネリに褒められたあたしは胸を反らす。

日々の努力の結果です。

やはり努力を認められるのは誇らしい。……ただし、動機は不純ですが。

「じゃあ、これから身体を変化させる術式を教えるわ」

よし、ドンとこい！

「といっても、もともと私達二つの姿の種族は身体にその術式が組み込まれているから、難しいこと考え無くても大丈夫」

『……………』

「魔力で自分を包みながら、人の形になった自分を思い浮かべればいいのよ。その時に身体を土で捏ねるようなイメージをしてね」

エネリさん。あたし、違うんです。

とは今さら言えない！

もともとあたしの知っている変化の魔術は、そんなに簡単に出来るものではない。

変化の対象となる媒介を用意し、しっかりと術式を練り、発動と同時に魔力を吹き込み術式を展開させ、身体を対象へと変化させる。

なお、対象に変化中の時には姿を維持させるために常に一定の魔力が消費する事になってしまうのだ。

しかし、エネリやガウディ、その他ヴェルガーの皆さんには、魔力の消費を伴う疲労は見受けられない。

二つの姿の種族とは、まさしく魔界の歴史と環境から生まれた命ある傑作なのだろう。

いや、待てよ。

あたしの場合、もともとは人なのだから、あたし自身の身体を媒介にできないものだろうか？

考える。

変化の魔術で戻る方法が一番初めに考えた。だかその時はあたしの

魔力が全く無かった為に諦めたのだ。

でも、今は違う。

さっそく術式の構造を練り立てにかかる。

ん、なにこれ？

組み立てた術式の中に、奇妙な式を発見した。

取り外しにかかるが、この頑固モノは一向に外れようとはしない。命に関わるようなものでもなかったので、仕方がなく諦める事にした。

さっそく組み立てた術式に、命を吹き込む様に魔力を与える。

展開した術式が意思を持ったように、ふんわりあたしを包んだ。

久々に感じる魔力の奔流。

どこか心地よい、懐かしい感覚。

自分自身で造り出した流れに身を任せながら、あたしは目を閉じてその時を待った。

袋の中の猫

魔力の輝きが収まる頃、ゆっくりと目蓋を上げる。

高い目線。

猫の頃とは比べられないほどの視線の高さに戸惑いを覚える。

まさか、本当に？

夢にまで見た人の肌。蜂蜜色の長い髪があたしの肌を撫でる。

思った以上に狭く感じる室内。

目を丸くしてあたしを見上げる仔虎ちゃん達は、まるでぬいぐるみみたいだ。

あたしが寝ていた籠ベッドはこんなにも小さかったのか。感慨深く眺める。

初めは戸惑いばかりが先立っていた心に、じわりじわりと嬉しさが染み渡る。

やっと、やっと……！

視界が滲む。

鼻の奥がツンとくる。

「偉いわ、レディ。よく出来たわね」

エネリの称賛にも頷く事しか出来ない。

「陛下も褒めてくれるわ。貴女に変化の練習をするように薦めたの

は陛下ですもの」

ダーリンが……？

感極まって頬に手を寄せる。

ぷに

不可解な感触が頬に伝わる。

「……にい？」

何だかぷにぷにとした気持ちいい感触が、あたしの手のひらから頬へと伝わっているようだ。

恐る恐る、両手のひらを広げてる。

見たいのに、見たくない。

確認しなければならぬのに、したくない。

そーっと、視線を合わせれば、あたしの手のひらには、桃色にツヤツヤと輝く……

——に　く　き　ゅ　う　！！

それが何か理解した途端に、あたしは身も世もなく、絶叫した。

「——！！」

けたたましい叫び声が辺りに響き渡る。

「あらあら、最初は誰もがそんなものよ。でも、お披露目はもう少し先ね」

みいみい嘆くあたしを、エネリがあやすようによしよと抱き締めた。

なんてこった。

あまりにも中途半端な変身に、あたしは愕然となってしまった。

手のひらにくきゅうの他に、エネリが頭を撫でる感触から、恐らく耳も猫のままだ、きつと。

察するに、あたしを猫に変えてしまった例の毒が邪魔をしたのだらう。

あたしを邪魔したあの感覚は、変化の術式の組み立てを邪魔したあれは、ご令嬢の呪いに違いない。

いや、はじめからその線で考えるべきだった。

人を獣に変える。

明らかに呪詛の類いだ。

もしかしたら、その呪いを解かない限りあたしはちゃんと人には戻れないのかも知れない。

背中から何か被せられる。

あたし愛用、ダーリンのマントだ。

そこであたしは裸だった事に気付く。

猫耳にくきゅうで裸で叫ぶ女。

なんだかあたし、人として色々と踏み外しかけているような気がする。

大変だ、戻れるうちに軌道修正しないと！

とても居たたまれない。

しかし、やっと戻った人の身体。

これでまずはじめの目標は達成できる。

ダーリンにあーん、ってしに行く！

「にゃーん、にゃにゃんっ！」

勇んでダーリンの所へ行こうとしたら、エネリに首根っこを引っ掴まれた。

「何を考えてるの、絶対に駄目よ！」

「にゅ！？」

エネリが言うには、中途半端に変化した身体を晒すことは、とても恥ずかしい事らしい。

はい、確かに恥ずかしいですね。止めてくれてありがとう、エネリ。嬉しさのあまり暴走仕掛けたあたしは、猫耳マントという羞恥極まりない姿をダーリンの他、ヴェルガーの集落の皆さんに晒す所でした。

本当の所、人型になれる事が魔界での成人基準なわけで、今のあたしのような中途半端な変化は自分の力不足を証明するので、大っぴらに見せる事はこれ以上ない恥だという事だそう。

これは魔界での、強い者ほど良い！ という実力主義の認識からくるもので、各地の集落や街を治める領主なども、血筋など関係無くその地で一番の実力者が治めるのだそう。最も、良い血統ならば強い子どもが生まれやすいと言う事もあり、無関係でも無いらしい。難しい。

……つまり、つまりですね。

以前魔王城でダーリンに侍っていた猫耳のお嬢さん方について。謁見の間で時折信じられないものを見るように顔を歪めていた人達がいいたのだが、その真の意味はダーリンの性癖が疑われていた訳では無く「なんつー姿を晒しとるんじゃ、この恥知らずどもめ！」と言う意味だったのか。またあたしは一つ賢くなった。

「にゃーん……」

自然と語尾が沈んでしまう。

「そうそう、分かればいいのよ。でも、そこまでできれば上出来よ」

エネリが慰めてくれた。

地上の常識、魔界の常識。

世界が変われば、常識も変わる。

同じ世界でも、国が違えば言葉も違う。大陸が違えば文化も違う。

あたしったら、その事を知っていたはずじゃないの。

猫耳女がそんなに恥さらしだったなんて。

確かに地上では、秘境の民以外にそんな事をしたら、少し痛い人に見られるだけだった。魔界のようにそこまで厳しく見られはしない。たとえ魔界であつてもいつのまにか、ダーリンというあたしの世界の中心が存在している事で、理解はしていたつもりだったが、今までどこか地上と同じように考えてしまっていた。

ここは、魔界。あたしの世界とは違う。

もう一度、認識が甘くならないように胸に刻む。

先ほど実はほんの少し、あたしの顔を見れば、ダーリンはあたしを思い出してくれるかも知れないと、胸を高鳴らせた。

けれど、冷静となった今では躊躇する。

もし戻らなかった場合は恥知らずの姿を見せる事になってしまう。

ダーリンはあたしに何かを期待して、変化の練習を薦めたのだから、その期待を裏切ってしまう事になってしまう。

地上でのダーリンとの日々を信じてない訳ではない、けれど、不安が苛む。

もし、あたしを見ても思い出してくれなかったら？

半端な姿を失望される事も恐ろしいが、思い出してくれないのはもっと、恐ろしい。ダーリンの中のあたしは完全に消えてしまったように感じてしまうだろう。

もし、そうなったら、あたしは……？

……にゃーん？

あれあれ？

さっきあたし、ちゃんと「わかったわ」って言ったつもりだったんだけど？

「にゃっ にゃっ」

エネリに喉を見せて、撫でてもらえるようにおねだりする。

「あらあら」

微笑まし気にあたしの喉と耳下を撫でてくれた。

力加減は絶妙。まさしく神の手、いや、ママの手と呼ぶに相応しい魅惑の技。

あたしも仔虎ちゃん達もいつもメロメロになり、喉をゴロゴロと……
ゴロゴロゴロゴロ

嫌ああ、なつたー！！

音源は否定したくとも出来ない、あたしの喉！
嬉しそうにゴロゴロなってるよ、あたしの喉！

どうしよう！？

あああああ……それにしても、気持ちいいなあ

『何があつた！？』

勢い良く入ってきたのは、虎型ガウディだ。

すぐさまエネリが鬼気迫る様子で一喝が飛んだ。

「ガウディ！ 貴方いつからそんな常識知らずになつたの！？」

エネリは人型なのに今にも鋭い牙で噛み付かれそうな気迫だ。

突然の罵声にちよつと耳がぺにょとなつたガウディが、エネリに
応戦しようと牙を剥きかけたが……

『すすす、スマン！ そんなつもりじゃ……！』

あたしと目が合った途端、物凄い勢いでおすわり後退しながら自分の
巣穴に戻っていった。

えーと、

これはまさか、あのパターンですかね。

「あの子だったら、信じられないわ。半端の変化を見せていいのは、家族だけなのに」

あ、やっぱりそのパターンなんですネ。

そしてそれ以外に見ていい人は伴侶とかですね。なるほど、わかりました、以後気を付けよう。

ガウディは何だか魔界の常識で考えると、あたしに対して地雷ばかり踏んでいる気がする。べろんべろん毛繕い然り、今の出来事然り。

どおりで練習の時に部屋にはエネリと仔虎ちゃんだけだなあ、と思った。

仔虎ちゃん達と兄弟扱いされてるけれど、あたし不満に思っています！ 大人ですが。

もちろん長女ですよ、あたし？

それにしても何故いきなりガウディが入ってきたのか。疑問に思ったが、すぐに思い出す。

そういえば、絶叫しちゃいました。にくきゅうに驚いて物凄い音量で。

あたしの悲鳴を聞いて駆け付けてきそうな人は、もう一人心当たりがある。

嫌な予感と同時に、こちらに駆け付けてくる大勢の足音が聞こえた。

「ま、まさか」

エネリの真っ青な予感は見事的中する気がする。

マズイ、非常にマズイ。

このままでは、あたしの猫耳マントが、「にゃーん」しか話せない
恥ずかしい事が、とんでもない破廉恥な失態が、魔王陛下公認の下
に晒されてしまう！

それにダーリンには、ちゃんと変化も出来ない役立たず猫とは思わ
れたくないし、戻るかわからない記憶の賭けをするには、まだ心の
準備が！

横穴にはガウデイ、前方にはダーリンとその他大勢。

猫なのに袋の鼠となってしまうあたしは、苦渋の策として、マン
トにしっかりと頭を隠し、旦那さんが使っているであろう机の下に
丸まった。

大丈夫、あたしは今ここにはいない！

あたしは今、黒い置物なのよ！

自己暗示をかけながら平静を保つよう心掛ける。

あたしが上手く気配が消せるかに全て掛かっている。緊張を取り除
き、いかに周りに溶け込むかが大事なのだ。

あとはエネリが、なんとか誤魔化してくれる。

心強い事に、隠れるあたしの前に仔虎ちゃん達がやって来た気配を
感じる。

どうやら身を挺して守ってくれるらしい。

心の中で感謝しつつ、大勢の気配がエネリの巣穴にたどり着いた。

頭、隠してなんとやら

「何があつた」

低くてよく透る声が巣穴に響く。ダーリンだ。仔虎ちゃん達の身が強張った気配を感じる。

「陛下、その、少し我が子達が遊びに夢中になっただけですわ」

「……………」

おお…………、なんだか背中にジリジリと視線を感じる。

ダーリンのマントにすっぽりと収まったあたしは、机の下で周りの風景と一体化したはずだ。仔虎ちゃん達の壁といい、もはやあたしと判別する事なんて不可能なはず。なのに一体、何故視線を感じる？

ジャリ……

靴底が砂利を踏み締める音。

大岩の中にあるこの巣穴は、やはり岩肌が剥き出しになっているのだ。

のんきに構えている場合じゃない。歩いてくる音だ、こちらに真っ直ぐと。

『ああん、まあまあ！』

『こあいよお』

仔虎ちゃん達はあっさり離れて行きました。耳と尻尾が垂れてる姿が目につく。

これであたしを守るのはダーリンのマントのみ。

ダーリン、あたしを守ってー！

あたしを窮地に追い込んでいるのは他ならぬダーリンなのだが、魔王陛下を止められる人物なんて皆無に等しいわけで、いざ頼れるのはやはりダーリンしかない。

うん。

つまりぜひとも、心変りをしてくれないだろうか。急に何かを思い立って、このまま回れ右をして退出して頂きたい。例えば、急にお腹が痛くなったとか、減ったとか、あーんしてあげる、だとか。あたし、まだ諦めてません。

そんなあたしの心を知らずに、足音はとうとうあたしの近くで止まった。

背中がジリジリする。

くいつ、くいつ

「!？」

何だかお尻を引っ張られている感触。

これは、もしかや乙女の、あたしのやわ尻が触られているのか？

くいつ、くいつ、くいつ

何するのよ、スケベ！

不届き者の手をはたく。
ペシッといい音が響いた。

触っていいのは、ダーリンだけ……いや、ダーリンであつても心の準備が必要なので、やっぱり駄目だ。

こういう事は、双方の合意が必要であつて、決して愛する人の求めであつても……ごにゃごにゃ。いや、でもやはりダーリンからだごにゃごにゃ……。

悶々と一人想像たくましくしていたあたしだが「ひっ」と悲鳴ならぬ悲鳴だとか「ごくり」と固唾を飲んで見守る様子だとか、ただならぬ周囲のざわめきで我に帰った。

あれ？

あたし手を使ってないよね、だって今、丸まつてるし。

「レディ、尻尾が……」

溜め息と共にエネルギーが呟く。

しっぱ……？ しっぱと言いますと、あのお尻から生えてますふさふさとしたアレですか？

まさか！

今のあたしは、猫耳、にくきゅう、「にゃーん」に飽きたらず、しっぱまで生えているというのか！？

さらに、まさかまさか！

あたしが勢いに任せて、しっぱで叩いてしまったのは、ダーリンの、

手……？

終わった、あたし。

もって考えて行動するんじゃない、なかったのか。

このまま半端な姿を見られてどうなってしまうと思うと、ぶるりと身体が震える。

仔虎ちゃん、壁になる前に気付いて下さい。でも可愛いから許す。

時間よ、戻れ。出来ればあたしが変化する前に。

真面目に祈ってみるが、効果無し、と思っていたのだが、あたしの願いが聞き届けられたのか、突然フツと周りの喧騒が消えた。

そつと顔を出す。

闇。

見渡す限り虚無の空間が広がっている。

周りの喧騒もダーリンの声も何もかもが遮断された、闇の中にあたしはいた。

不思議な空間。

右も左もなければ、上も下もない。

水の中を揺蕩うように、身体の重心が定まらない。

ここ、どこ？

あたしは確か、エネリの巣穴にいたはずだ。

そこへ、あたしの悲鳴を聞き付けたダーリンがやってきて、隠れてたら尻尾を引っ張られて、それで。

それで、闇に包まれていた。

ひとまずの危機脱出に、張り詰めていた息を吐く。

ここが何かは知らないが、あのままあの場所に居るよりずっと良いはずだ。

「レディ様」

突如闇の中で響いた声に、弾かれたように振り返る。

『……！ 侍従長さま、』

あわてて口を押さえる。

今のあたしの言葉は、にゃん言葉。

思わず昔のように呼んでしまった。

ダンディなお髭の似合う紳士、あたしが働いていたお城の侍従長様だ。ただし、“元”と付く。

その真の姿は、魔界でダーリンに忠誠を誓っている六柱、とんでもない実力者、という噂の闇の精霊で、名前はたしか……、ネメシスだ。

ほっぺも落ちるお魚珍味、ドン・グラを初めてあたしに持ってきてくれた人でもある。

「言語の違いなら大丈夫でございます。 “耳” の能力持ちの者に造らせました」

指差す先には三角形の物体が二つ、頭に鎮座している。

「おこがましくも、レディ様とお揃いにさせて頂きました」

猫耳ですか。お揃いですか。そうですか。

しれっとしながら言ってくれたが、真っ直ぐに伸びた背筋にカッチリと着こなされたお店の見本の様な服装に、猫耳はものすごく違和

感を感じる。

……もう、なんでもいい。あたしはとても疲れた。

「お久し振りにございます。こうして顔を合わせるのは謁見の間、以来ですな。贈り物は気に入って頂けましたかな」

『……罨に掛かるくらいに、美味しゅうございました』

「それは結構にございます。はるばると捕りに行った甲斐がございました。

それにしても、そのお姿。やはり貴女は、……おっと、貴女の御名は今の魔界では禁句でした。今まで通りに“レディ様”と呼ばせて頂きます」

はいはい。

もう、好きなように……、え、今なんと?!

思わず耳がピンと立ってしまったので、あわてて手で抑える。

ええい、忌々しい!

ただでさえ目立つのに、存在を主張するな、耳!

お前もだ、しつぽ!

「いやはや、さすがレディ様の耳は本物ですので動きますなあ、なんと素晴らしい!

私のは作り物ですので、残念ながら動いては……、いえいえ、ゴフンッゲフンッ」

………よし、何だか雲行きが怪しくなりかけたが、何も聞かなか

った事にしよう。うん。

でも、身の、いや耳の危険を感じるので、ダーリンのマントを頭からすっぽりと被り直す。

だから残念そうに頭を見ないで下さい。

「まずレディ様のお立場を説明する前に、お勉強といきましょう。

“二人の英雄物語”はご存知ですか？」

馴染み深い童話にあたしは頷く。

あたしの国では、子供の頃必ず寝る前に親から聴かされる物語だ。

この物語は歴史上実在した二人の英雄の話で、現在でも人気が高く謳う吟遊詩人や、旅芸人の劇なども良く見かける。

特に英雄の一人は我が国の建国の祖でもあり、王家の催しなどでは必ずその物語を題材とした歌などか披露されるのだ。

我が国では、たしかこの間建国千年祭をしたので、物語の舞台は約千年前となる。

知らない筈がない。

「圧政に苦しむ民を救うために立ち上がる二人の英雄。生まれる友情、英雄に至るまでの葛藤、心踊る展開。実に素晴らしい物語です。まさに後の世に語られるに相応しい物語ですな！」

かなり熱の入ったネメシスの語り。ファンなんですネ、あなた。

「では、その後二人の英雄がどうなったかご存知ですか？」

「一人はうちの国のご先祖様でしょ」

「そのとおり。それではもう一人は？」

物語を思い出す。

大陸を支配していた皇帝が討たれたのち、民は各々に慕う英雄について行く。

一人は世界を放浪しやがて清き森へとたどり着き、腰を落ち着けた。それがうちのご先祖様だ。

あれ？

もう一人は？

民謡、吟遊詩人の唄、観劇、童話。

そのどれもが二人の英雄を祭り上げるも、その後を語るのは建国の祖のみ。どの物語ももう一人の英雄には触れさえもしていない。

たしかにうちのご先祖様の話を中心にするのは、仕方がない。でも少しくらい伝わっていてもいいのに、不自然なくらいに誰も気にしない。劇はいつでも大円満で終わるから皆それで満足してしまうのだ。少しの疑問なんて、楽しい雰囲気吞まれてあつという間に忘れてしまう。

一つの推測があたしの頭を掠めた。

『……誰も知らなかった？ だから語れない？』

あたしの回答に、ネメシスは出来の良い生徒に満足したように笑みを浮かべた。

「そのとおり、英雄は姿を消したのです。彼を慕う民らと共に。補足するのなら、情報の制限をしているのは王家ですな」

そんなまさか。

かつて大陸を統べたという帝国に住まう民は、何千何万といたことか。

人望が低かったのなら、英雄とは讃えられない。

もう一人の英雄にも、相当な人数に慕われていた筈だ。

それが全て消えた？

そして我が祖国も一枚噛んでる？

「答えはこの魔界にあります」

『……まどろっこしいのは嫌いよ』

「そのもう一人の英雄とは、魔界の王にして、最高の魔術師。我らが魔王陛下にございます！」

ネメシスの口調は今まで話を聞いていた中で、一番熱が入っていた。さすがダーリン！

惚れ直します。

熱が伝染したあたしも興奮してくる。

魔界の民は、元はあたしと同じく地上の民だったのか。思わぬ所で失われた歴史を発見した。

『つまり、ダーリンは英雄の子孫だということなのね！』

「いえいえ、陛下こそが英雄なのですよ」

『……子孫なんじゃないの？』

「ご本人であらせられます」

お？

「陛下が司るは闇、そして空間。同じく対となる力、光、そして時の干渉を完全に防ぐことができます」

『……………』

わかりました。

つまりあたしとダーリンの歳の差は千才以上だという事ですな。

まさかの歳の差、なんてこった！

さすがのあたしも四桁以上離れているとは思わなかった。
好奇心が刺激される。

『でつでつ、なんでわざわざ魔界に引つ越したの？ 王家が絡んでるってなんで？』

「引つ越したのでは、ありません。何も無い空間から一から造ったのです」

……………つ、造った？

「建国の祖に口止めたのは、単に魔王陛下が面倒くさがったからです。魔界の起源はなんとも分かり頂けたようなので、本題に入ります」

いやいや、疑問だらけです。

簡単に造ったとか面倒だったとかで省略しないで、どんな術式を用いたのだとか、大地はどうしたのだとか、四大元素はどうなっているのだとか詳しく聞かせて欲しい。

もしや、あたしに詳しく説明しても理解できないとか思われてるのか。失礼な。

だが、その疑問も次の言葉で綺麗さっぱり吹き飛んだ。

「……貴女の御名は魔界のごく一部ですが、今や稀代の大悪女として知れ渡っています」

『!?!?』

ああああ悪女、ですと？

これからのあたし

何だかとてもない言葉を聞いた。

悪女、と言いますと騙したり奪ったり盗んだり、色々と性質の悪い女性の事ですよ？

あたしは善人でも無ければ、悪人でも無い、と自分で認識していたのだが。

ただ少し、自分の好きなように生きてきた事は認めよう。

殿下のお菓子を摘まみ食いに始まり、露店で売ってた竜鱗の小手をもっともらしい理由を付けて「それ偽物」と言って安く買い取ったり、腹が立った貴族のカツラに細工をして公衆の面前で禿とバラして恥辱を舐めさせたり、姫様の婚約者が気に食わなかったので皆と共謀して破棄させたり……

あれ？

十分に悪女なような。

しかし、まさか今まで一度も来たことが無かった魔界で、何が間違ってるそんな大層な称号を得たのか。

それに“大”が付くときた。

酷く動揺する。

誰が何？

ダーリンとの歳の差は千歳以上。

やはりネメシスはあたしの知っている侍従長様だった。
禁句。

色んな情報が頭の中を行き交い、新たに生まれた様々な推測が飛んでは消える。

混乱し過ぎて頭の中が真っ白だ。自分を取り戻す為に頭の中を整理しよう。

まずは、ネメシスがあたしの知っている侍従長様だったことに、少し安堵した。

何故ならば、ダーリンといい、ネメシスといい、“あたし”を知っていたはずだったのに、まるで初めからいなかった様な態度をとっていたのだ。ダーリンに至っては綺麗さっぱりと頭の中から除去してくれていたのだ。

例えば、違う時間軸の同じ世界だとか、似ている別世界だとかにでも迷い込んだのかと内心冷や汗が出た時もあったのだが、ひとまず悪女云々を抜きに考えると、やはりこの世界はあたしの知っている世界だ。

あたしの名前が禁句というのは、一体どういうことなのだろうか。悪女と罵りを受けるのだから、きっと相応の何か訳があるのかも知れない。

ダーリンがあたしに魔王だという事を隠していたように、あたしもダーリンに隠している事がある。

あたしが姫様付きになる以前は何をしていたか、という事だ。

まさか、その事が？

「貴女は、陛下を裏切ってしまった」

妙に落ち着いたネメシスの口調に、あたしの心臓が一瞬止まる。

『あたしが……？』

まるで覚えが無い。

それなのに早鐘のように打つ動悸が治まらない。

「陛下が遠征から帰還されたのち、王城の一角にて逢い引きを目撃したのです。

相手の女性は、貴女でした」

あたしの想像していた事柄とは違ったものの、それこそ覚えがない。

「ま、待つて。あたし違う！」

否定しなければ。それは、あたしじゃない。

あたしは誰も裏切つてはいない。

あたしが猫になったとき、ダーリンはまだ遠征から帰っちゃいなかった。

ネメシスは悲痛な表情で頷いた。

「ええ、知っております。

簡単に説明致します。魔界全体が膜で覆われていると考えて下さい。この膜はいわば守り、防御壁。何から守っているかというと、次元の歪みから守られています。

本来なかった場所に世界が造られた訳ですから、放って置けばあっという間に歪みに呑み込まれ、新たな別の世界の礎にされるか、または未来永劫に次元の淵をさま迷う羽目になるでしょう。

そうなれば、もちろん誰も生きてはおりません」

「……？」

妙に急いた、意図的に感情を込めないように淡々と魔界についての説明がなされる。

知っている？ それはあたしの潔白を知っていると云う事なのだろうか。

だとしたら、何故？

どうして、魔界の話になるというのか？

あたしが聞きたいのは、そんなことじゃない。

「陛下の機嫌に天候が左右されることはご存知でしょうか？ 膜を造られたのは、我らが魔王陛下にあらせられます。

陛下の魔力によって造られたそれは、当然陛下の影響をとて受けやすい。

よって、些細な感情の変化で膜が揺らいだり、厚くなったり、次元と魔界の間に摩擦が生じます。その結果、天気という我々の目に見える形で知らされるといふ訳です。

ご理解は頂けたましたか？

……陛下には、常に平静でなくてはならないのです」

畳み掛けるような説明が終わった。

さまざまな情報があたしの中でパズルの様に組合わさり、一つの推測が生まれる。

魔界と膜。

ダーリンが造った。

天気。

あたしが裏切った。

——陛下には、常に平静でなくては……

まさか

自分でも顔が強張ったのがわかる。

まさか、ダーリンの記憶が無くなったのは……

「お気付きかもしれませんが、貴女の記憶は我々が消させて頂きました。陛下は非常に取り乱し、錯乱状態に陥り、……っ！」

ネメシスは最後まで言えなかった。

あたしが思い切り殴ったからだ。

ひどい、ひどい、ひどい！

嵐の様に吹き荒れる感情はどうあっても収まってはくれない。

衝動のままにあたしは胸ぐらを掴む。

『あつあたし、猫だった！』

それが真実。

猫になってその後、あたしじゃない誰かが、あたしに成り済ましたのだ。

あたしの不在に、一体何があったかなんて想像に難くない。

けれど、この今の結果はダーリンも誰も、あたしを信じてはくれなかったからだ。

『ずっと、猫だった！』

ひどい！

裏切られた？

裏切られたのは、あたしの方だ。

「ずっと森の中さ迷ってた、お腹空いて、追いかけてられて、殺され

そうになつて、」

それでもまた会いたいと願つて、会えば気づいてくれると、僅かでも灯る希望があったから、あたしは頑張つてこれた。

「それなのに！」

どんなに必死に帰つたところで、誰もあたしを待つてはくれなかつたのだ。

さつさと皆魔界に引き上げたのだらう。

偶然にも魔界に落ちたあたしがやっと会えたのは、何もかも忘れたダーリンだ。

こんなことつて、ない

頭のどこか冷静な部分があたしに告げる。

これは、ただの八つ当たりだ。

あたしが気を付けていれば、こんなことには……

いや、違う。

あたしにも怒るくらいはいいはずだ。

やむ終えない事情があつたとしても、あたしに関する記憶を、あたしが生きた軌跡を勝手に消す事は許されないはずだ。

何もかも無かつた事にするなんて、酷い、酷すぎる。

ねえ、そんなにあたしは貴方達にとって邪魔だった？

「こつする他、無かつたのです」

『そんなの、ただの言い訳だわ！』

全て悪いのは、私。そんなネメシスの潔い態度が嫌だ。

そんな重大な事柄を、ネメシス一人の独断で決めたわけでは無いはずだ。でも結果的には賛成した。

あたし達から大切な記憶を奪ったことに罪の意識を感じているから、あたしから責められたい裁かれない。そんな気がして嫌だ。

一人だけ楽になるうなんて、卑怯だ。

あたしだって、酷く後悔している。責任を感じていないわけではない。

一時の感情の吐露は確かに楽にはなるだろうが、後に生まれる罪悪感に一体あたしはどうすればいいのだろうか。

ボロボロと零れる大粒の涙を拭う。

『もつと他のやり方があったでしょう。……何で誰も信じてくれなかったの？』

ぐずぐずと鼻を吸る。

記憶を奪う、それこそ本当に最後の最後に奥の手として使う最終的な方法だろうに、何故そんな方法をとったのだろうか。

それこそ、婚約者に裏切られるという悲話はあちらこちらで聞くと言うのに。あたしは裏切ってははいけれど。

しかしダーリンの本当の姿を知った今では、あたしを非常に邪魔な存在と思った誰かが、排除するため記憶を消したかも知れない、と勘繰りたくなってくる。

いや、もしかしたらあたしを猫にしたのも、その一味かも知れない。おかしいと思ったのだ。

ただの貴族の令嬢が、あたしを猫に変えるほどの強力な呪いをかけるなんて普通には無理なはずだ。しかし、裏で魔界の権力者がいるとなると話は別だ。

これは、しばらくは気を抜く事は出来ないかもしれない……

「陛下は貴女を殺してしまわれたのです」

顔を手で覆っていた思案していたあたしは、ピタリと停止する。

今なんと？

耳だけは、今の単語何？ とばかりにピクピクと動く。

泣きすぎで耳がおかしいみたいです。猫耳ですが。

あまりの衝撃発言に一気に頭が冷えた。

『ええと、あたし、生きてま、す？』

自然と語尾が不安げに上がる。

もつと自分に自信を持たないと。

いや、でも猫の身体だなんて可笑しいと思ったような。ひょっとして実はあたしは既に死んでいて、たまたま近くのやんこにとりついて身体を乗っ取ったとか。

いやいや、はたまた猫に転生を果たしたとか。

実はやはり冷静ではなかった頭で、あたしを殺しちゃった発言の意味を必死に考える。

「正確には、貴女の形をした傀儡を、です」

傀儡、というと？

ダーリンが、あたしを殺した？

まさかそんなこと、ダーリンがあたしを傷付けるなんて。

「愛が深ければ深い程に憎しみも増すといいますが、まさにその通りで。あろう事が挑発的な言葉を陛下に吐かれ、まあ、プチっとなつてしまわれた訳です。非常によく出来た傀儡でした」

プチっと！？

それは果たしてダーリンの堪忍袋か、あたしの身体なのか。

「私共のしたことは、決して許されない事でしよう。しかし取り乱す陛下に、段々と精神の均衡を危うくされてゆくあの方を前に、こうする他に方法が思いつかなかったのです。

陛下と魔界の為、最良の方法だと信じて実行したのです」

真っ青になってしまったあたしは、まさに最後で最後の奥の手として、記憶を消されてしまった事に納得する。

魔界のため。

ダーリンが魔界を造った。ダーリン無くしては魔界の存続が危うくなる。だから、あたしを消した。

「貴女は聡い人ですからお気づきかも知れません」

狡い人だ。

もうすぐダーリンに見られると言う時に、都合よくあたしはこの妙な空間に助けられた。

それって、本当にあたしのため？

答えは、否。

おそらくあたしを見て、万が一ダーリンが記憶を取り戻すのを避けるため。

今の話が本当なら、ダーリンが記憶を取り戻すと、何も知らないあたしが能天気にかけていたハッピーエンドの物語のような事が起こるのではなく、ドラゴンも裸足で逃げ出すような魔界の膜が弾ける

出来事が起こるにちがいない。

誰がどこまでこの件に関わっているのか知らないが、あたしはこれからどうするべきか。

残念ながら、決まっている。

知らない頃ならいざ知らず、あたしはもう、魔界とは無関係ではない。

魔王城の人達に、ガウディ、エネリ、仔虎ちゃん達。

今まで関わった色んな人の顔がよぎっては消える。

今のあたしは彼らを危うくしてまで、ダーリンに思い出してほしいとは思えない。

勘違いをしないでほしい。

あたしはダーリンが好きだ。あたしの夫になるはずだった人だ。

過ごした日々は、かけがえのないものばかりだ。

本当は思い出して、欲しい。

でも大丈夫。

あたしはあたしに言い聞かせる。

あたしが覚えているから、それでいい。思い出のダーリンは確かにあたしに愛を捧げてくれた。その真実があるなら、あたしはこのままでも大丈夫。

また一から関係を始める。

今でも破格の待遇なのだから、以前のあたしが決意した、“ダーリンの相棒”への道を模索するのだ。

『もうしばらくは猫のままで、頑張る事にする』

なんだか色々と吹っ切れた。

終わってしまったのを小難しい事をごちゃごちゃと悩んでも仕方がない。

———どんなに事態がややこしくなっても、自分のしたい事は見失うな

あたしの師匠の教えだ。

じたばたと、ここで駄々を捏ねても現状は変わらないし、きっとネメシスが変わる事を許さない。

これは警告でもあるのだ、きつと。

あたしがダーリンにこの姿のまま会っ、と言ったら何をしてでも止められるのだろう。

「申し訳ありません。貴女が無事に過ごせるよう、全力で尽くします」

綺麗に深く礼をとるネメシスは、ひとまずはこれからの様子で信用する事にしよう。

こうなったら、あたしは猫で魔界の天下を取ってやる。

六柱なんて目じゃない地位を手に入れてやるのだ。

押しも押されぬ、魔王陛下の愛猫になって奴らを尻に引いてやる！

黒革の日記帳2

しばらく書けなかった分まで、まとめてペンを取ることにする。

ヴェルガーの集落で見つかったレディを連れて城へと戻る。

思った以上に長い留守となった。

シュベルには悪い事をした。

まさかレディがロッテに驚いて逃げ出すなんて、思いもしなかった。しばらくレディの安否が気になり仕事に身が入らなかったが、まさか猫一匹のために権力を公使する訳にもいかず、随分と自己嫌悪に陥ってしまった。

偶然にもヴェルガーの集落で見付からなかったらどうなっていたとか。

以後十分に気をつける事にする。

帰りはレディをマントと一緒に籠の中に入れて、驚いて逃げないように蓋もした。

門番のロッテについても早馬を送り、念のために鎖に繋ぐように指示を出す。

そのかいがあつてか何事もなく、戻れた。

予想以上に長い滞在となつてしまったが、結果的には集落の現状を知ることが出来て得るものは多かった。

なによりヴェルガーの姉弟二人がレディに付いてくる事となり、城への出仕が決まったのだ。

奔放な彼等は他者と共同の生活は好まないため、なかなか誘つても城へはやって来ないのだ。

ヴェルガーの魔眼は重宝する事になるだろう。

しかし一人は子連れのヴェルガーのため、少々注意が必要だ。
……不満を挙げるのなら、ヴェルガー弟は少しレディに馴れ馴れしくないか？

気になるのは、人型になれるようになったレディの事だが、中途半端に変身した身体を見られるのは、嫌ならしい。それは地上でも魔界でも同じならしく、あまりにしつこくレディに頼んだら機嫌を損ねたらしく、噛まれてしまった。

引つ掻くのではなく、噛まれてしまったので相当に怒っていたのだろう。

噛まれた事にも驚いたが、意外にも痛かった。まじまじと感慨深く噛まれた手を見つめる。

レディは身体は小さくとも立派な武器を持っていた。

思わぬ子の成長を見た親の気分はこんなものかも知れない。

噛み跡は小さいながらも、くつきりと牙の跡が残っている。

レディはこのことを気にしているらしく、暇があれば舌で舐めてくる。一方で自分の武勇の跡を舌で触って確かめて、誇っているような気がしないでもない。

ざりざりとした舌の感触は、なんともこそばゆい。

そういえば、ネメシスの奴は自分一人だけレディの人型を見たらしい。
い。

奴ときたら、一番いいところ

——コンコン

重厚な扉を叩く音にペンを置く。
さりげなく日記を書類の下に隠す。

「入れ」

「失礼致します」

許可を出せば、入ってきたのは案の定シュベルだった。

「陛下、地上の聖王から封書が届いております」

難しく眉を寄せながら切り出す。

聖王とは聖地を治める地上の信仰の要であり、お互い長い付き合いでもある。

しかし世界が違ふ今、魔界を覆う膜に負担を掛けないために滅多に正式文書はやり取りしない。使者を立てて成されるそれは、まずこちらが通路を作り準備できた折を伝え、向こうが通路を門で繋ぎ、出入りする。

招き入れるのも送り出すのも中々骨のいる作業なのだ。

少しくらいの出入りなら勝手に膜は修復するので問題はないが、魔界の常識では膜を傷付ける行為の類いは決して許される事ではない。魔界の存続がかかっているのだから。

まさか王自ら、それを破る訳にはいかない。
国の頂点とは、なかなか面倒なものである。

今回の手紙は内密に送られてきたもので、あっさりと許可なく膜を破って届けられたものだ。

これは暗黙の了解として処理される。

魔界の上位の者も自由気ままに出入りしているし、これらも程なく修復されることだろう。

あまり目くじらを立てなくとも、地上と魔界は切っても切れぬ関係にあるのだ、関係を悪化させても良いことは無い。さっそく手紙に目を通す。

海原を治める海神と原初の炎の精霊の関係が悪化し、一触即発の不穏な空気が漂っている。

星の四大元素である彼等が衝突すると、地上に多大な被害をもたらす隣接する魔界へも影響が出る。

彼等の仲裁を頼むかも知れないので、そのつもりでいて欲しい。

との内容の手紙だった。

溜め息を吐く。

また、魔界を留守にするかもしれない。

せっかく落ち着いたかと思ったのだが、どうやら厄介事が舞い込みそうだ。

「陛下、一体どのような内容でしょう?」

内容が気になるらしいシュベルは少々落ち着きなく問う。

手紙を差し出すと、恭しく受け取った。

シュベルの眉間に皺が寄る。

「何も陛下が出ずとも、他にも候補がいるでしょう」

混じり気のない純粋な水と火。

以前ならば、純粋な星の力を持つ彼等を止める者は居なかったが今は違う。

風を統べるものが生まれたと聞いた。

シュベルが言う候補はその者の事だ。

仲裁は彼等と同じ立場である、星の四大元素がする事が好ましい。
手紙が再び手に戻る。

「それに関係しているのかは不明ですが、地上の密偵からの情報で、
……聖女が行方不明だそうです」

執務機の隅で丸くなっているレディの耳が動く。

「表向きには体調を崩して伏せているとの事ですが、実際には聖
地のどこにも見当たらないだとか」

それまでは情眼を貪り、存在を感じさせなかったレディがむくりと
起き上がり、手紙を持つ腕へと擦り寄る。そのままコロンと身体を
寝かすと、手紙の前を陣取り机に腹を付けた。
まるで手紙を覗き込もうとしてるかのようだ。

手触りの良い暖かい感触が手に伝わる。自然と頬が緩むのを感じた。
反対側の手で撫でようと伸ばしかけた手を止める。

途端に険しくなったシュベルの顔に気付き、要らない書類を丸めて
床に放り投げると、すかさずレディが飛び掛かり転げ回る。

一先ずの危機は回避した。

魔王を脅かすとは、シュベルに魔神の称号でも与えた方がいいのだ
ろうか。

「……話を戻します。聖女の事はともかく、返事はどうなさいまし
よう?」

「部外者がいきなり口を出すと悪化する恐れがある、仲裁はできる
限り彼等双方に詳しい面識のある者にするようにと断った上で、あ
くまで決まった訳ではないから内密に取り合う事を条件に、万が一

仲裁するときの為に衝突の原因と関連書類をこちらに送るよう伝えてくれ。

あと状況は変化しだい逐一教えるようにと付け加える。

聖女の件は、こちらから指示がない限り触るなと密偵に伝える」

仲裁することは無いだろうが、地上の情報を知るには絶好の機会でもある。

オマケに聖王のお墨付きときた。これを利用するに越したことはない。

魔界の魔物がたまに歪みに落ち地上へと出ることがあり、その際には甚大な被害をもたらす事が多い。

魔界が積極的に情報を収集する事に、よく思わない輩もいるのだ。彼等は魔界に、非常に恐怖を抱いている。

「では、その旨伝えます」

退出するシュベルを見送る。

魔界と地上の確執を思うと一気に心労が出た。癒しが欲しい。

ふかふかの蜂蜜色の毛並みを求めて部屋を見渡せば、レディはすぐに見付かった。

何か言いたげに、じいっとこちらを見上げている。きっと邪魔者が居なくなったから遊んで欲しくなったのだろう。

さっそく机の上に呼ばうと……

「仕事はサボらないようにお願いします」

「!？」

扉の隙間から顔を覗かせているのは、返書を頼んだはずのシュベル

だった。

ノックはどうした？

仕事はする。

返書の手続きに行ったのでは？

そのどれも言えずに頷くしか出来なかった。

その間にレディはプイツと顔を逸らして調度品の間を陣取り、前足を折り畳み寝る体勢に入る。

残念ながら、レディは賢い猫だった。

満足気に頷くシュベルが憎らしい。

今日の天気は曇りになりそうだ。

怒りよりも食欲

「レディ様、後生ですから退いて下さる」

何度目かの羊美少年の懇願に、あたしは『どっこいしょ』と身体を退ける。

毛だらけのマントを生暖かい目で見つめる羊美少年を横目に、あたしは足を伸ばして、かいかいかいかいつ、と身体を掻いていた。中途半端に人型に戻るようになったあたしは、さっそくダーリンとの甘い日々を過ごすべく人型になるようになった、……のではなく、今まで通り猫のまままで過ごしている。

恐ろしくて、とても戻れません。

と言うのも、人であったあたしの魔界での認識は、「魔王陛下を誑かした挙げ句に裏切ったとんでもない大悪女」として名を馳せているからだ。

オマケにダーリンがあたしの記憶を取り戻すと、魔界の崩壊という危機が待ち構えているときた。

おかげさまで「一度人型になつて欲しい」というダーリンの夢のようなお願いを、ことごとく蹴って蹴って蹴って蹴り倒した。

まったく、人の気持ち知らずに無理難題を吹っ掛けてくれる、と苛立ちに苛立ったあたしが痛い一撃を食らわしてやっとなつたのだ。信じてくれなかった恨みを込めてガブツといきました。ふん！

その噛み跡を見た、例のあの人から丸焼きにされかけたのは、また別の話である。脱兎のごとく逃げました。

現在あたしは、魔王城にいる。

ダーリンは唐突にヴェルガーの集落に来たように、唐突に城へと帰る事になったのだ。

原因は、例のあの人だとあたしはにらんでいる。

そう、例のあの人、えーと……、宰相さんだ。

帰ってきたあたし達を出迎えた宰相さんからは、薬湯の二オイがぶんぷんと漂っていた。お腹を擦りながら顔色は、たぶん悪かったように思う。次の日にはピンピンと仕事をしていたのは少々解せないが。

しかし、げっそりとなりながらもダーリンの留守を守るなんて、宰相さんは宰相の鏡だとあたしは思う。

あたしの国の宰相は、そりゃあ腐っていた。汚職に横領、着服何でもあり。しかしながら証拠らしい証拠は掴めず、殿下はいつも火でも吐く勢いで怒っていた。あの宰相ときたら年甲斐も無く三十才年下の奥さんをもらって、……。

ダーリンとあたしの年の差の方が、なん十倍もあいてました。

もう年の事は言いません。もしかしたら物凄い熱愛の末かも知れないし、うん。

時間が変化をもたらし、この世に不変は無いように、あたしの日常もちよっぴり変化した。

ヴェルガーの集落から戻って以来、あたしの行動範囲は格段に広まった。色々と見聞を広めようと思案した結果である。

そう、あたしは謀報猫になるのだ。

ヴェルガーの集落で悟ったことなのだが、あたしの見た目はかなり

弱々しい子どもらしい。……か弱い乙女ですから。

その見た目を生かして、警戒心無しの相手に近づき、じつくりと聞き耳を立ててやるのだ。

ダーリンにも情報は役に立つはず！

その延長線で、あたしが人に戻った時のための下地として、あんなことやこんな情報を掴んで、悪女でも誰の抗議も黙らせられるように頑張るのだ。噂好きの侍女を舐めるなよ。恥ずかしい秘密を暴きまくってやる。

謁見の間でお仕事中のダーリンにちゅっちゅしてから諜報活動に勤しむのだが、最近お気に入りはお城の屋根を伝って城壁へ、それからちょうど城門の真上へと移動し、下を見下ろす事だ。

猫ですから、日向ぼっこが大好きなんです。

ちょこんと座りながら眺めると、実に様々な形態の人が魔王城へと出入りしている。

角の生えている人、鱗びつしりの人、大きい人。翼が生えてる人。

多種多様なこの人達を観察するのがあたしの日課だ。

といっても、門はとても大きいので上にいるあたしからは、彼等の表情までは分からない。

「バウツ、バウバウツ！」

尻尾振りながらあたしを見上げる門番は無視。

構って欲しいのだからうけど体格差を考えて下さい。プチッといっちゃいます、あたしが。

「バウツ！　ヘッヘッヘッ」

魔王城の番犬ケルベロスは三つも顔があるから、鳴き声がとても五月蠅い。

道行く人が時々ケルベロスの視線の先を追って、あたしを見るのがこれまた微妙に恥ずかしい。

通りすがりの人は、泣く子も黙る魔犬ケルベロスの視線の先には一体何が、まさか魔王様！？　と期待し、はやる心で視線の先を追って行き、そこにいたのはなんと……、あたしですみません。ということが日常茶飯事なのだ。

「バウバウツ！」

鳴き声は五月蠅いけれど、しょせんは犬。大門の半分くらいの大きさしかないケルベロスにはここまで登ってくるのは不可能だ。と、思っていたのだが、ぬーっと目の前に現れた黒い巨体。前足を引っ掛けて、ここまで顔が三つもやって来ました。

『……たっ、立つのは反則だわー！』

あたし？

もちろん脱兎のごとく逃げました。

同じ愚は二度も犯しません。

森ではなく、お城の中に逃げ込む。

隠れる場所、隠れる場所。あたしの身体がすっぽり入る場所！

更に階段を降りて通路の隙間を通り、やっとポツカリと空いた穴を発見。迷う事なく身体を滑り込ませる。

ふー、と息を整えて毛繕い。

ここなら、奴も気付くまい。

それにしてもまさか立つちをしてくるなんて、今まで一度もそんな事はしなかったのに。あたしは油断してしまっていた。

奴は力を温存していただけなのか。そして、あたしが油断するのを待って、……パクっと！ いやいや、それは無いはず。

「別にそんなことしなくとも、俺は十分強い。集落じゃ、五本の指に入る。そうでなくてもヴェルガーは魔眼があるんだ、俺には必要ない」

「今まで集落に引きこもってた奴が何言ってる。……そうだな、お前一度相手をしてやれ」

ん？

見知った声にそつと様子を伺う。

やっぱりガウディだ。

ガウディも魔王城にいたことに素直に喜ぶ。慌ただしくヴェルガーの集落を離れた為にろくな挨拶が出来なかったのだ。しかし今は再開を喜んで駆け寄れる雰囲気ではない。

いつの間にか周りにわんさかと人がいる。

広い殺風景な部屋の真ん中にはガウディと、知らない誰かが向かい合っていた。

「よし、始め！」

掛け声と同時に双方が動いた。

すぐに三ツ目の大虎へと変化するガウディ、対して槍を構える知らない誰か。

にらみ合いは一瞬。

知らない人は槍を引き、脇締めて勢い良く突を繰り返す。

横への薙ぎ払いも、ひらりと身をかわすのはガウディだ。しなやかな身体を生かし滑らかな動きで相手を翻弄する。惚れ惚れするほどの隙の無い動きはまるで、獲物を狙う虎だ。あれ、そのまんまような。

一見、守りに入っている様に見えるガウディの赤銅色の毛並みが一瞬光またたいたと思ったら、勝負が決まった。

身体を痙攣させゆっくり倒れた槍の人は、地面に伏したまま動かない。

そのまま、ふん、と鼻を鳴らしたガウディが退出。お疲れ様でした。

「口で言うほどは、あるわけだ。余計に問題児だなあ」

今の声はずっと場を仕切っていた人の声だ。言葉とは裏腹に面白そうな口調で独りごちる。

それにしても、この野太い声、どこかで聞いた事があるような……ぐらりとあたしの隠れ家が揺れる。

何事！？

突然、穴の入り口を塞いだ顔とバッチリと目が合った。

「うわっ！ 鎧の中になんかいる！？」

大声にあたしの毛並みが逆立つ。狭い穴の中で更に身体が縮こまっていた。

——ガウンッ！

金属をぶつけたような轟音と凄まじい衝撃があたしに走る。

こ、ここは危険だわ……！

すぐにでも逃げたかったのだが、身体が思うように動かない。先ほどの衝撃と轟音により平衡感覚がおかしくなってしまったようだ。よたよたと頼りない足取りで、なんとか穴から抜け出すとぺちよつと力尽きて倒れてしまう。

「あ？ どうした、って姫さんじゃないか」

「ままま、まさか陛下の……！」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ、これくらいでは死なんだから」

目を閉じてぐったりしていると、ふわーんと漂う美味しそうな香りに鼻をスンスンさせる。

それと同時にツチアラシの二オイがした。

この二オイは覚えがある。

思い出した。

この目の前の人はあたしを、あろうことか袋詰めにした張本人だ。しかもか弱い乙女になんて扱いだ。ダーリンならきつと即座に抱き上げて撫で撫でしてくれて、甘い言葉で慰めて、……ごめんなさい、夢を見ました。

少し回復したあたしはさっそく文句を付けてやろつと目を開ける。

おおお大っきいい！

あたしの前に立ち塞がっていたのは、頭の左右に角を生やした悪人顔の大男だ。

人に戻ったあたしの軽く二倍はある身長に、後退仕掛けた後ろ足に力を込めてなんとか踏みとどまる。

猫のあたしにとってはまさしく山。

巨大な筋肉の塊が立ち塞がっているかのようだ。

負けるものか！

と、勇んでいたあたしだが、美味しそうなニオイの方が気になって仕方ない。

気がつけば、大男が手に持っている肉の方にチラッチラツと目が行ってしまう。

それをあたしに分けてくれたら、袋詰めの際は不問にしてもかまいませんが？

「なんだ、欲しいのか？ ほらよつと、お姫さん」

視線に気付いた大男が、千切って床に投げ捨てた。

たっぷりとソースがからめられた肉は、ぺちやりと音を立てて床に落ちる。

あまりの凶行にあたしの口は塞がらない。

沸々と沸き上がる怒り。

ちよつとちよつと、あな た ！

まさか、あたしにコレを食べると？

あたしはお皿に乗った物しか食べません。

お上品な猫ちゃんです。淑女です。レディなんです。

それなのに、なんという仕打ち、なんという屈辱。

そうしている間にも、ソースが床に染みをつくり、肉片には砂が付着した。お世辞にも人が食べれるものではない。

それなのに、食欲を刺激する匂いだけは健在でやたらと鼻に付く。

怨みがましく床に落ちた肉片と牛男を交互に見つめる。

「ん？ どうした、食わんのか？」という男には、悪気も敵意も清々しいほど感じられない。

こういう男が一番たちが悪い。

くっつ、覚えてらっしゃい！

床に落ちている肉片をパクつとくわえる。

いつかその大きい方の肉を奪ってやる！

心の中で呪詛を吐きながら、その場を飛ぶ勢いで離れた。

猫に珍事

戦利品をくわえながらダーリンの寝室目指して足を急ぐ。やはりゆつくり食べるのなら安心できる場所に限る。

ついでに羊美少年を捕まえて、砂で汚れたばつちいお肉を綺麗に洗ってもらいお皿に盛り付けて貰うのだ。

ダーリンの寝室は謁見の間を通り抜け、更に奥へと続く通路の先に位置する。つまりとても遠い。

その間にも物々しい警備の騎士達が存在している。許されざる者が一歩足を踏み入れようならば、おそらくバツサリと切り捨てられ生きては出られないだろう。

もちろん、ダーリンの愛猫たるあたしは普通に素通りできる。

ただしこの騎士さん達は、あたしが横でくしゃみをしようが、寝転がって足をパタパタしようが、ちっとも構ってくれないから少し寂しい。一歩外へ出たら侍女さん達から黄色い歓声を浴びるというのに。

どこの世界も、女の子は小さいふかふかの生き物を好むのだ。

順調に帰路についていたあたしは、謁見の間を通過しようと踏み込んだ。そこであたしは、ピタリと足を止める。

……見慣れないお客様だ。

謁見の間の重苦しい空気には、相応しく無い女の子二人だ。

一人はふんだんにフリルがあしらわれた華々しいドレスを身に纏い気の強そうな眼差しは、いかにも貴族令嬢という雰囲気の子。

一人は生活感を感じさせる前掛けに、頭に頭巾を被った素朴な印象の典型的な村娘、という雰囲気の子。

二人とも、緊張した様子でダーリンと対面していた。

わかります。

玉座にふんぞり返るダーリンの威圧感は半端無い。

今でこそ、日課のちゅっちゅをしに行ってるあたしも最初は躊躇った。

ダーリンの玉座までに轢かれた、ふかふかの絨毯の感触を楽しみながら近付いて行く。

途中あたしに気付いたダーリンからお咎めは無い、ということは「気になるなら近付いてもいいよ」という事だ。

この子達には角も羽も何も生えていない。純粹な人、に見える。ヴェルガーなら人型になっても第三の目を残すように、種族によって角だったり羽だったりそれぞれ誇る部位を残すらしい。

ドレスの裾にも隠してないみたい

するりと裾を翻す。

「きゃあ」と可愛らしい悲鳴が上がるが気にしない。

女の子同士、女の子同士。

やましい気持ちは、これっぽっちも存在しない。

当然の事ながら種族によって、特殊能力なども違ってくるので、ダーリンを守るためにも種族の確認はとても大切な事なのだ。

うーん、この子の二オイ、なんだか気になる。

どこかで会ったかしら？

あたしが引っ掛かったのは素朴な村娘のお嬢さんだ。

ぐるぐると女の子の周りをうつろつきながら考える。
もちろんクンクンするのも忘れない。

何だったかしら？

ダーリンなら、わかるかしら？

疑問に思いながらもダーリンの方へと首を傾げる。

それを見ていたダーリンが、何かを閃いたように頷き返す。

「レディが気に入った」

え、あたし？

「彼女らをレディ付き侍女にする」

え、え？

よくわからずに辺りを見回すと、宰相さんがぱっくり口を開けていた。

つまり、寝耳に水らしい。

……侍女？

突然のダーリンの重大決定に、呆然と立ち尽くす。

ちよっとちよっとダーリン、それ本気？

侍女の仕事をナメて貰っちゃいけない。

あたしがなんとか姫様付きの侍女として見れる働きが出来るようになったのも、女官長による指導の賜物。しごかれ抜いたあの、語る

も涙思い出すも涙の過酷な日々があつてこそ。

「あたし、この人に怒られる為にこの仕事をしてるんじゃないのに」と、本気で膝を抱えた日もあった。

侍女の失態は主の失態。

侍女の品格は主の品格。

手早くて確な作業と主の機微を察する観察力、さらには動作の優雅さを求められるのだ。

何日も掛けて、骨の随まで叩き込まれた。

侍女というのは経験が無いものが「はい、じゃ、やってね」と言われて一朝一夕で出来る簡単な仕事では無いのだ。

それなのに、ダーリンときたら全く経験無さそうな高飛車そうな貴族のお嬢様と、純朴無害そうな村娘さんをあたしの侍女に付ける！？

「何を仰るかと思えば、お戯れを。このロートリンス家の一人娘たるわたくしに、この、獣の世話をしと！？」

即座に文句をつけたのは、予想通りの貴族らしきお嬢様だ。

よく透るいい声だ。広い謁見の間での発言でも、たじろく気配もない彼女はこのような場に慣れている感じがする。

対して、村娘さんは始終戸惑いながらあたしとダーリンを視線で追いつ、次はお嬢様とダーリンを狼狽えながら交互に見る。

慣れない場の空気に吞まれ、発言なんてきつと出来ないだろう。

あたしは、もちろんダーリンに抗議する。

貴族のプライドの高さは、もはやお約束だ。

関われば、あたしの平穏な猫ライフに支障をきたすに違いない。振り回されるのが目に見えてわかる。

ダーリンったらお戯れを！ あたしだって、そんなの願ひ下げよ！

心の中で思いながらも「にゃー！」とは言わない。しかめっ面でダ

ーリンを見詰める。

宮廷作法では、目上の者に対する発言は許しを得てから、だ。普段は、……守ってない気もする。が、お嬢様が今この場で破ったからには、あたしはきちんと守る。

そう、あたしは宮廷作法にも通じた淑女な猫ちゃんだと気づけばいい！

そして、破ってしまった自分に恥じるといい！

とか思ったが、残念ながら誰も気づいてくれなかった。しょぼんと耳が元気を無くす。

「国賓として扱うべきわたくしに、床に落ちたモノを拾って食べるような、この品性卑しい獣の世話をしろと?!」

ビシィ！ と指差す先には、肉くわえた猫。もとい、あたし。

な、なんという！

しかし、事実でもあるお嬢様の指摘に挫けかける。

くそう、それもこれも、肉を投げ捨てた大男のせいだ。

お皿に入れてくれれば、こんな辱しめを受ける事なんて無かったのに。許すまじ！

しかし、こんなことに挫けるあたしでない。

一言。

このご令嬢に一言、言ってやらなければ気がすまない。メラメラと沸き立つ闘志。

猫を舐めるな！

獣が何だ！ 食意地が張っていて何が悪い！？

人が一番偉いと誰が決めた？

食べ物を食べなければ、皆死んでしまうのだ。食べれる時に食べて何がいけないというのか。

ぶわっと広がる体毛。ぐぐつと横に引かれた耳とひげ。戦闘体勢に入ったあたしは、熱い闘志を燃やしながらお嬢様の目の前に立ち塞がる。

煮えたぎる思いを、この一言に込める！

「……ふひいっ！」

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙が痛い、痛すぎる。

……………ポツと、口から零れた肉が床に落ちる音だけが響く。

穴はどこ！？ あたしが入れる穴はどこにあるの？！

口の中に物を入れながら喋ってはいけません。

口を酸っぱくされて教わったけど、その本当の意味がわかりました。貴族のお嬢様は更に熱を帯びた熱視線でにらんでくるし、素朴な娘さんは、目を丸くさせてあたしを見た。

ダーリンなんか、口に手をあてて俯いちゃったよ！
オマケとばかりに宰相さんの方からは何だか噴き出した音が聞こえたよ！

耳が、あたしの耳が新記録を打ち立てる。かつて無い程ぺちゅんと頭に引っ付いてしまい、あたしの頭はふんわりとした毛に被われただけ。見事にまるっとしてしまった。
出てきて下さい、耳。

もういい、何だかあたし、もうどうなってもいい。

いや、よくない。

誰でもいいからお願いだから大声で笑って、あたしを指をさしてとことん辱しめて欲しい。

誰も彼もあたしを見ずに俯いて目すら合わせてくれない。酷すぎる。こつこつ中途半端に「ぶくく」とされるのが一番痛ましいというのに。

——トントン

ぴぴん、と耳が反応する。

ダーリンが玉座を軽く指で叩く音だ。

ダーリンが呼んでる！

謁見の間では珍しく柔らかい雰囲気。ダーリンが、優しい包み込むような眼差しであたしを見ていた。
これは、きつと慰めてくれる予感がする。
やっぱりダーリンはあたしの味方だ。

ダぁーリいん！

今までの鬱々とした気分が一気に吹き飛ばされる。

勢い良く玉座に登り、ぴとっとダーリンに身体を引っ付ける。……

あったかい。

擦るように指先であたしの頭を撫でてくれた。

嬉しくなってダーリンの手に頭を寄せる。ゴロゴロ。

耳下から喉元へと滑る指先にうっとり目を細める。ダーリンの撫で撫で技能は確実に向上しています。ゴロゴロゴロ。

あたしを脇目に話がどんどん進んでいるが、今はとても忙しいので構ってられない。ゴロゴロゴロゴロ。

「以後しっかりと励むように」

………はっ！

気がつけば、何だか話が終わった雰囲気にあたしは慌てる。

ダーリンにやり込められて、悔しげに顔を顰めるお嬢様が見える。ダーリンの魅惑の指先にまんまと誤魔化されてしまった。

ちよっとちよっと、あたしまだ了承してな、あい？！

急いで顔を上げようとして、ひげが強い力で引っ張られる。

ひげ。

あたしの大事なひげ。非常に高性能の危険察知能力を備えたあたしの生命線。

その大事な大事なあたしのひげを、力任せに引っ張った不屈き者が

いる。

……いたい。すごくいたい。

引っ張られた痛みがじんじんとあたしを襲う。

まさか、ダーリンが引っ張った？　なんで、どうして!？

「やめて！」と非難の眼差しをダーリンに向けると、ダーリンは目を丸くし驚いた表情であたしを見ている。

「……………」

『……………』

苦しい沈黙の末、先に痺れを切らしたのはあたしだった。

身動きをして、再びひげを引っ張られる痛みに身体を縮める。

続いてダーリンが、そつと手を移動させようとし、痛みを感じたあたしも一緒に顔を移動させた。

すぴすぴとあたしの鼻息が荒くなる。

「……………」

『……………』

わかった、わかってしまった。

あたしの馬鹿、大馬鹿！

泣いてしまいたい。

犯人は、こてこてのお肉のソースだ。

あたしの口元にべったりと付いていたソースが、しっかりとダーリンの袖口に引っ付いて固まってしまっていたのだ。

「だれか、刃物を、」

「ミミミミミイ！」

ダーリンの命令を掻き消すように、あたしの甲高い声が謁見の間に響く。

ひげは嫌、ひげは駄目、ひげだけは切らないでー！

「わかった、わかったからレディ、少し、」

「ミイミイミイミイ！」

いたたたた、ダーリン、動かさないで、引っ張らないでー！

生命の危機とも言える、ひげの危機に興奮してしまったあたしは、自分で自分の首を絞めるが如く暴れまくっては痛み悶える。

そんなあたしに冷静さを取り戻したのは、やはりダーリンの一声だ。この日、ありがたくもあたしは魔王陛下より新たな称号を賜った。

「いいからバカ猫、少し黙れ」

地を這うような、背筋も凍る声音に、あたしはピシヤリと口をつぐむ。

再び刃物を手配するダーリン。

ダーリンの暴言はひとまず置いて、とても逆らえる雰囲気ではございません。

ひげが無くては、魔界で生きてはいけません。
でも、逆らえばぶちつとされちゃう気がします。

あたし、終わった……

迫りくる研ぎ澄まされた刃先を前に、神妙に目を閉じる。

こわい、すごくこわい。

じわりじわりと恐怖があたしの身体を這い上がる。
すびすびと自分の荒い鼻息だけが耳を占めた。

——サクッ、……サクッ

と、何かを断つ音に身を震わせる。

そつと目を開ければ、無残にも切れていたあたしのひげ……、ではなくダーリンの服。

ポツカリと袖口が切り取られたそれは、なんだか滑稽に見えるかも知れないが……

とんでもない！

ダーリン、大好きだわー！！

……後に思えば、服の切れ端を顔にくっ付けながら、全身で愛をいっぱい表現するあたし方こそが、さぞかし滑稽だったに違いない。
そのあと新たに侍女に任命されたお嬢さん方に、ぬるま湯で優しくひげをもみもみされました。

初仕事、こんなのでゴメンナサイ。

猫は見た！

「じゃあ、マリベルちゃんは隣の大陸の貴族さまなのね、すごいわ！」

「軽々しく呼ばないで頂ける？ 王都の一等地にも屋敷を持つてますのよ。本来ならば貴女が口を聞けるような立場の人間ではないの」

「なら、偶然にちゃんと感謝しないと！ …… エリーゼ様、森の恵みに感謝します」

「……その祈りはなんですか？」

「私のいたファンタベリーの村では、いつも森の守り主エリーゼ様に祈りを捧げていたの」

「ふうん、聞いたことも無いわ。さぞかし辺境の緑豊かな場所でしょうね」

「そうなの！ お花もたくさん綺麗に咲くのよ」

「……………」

スゴいわ、この子。嫌味を言われたことにも気付かない！

今のは、遠回しに「あんたの村は超ド田舎だから、私ぜんぜん知らなかったわ」って意味なのに。

純粹培養の村娘さんには、貴族の言い回しはちょっと分からないの
だろう。

名前は、エリー・ファンタベリー。

その守り主様の名前を貰ったと、嬉しそうにあたしに紹介してくれ
た。もちろん、あたしも「にゃ」と尻尾を上げて軽く挨拶。

ファンタベリーの森はあたしの国で、地図の端っこにひっそりこっ
そりと存在する。エリーはあたしと同国の女の子だったのだ。

どおりで気になる二オイがしたわけだわ

くくん二オイに行くと、慣れ親しんだ草木の香りがほんわりと匂
う。

やはり故郷の二オイは安心する。

「わあ、レディ様」

エリーが嬉しそうに手を伸ばす。

あ、抱っこは駄目よ！

ダーリンしか許してないんだから

ひらりと身を避わすと少し残念そうに眉を下げた。

ジリジリとした熱い視線に顔を向けると、貴族のお嬢様が不機嫌そ
うな眼差しであたしを見ていた。

この子の名前は、マリベール・ロートリンス。

隣の大陸の伯爵令嬢様だ。

あたしが視線に気付くと「ふんっ」と顔をそむける。あたしが欲し
かった混じりけのない黄金色の髪が揺れた。

生粋のお嬢様としては、猫のあたしに仕えるというのは面白く無い
のだろう。

けれど、あたしは侍女のなんたるかを彼女たちにビシバシと叩き込む予定なので、悪しからず。

「もうっ！ 部屋の大きさはともかく、こんな埃っぽいところに押し込まれるなんて最っ悪」

「ずっと使っていないって仰ってたもの。私は嬉しいわ、こんな広くて素敵な部屋、初めて！」

「いいですわねえ、貴女は。……まあ、調度品の質自体は悪くは無いですわ」

つつつ、と白く綺麗な指が家具をなぞる。

指に付着した埃を見てマリベールは顔をしかめた。細く綺麗に整えられた彼女の眉は、形を崩すと神経質そうな印象が際立つ。対してエリーは「ふふふつ」と、嬉しくて堪らないように踊るような足取りで掃除を再開する。

「なになさるの、埃が舞うじゃないの！」

「ふふふ、ごめんなさい」

それでも、止める気配はない。
もうもうと舞い踊る埃。

ムズムズする、鼻がムズムズするわ！

「くしっ、くしっ！ くしゅんっ、くしっ！」

「レディ様っ、……っっ！ きゃっ、」

どこか慌てたようなエリーの声が聞こえるが、もう遅い。

「くしゅっ、くしゅんっ！ くしっ、しっ！」

まったく、もう！

くしゃみの連発でもまだムズムズとする鼻を、前脚を使ってゴシゴシと擦る。

「埃は、飛んで行きましたわね……一瞬で、……」

近くの柱に張り付きながら呆然と呟くマリベールと、何故か顔を守るように床に蹲るエリー。

いつのまにか開け放たれていた窓と扉を見つつ、あたしに視線を向ける。

「ドラゴン並み……？」

失礼なっ、ちょっと魔力が漏れただけじゃないじゃないのー！

……くしっ！

「室長、あの、この間はありがとうございました」

「……それで、その、良かったら、これ」

可愛らしい女の子が、もじもじと包みを取り出し差し出す。

差し出された相手は、あっちこっち好き勝手に跳ねたボサボサの髪に上等だがよろよろによれた服に身を包む、野暮ったい雰囲気だ。ひよろつと長い背丈が、男の頼りない印象を更に強調している。けれど女の子は頬を真っ赤に染めて落ち着きなく視線を男と床をさ迷わせ、もじもじと居心地悪そうに足を擦り合わせる。

「あ、いや、ごめんよ。妻がいるから、そういうのはちょっと……」

「ち、違うんです！　そういう意味じゃなくて、お礼！　お礼なんです！」

お礼、と言つにはあまりにも男を意識し過ぎていて、説得力がない。しかし、大義名分が変わった男はあっさりと包みを受け取ってしまった。

「まあ、そういうことなら」

「あ、ありがとうございます！」

途端に花開いたように満面の笑顔で包みを手渡すと、頬を両手で押さえて足早に去っていった。

残された男は可愛らしく包装された贈り物を片手で持てあましながら、困った素振りで頭を掻く。

「まいったなあ」

察するに男も女の子の想いは気付いていたのだろう。訝えないのは見た目だけであって、男女の機微には聡いらしい。既婚者ならばそ

れも当然か。

しかし言葉で言うほどは困った口調では無く、まんざらでもないの
だろう。

……

………むふっ

むふふふふ、見しちゃった！

一部始終を見守っていたあたしは、物影からひょっこりと顔を出す。
本格的に掃除を始めた侍女二人の部屋から逃げ出したあたしは、思
わぬ出来事に遭遇してニンマリ。
すぐに気配に気付いた男、エネリの旦那さんが振り返る。

「……レ、レディさま、見てたのかい?!」

うふっ、見ちゃいました！

口止めの要求は後で考えるとして、とりあえず今はあたしが見たこ
とを証明するためにわざと姿を晒す。

旦那さんとは意志の疎通が出来ないので、後であたしが『うふ、や
るわね色男、エネリがいながら浮気するなんて……。可愛かったな
あ、あの頭に小さな羽が付いた女の子』と、にゃん言葉で言っても
旦那さんには通じない。当事者である旦那さんと女の子、そして目
撃したあたししか知り得ない情報を細かく伝えることは難しいのだ。
よって手っ取り早く姿を見せる。

そのまま颯爽と何食わぬ顔で散歩を再開しようとしたあたしは、普
段からは考えられないほどの素早さで迫られ、あっという間に退路
を塞がれる。逃げる隙も無くあっさりと捕まった。旦那さん相手な

ら大丈夫だと踏んでいたのだが、それだけ必死だったのだろう。うん、窮鼠猫を噛む。

ぶらーん、とあたしの両足と尻尾が揺れる。

前足の下に手を引っ掛けて対面するようにあたしを抱っこした旦那さんは、あたしの瞳を覗き込んだ。

「黙ってるよね？ エネリには、もちろん言わないよね？」

「にゃーん」

「それってどつちの意味の『にゃーん』?!」

『わかった、黙ってるう』？ それとも『そんなのしらない』?!

……レディちゃま、考えてごらん？

自分の番が、他の女の子にプレゼント貰ったなんて、エネリが知ったら悲しむと思うよ、ね！ ね！

ぶいっ、と顔を背ける。

だったら、はじめっから貰わなければいいのよ

許可なく抱っこしていいのはダーリンだけなのに。

不意を突かれたあたしは不機嫌を隠さず尻尾を揺らす。

「せっかくくれるって言うてるんだから、貰わないと勿体ない、……じゃなくて、可哀想でしょ!？」

女の子は貰ってくれたのに、って悲しむ。
エネリは貰ったでしょ、って悲しむ。

中途半端な優しさが一番だめ！

いつそ「浮気は男の甲斐性だー！」ぐらい開き直れば、少しは見直したかも知れないのに。が、その場合は完全にあたしを敵に回します。

あたしはエネリママが大好きなのだ。

っーんっ、と鼻を反らして無視を決め込む。

「レディちゃまー！」

激しく身体を揺さぶられ、胸からアレが上がる感覚。

か、かけるわよ……、このままだと、おえっとかけるわよ！？

「何やってんだ、あんた」

聞き覚えのある陰の帯びた声音に、あたしを抱っこしていた旦那さんの手が緩む。その隙にあたしは、くねっとなんと身体を捻って脱出した。

「ガウディ、いや、これは」

ふいー、助かったわ

尻尾をピンと立てながらあたしはガウディの方へと避難する。何だか前にも似たような事があったような。

今回は人型なガウディは、あわあわと言いつくしうとする旦那さんに、フンツと鼻を鳴らすとすぐに興味を無くしたように目をそらし踵を返す。

「ガウディ、ある程度門でふるいに掛けられてるとはいえ、完全じ

やない。城の中も入り組んでいるし暗がりも多いから慣れない内はあまり一人では、」

「ウルサイ、あんたに言われなくてもわかってる」

言い募る旦那さんを遮り、どこか突き放すようなガウディ。

んんー？

あたしは首を捻りながらガウディの後に付いていった。

もしかしなくても、ガウディと旦那さんは、あまり仲がよろしくないらしい。

でも、どちらかと言うと旦那さんはガウディの事を気にかけてたし、でもでも、ガウディはあんまり話したがらないような、反抗してるというか。

昔、尻尾でも踏まれたのかしら

前を歩くガウディの様子を探る。

『ええと、旦那さんとは仲がよくないの？』

「……そついう風に、見えるか？」

『うん』

やがて庭の片隅にある陽当たりの良い場所で、虎型に戻ったガウディはごろんと寝転がる。

あたしにとったら、ちよつとした小山だ。赤褐色の山をよじよじと登る。やがて安定した場所を見つけたあたしはそのまま寝そべる。暖かいガウディの背中の上に乗るのは、あたしも仔虎ちゃんも大好きだ。いつも競って登りに行くが、今は仔虎ちゃんはいないのであし独り占めである。

鼻をすんすんしたガウディは少し変な顔をした。

『知らない奴の二オイがする』

辺りには誰もいない。

少し首を傾けたあたしだが、すぐに思いあつた。

『そうなの、あたしに侍女が二人も付いたのよ！』

エリーとマリベールの顔を思い浮かべながら、侍女のなんたるかをガウディに説明する。

非常に生暖かい目をしながら、小山からずり落ちたあたしをべろんべろんするガウディ。

『そっか、がんばれよ』

果てしなく子ども扱い……

やがて、べろんべろんし終えたガウディはふうつと溜め息を付いた。気が緩んだのか、ポツリと呟く。

『……嫌いな訳じゃない。ただやっぱり、認めらんねえ』

これは、先ほどあたしが聞いた旦那さんに対するガウディの気持ちなのだろう。

それ以外は何も言わない。自分の手の上に顎を乗せて、じっと一点を見詰めて考え込んでいる。

その様子は、どこか迷子の子供の様な印象を受けた。

魔界では何より強さが求められる傾向があるので、いかにも弱そうな旦那さんはガウディにとって、非常に複雑な立場にあるのかも知れない。

ガウディが何も言わない以上は、あたしは踏み込んではいけない。

『あたし、てつきり尻尾でも踏まれたのかと思っちゃった』

誘惑に負けたあたしが、ふさふさ揺れるガウディの尻尾にちよいちよい手を出しながらポツリと呟いた言葉に、ガウディは爽やかに返してくれた。

「何言ってるんだ。そんな事されたらとっくの昔に殺ってるよ」

『だよねー、……………』

……………。

いいいやああああ！

しっぱおお！

意外なトコロに即！爆・発の導火線が！！

あたしといえば、踏むのは朝飯前、散々じゃれついては噛み噛みしたり、蹴ったりパンチしたり、そのまま疲れて寝むりこけて、タラつと涎たらしたり……

あわあわあわわわっ！

じゃれついてごめんなさい！
噛み噛みしてごめんなさい！
連続猫キックごめんなさい！

内心荒れ狂う心境とは裏腹に、あたしの表情は凜いでいた。

職業柄、あたしは顔には出さないのだ。貴族のお偉いさん方は、あたし達、侍女侍従をいないものとして扱う人が多いので、例えすぐ隣で控えていようが平気でヤバい話を大きい声で話したりするのだ。その時に少しでも注意を引けば、まさしく首が飛ぶ。今回もその要領で、あたしは尻尾にちょっかいを出していた手をそっと引っ込めながら必死に無表情を装った。

う、後ろ足がムズムズする、ムズムズするわ！

それでも衝動には逆らえず、あたしは久々に逃げた。

……おすわり後退！

壁に耳、ではなく間近に耳あり

程好い薄暗さ、あたしがスッポリと入り、なおかつゆったりと寛げるこの狭さ。

この隠れ家は気に入った。

「た、だんちょー、俺の鎧の中にまたピンクちゃんが入ってます…
…！」

「あ？　ピンクちゃん？　……　つてお姫さんじゃねえか」

「お、ピンクちゃんだ」

「ピンクちゃん」

わらわらと集まる筋肉に、あたしは慌てて首を引つ込める。

最近のあたしは、耐え難い苦汁を舐めさせられた大男の弱味を握るべく、せつせと兵士たちの鍛練場の様な所に通っていた。

奴がお皿にちゃんとお肉盛り付けなかったせいで、あたしは謁見の間で恥を晒し、ヒゲの危機を迎え、そしてダーリンからの愛を再確認したのだ。

だありん、大好きー！

しかし、いくら大男に張り付こうが、奴は一向にボ口を出さない。それどころか、いつもお肉を分けてくれるのだ。それがまた美味しくて美味しくて、ほんのりと温かい肉を頬張り、ご機嫌にダーリンの元に帰る日々が続く。あれあれ、こんなはずじゃ……？

最初こそ、ぞんざいに投げ捨てられたお肉は、次の日にはちゃんとお皿が用意されていた。銀色のピカピカに輝く新品のお皿だ。

ダーリンったら、情報と行動が速くない？

頭を捻りつつ、お肉は期待通りに美味しいのであたしは気にしないことにした。

最初の主旨から外れまくっているが、今日もあたしは隠れ家の中で訓練観戦をしつつ、おやつを期待して待っているのである。

それにしても、ぴ、ピンクちゃん……………？

最近あたしは不可解な名称で呼ばれている。

あたしの毛並みは、ダーリンが褒めてくれた蜂蜜色。最近鏡を見ていないが、目の色は緑色だったはずだ。……鏡を見ると、ゆらゆらと揺れる尻尾が気になって気になって、しばらく一人で格闘してしまふのだ。

ダーリンの愛と慈しみと優しさが籠ったりボンは、晴れた日の空の様な澄んだ青。

ピンクと呼ばれるような原因は、何もない。

もしかして、と思いつつ、あたしは隠れ家から顔だけ出して辺りを見渡す。

鎧の色は黒みがかった青。ピンク色ではない。

こてんと頭を傾ける。

そりゃそうよね、鎧がピンク色なんて目立って仕方がないもの。的にされちゃうわ。

それなら、一体どこにピンク要素が？

「くっ」

何か吹き出したような音に目をやれば、あたしの隠れ家のすぐ隣には、耳の長い男の人が座っている。この人は、あたしが隠れ家を利用し出した始めから、一番近くに座っている人だ。

白金の長い髪をゆったりと一つに纏めている、線の細い優男な感じの人だ。

最近では常に、あたしが隠れ家から出てくると、隣に腰を下ろしてのんびりと試合を観戦している。

あたしと目が合うと、にっこりと人好きな笑顔で微笑んだ。顔が整っているだけあって、むさ苦しい鍛練場は華やかな社交場に早変わりだ。この人は、場慣れしている感じがする。

……取って付けたような笑顔がなんだか、胡散臭い。

あたしはブイツと顔を背ける。

「ありや、手厳しいね」

さして機嫌を損ねた様子もなく、耳長の男は笑った。

顔を逸らした先には、あたしの隠れ家の持ち主が「なけなしの給金はいって買った新品なのに……」と嘆く様子と「その辺に放つばりだすお前が悪い。ありやもう、お姫さんのもんだ」と諷める大男の姿。

あたしは満足気に目を細める。

さすが、わかっていらっしやる。デカイのは背丈だけではなく、懷もデカイようだ。それに、この貫禄。だんちよーではなく、しょーぐんな感じがする。

さすが、しょーぐん！……あたしの中で妙にしっくりきた。

うん。そろそろ、わだかまりを水に流してもいいかもしれない。

けてして！ お肉に懷柔されたわけではない。懷の深さに感銘を受け

ただ。

敢えて言うならば、しょーぐんのがつちりとした広い肩にあたしが
イイ感じに乘れそうだとか、ちよつと乗ってみて高い目線を味わい
たいだとか、下心がちよっぴり湧いてますが、何か？

あたしが一人でうんうん、頷いていると、何故か視線を感じる。顔
を上げると、日を追うごとに増殖した隠れ家の周りの人たちだった。
気がつけば、耳長の男を始めとして隠れ家の周りに座ったりしてい
る人は、軽く五人を越していた。その全員がやたらと顔をニヨニヨ
させており、妙にあたしの堪にさわる。

……何だかム力つく。

「ピンクちゃん、ピンクちゃん」

その中の一人があたしに呼び掛けたかと思うと、人差し指と中指を
足に見立てて交互に指を繰り出し床を走り出した。
あたしは思わず、目が釘付けになってしまふ。

ゆ、指が！ 指がテケテケしてる！

ちよいつ、ちよいちよいつとあたしが手を伸ばせば、指はテケテケ
ツと俊敏な動きで逃げた。

ああん、捕らえ損ねた！

逃がした獲物は、その場であたしを煽るようにテケテケと足踏みを
繰り返す。

……これは、あたしに対する挑戦状だわ！

あっさりと火が付く、狩猟本能。

ぐぐつと身を屈めて、今度は逃さないように狙いを定める。

いち、にの、……とうっ！

身体全身をバネにして勢いよく飛び付き、今度は捕獲に成功した。期待と興奮に歓喜するあたし。身体中に満ち足りてゆく感覚に陶醉する。

しかし、まだ終わりではない。

何度か逃げようとする獲物に猫パンチを繰り出し床に叩き付ける。弱った所でしっかりと両手で獲物を抑え込み、逃げないように体重を乗せた。

それだけでは済まさない。

ピクピクと動き、抵抗する獲物にがぶつと噛み付く。

んふー

満足気に鼻をならす。

噛み噛み……

噛み噛み……

ん？

動かなくなった獲物に、頭が冷静になってきた。
二ヨ二ヨした視線があたしに突き刺さる。

あ、あたしったら、我を忘れてなんて事を……！

噛み噛みしていた指を慌てて吐き出す。

大勢の視線に晒され、途端に身体全体に燦っていた火が羞恥心にまで燃え移り、烈火の如く凄まじい勢いで燃え上がる。プルプルと尻尾まで震える。

くうっ、一生の不覚っ！

居たたまれなくなったあたしは、脱兎も追い越す勢いで逃げた。

羞恥心に負けたせいで、今日のおやつを食べそこなってしまった。でも、あの醜態を晒した後でそのまま居座るほど、あたしの面の皮は厚くはない。

でもでも、おやつは食べたい。

そんなわけで、今日の分のおやつを取り戻すべく、あたしは厨房の方へと足を向けた。

侍女さんたちの焼きお菓子や飴細工も捨てがたいが、狩りで火照った身体を冷ますには新鮮で自然な甘さの果物が望ましい、とあたしは結論づけたのだ。

厨房で働く皆さんも、あたしが「にゃ〜ん」と一声鳴けば、その場で新鮮な果物を剥いてくれたりする。もちろん小さな身体のアたしに全部食べられる訳ではないので、余った残りは厨房の皆さんが休憩がてらおやつを摘まむ。

あたしは果物を貰うかわりに、厨房の皆さんには休憩の時のおやつを食べるための理由を提供する。

あたし達は、美味しい関係なのだ。

あたしったら、魔王城のおやつ事情にかなり詳しくなってきたいる気が……。

しかし、道中で見知った顔を見付けてあたしは足を止めた。

「あーあ、こんなにしちゃって」

「すみません、よろしくお願いします」

「なに、あんたが謝らなくても。心配しなくても、ちゃあんと綺麗にするよお！」

申し訳なさそうに縮こまる、あたし付きの侍女、エリーだ。

一体何をしているのかしら？

好奇心に負け足を踏み入れたあたしは、妙に嗅ぎ慣れた二オイに辺りを見渡す。

綺麗な水路。積み上げられた桶。桶に水を汲み、その中で足踏みをする女、もしくは忙しく手を動かす者もいる。

……洗い場みたい。

少し二オイが強くて気付かなかったけれど、これは石鹸の二オイだ。洗い立てのシャツから、よく匂う二オイだ。道理で嗅ぎ慣れていたはずだ。

エリーは使い古されたりネンの洗濯を頼みに来たようだ。籠のなかにシャツに挟まれている黒いカタマリはダーリンのマント。あたしの毛がついているので間違いない。視力はいいのだ。

くしゃくしゃに丸められたシャツの籠を、先ほど話していた女の人に手渡している。

あ！

そこであたしは気付いた。

汚れものだからって、くしゃくしゃにして入れちゃ駄目なのよ！
ダーリンのマントを粗雑に扱うなんて、言語道断！

汚れものであっても綺麗に折り畳み、籠に入れて下女の人をお願い
するのが、できる侍女のたしなみだ。

くしゃくしゃに詰め込まれた籠とは、見栄えが雲泥の差。

頼まれる側の洗濯場の皆さんも、自分たちの仕事に誇りを持って
いる。くしゃくしゃに詰められたならば、何だかせつかく洗濯した
ものがぞんざいに扱われているようであまりいい気分がしないが、
綺麗に折り畳まれたものならば「大事に使って下さってるのだわ！」
と感激して、より仕事に精を出してくれるのだ。女官長さまの受け
売りだ。汚れものでも侮ることなかれ。

侍女の気品は、主の気品！

ちょーっと待ったー！ とばかりに彼女たちの前に飛び出す。その
勢いのまま、洗い籠の中目掛けて身体を突っ込む。

籠を持っていた女の人から「うひゃ！」と悲鳴が上がったが、今は
構ってられない。その中の一枚をくわえて、籠から這い出る。

ベッドのシートだ。

思った以上に重いそれに、顎が外れるかと思ったが、気合いと根性
で乗り切る。さっそくエリーにお手本を見せようと、床にシートを
広げた。

「にゃ！」

しっかりと見といてよね！ とエリー声を掛け、折り畳もうと試み

た。試みた、が……

う、上手く折り畳めないー！？

何度頑張っても、途中でくしゃくしゃになってしまった。床に不可思議にシワを寄せるシート。

シーツの端をくわえて、うろつろとさ迷うあたし。非常に情けない、情けなくて涙が出そうだ。

「レディ様！？」

慌ててあたしに近寄るエリー。

あまりの勢いにあたしも慌てて距離を取る。

結果的にあたしが散らかしてしまったシーツを掻き抱き、女の人に頭を下げた。

「ううう、ごめんなさいっ」

「ああ、びっくりした。あんたは悪くないよ、顔を上げな。苦労するねえ」

健気に頭を下げるエリーに、罪悪感がもたげる。

うう、ごめんなさい……

謝罪の意味を込めて、あたしは女の人の足を目掛けて頭を寄せる。

「おや、なんだい。こりやお姫さまに気に入られたってことかね、光荣だねえ」

からからと笑う女の人にあたしは胸を撫で下ろす。
頭の角といい、大きな身体といい、なんだか鍛練場の
大男、しょーぐんを思い出す。

「あんだ、ここには慣れたかい？」

「は、はいっ」

いきなり話を振られたエリーがビクリと肩を揺らす。

「本当に、皆さん、よくしてくれて、夢みたいですよ……」

「あんだの事は聞いたよ、大変だったらしいね」

なになに、何のはなし？

残念ながら、あたしはエリーとはお喋り出来ないの
で、彼女の身の上は殆ど知らないのだ。

出身地の話を、もう一人あたしの侍女に任命されたマリベールと話
していた事ぐらいしか、知らない。

気になる、気になる。

やはりエリーの主として、知つとかないとね！

心の中で頷きつつ、さりげなく耳を立てる。もちろん顔は、あさ
つての方向にむけて「興味ありませんよー」と装うのも忘れない。

「いえ、そんな、……本当は、嬉しいんです。確かに辛い事もあつ
たけど、もう一度、あの人に会えるなんて」

「あの人？ やだ、若いねえ」

ポツと頬を染めるエリーに、ニマニマの女の人。

あの人あの人？ それってだあれえ？

あたしも心の中でニマニマしつつ、聞き耳を最大に立てる。
大女さんは、足下の小さいあたしは視界に入っていないし、エリーもエリーでそれどころではない。なんて最適な場所！

「そんな、つもりじゃ」

「あつはつは、いいじゃないか！ そういう気持ちは大切にしないとね」

「あの、本当に、畏れ多い事なんです。まさか、あの人……魔王陛下だったなんて」

な、なんですとー！？

胸の痛み、頭に衝撃

覚悟していた事だけれど、やっぱり堪える。

ダーリンの寝室に逃げ込んだあたしは、ダーリンのマントをベッドの下に引つ張り込み、その上で丸まった。鬱々とした気分でひっそりと息を潜める。ベッド下という死角であっても、埃ひとつない羊美少年の完璧な仕事ぶりに、感心できる余裕は今のあたしには無かった。

エリーはもちろんのこと、誰とも会いたくない。仄かに鼻を掠めるダーリンの二オイだけがあたしの唯一の慰めだ。目蓋を閉じると、つい先ほどの出来事を思い出す。

エリーの一言を聞いた洗濯場の女の人は、血相を変えてエリーを個室へと引つ張りこんだ。

もちろん気になるあたしも、一緒にお邪魔した。すぐに近くの調度品の隙間に隠れ、息を潜める。

彼女らはあたしが部屋に潜り込んだことには、これっぽっちも気付かなかった。大きい洗濯女は大腿で廊下を渡りながらも周囲の目を気にしていたし、誰にも聞かれないように注意は払って個室を選んだのだが、どこか気が急いていたのだ。

エリーのすぐ後ろで足音を立てずに付いてくるあたしを視認するには、幸か不幸か彼女の背丈はあまりにも高かったし、エリーも小柄ではあるが、あたしが隠れるには十分な背丈だったのである。エリーもエリーで、尋常ではない洗濯女の剣幕に気圧され、それどころではなかったのだ。

扉が音を立てて閉まり密室となった後、一人は何か言葉を探すように、一人は困惑からかどちらも黙りこんでしまった。たつぷりと沈黙が部屋を支配したところ、口を開いたのは険しい表情の洗濯女の人だった。

「一体どこで魔王様と会ったんだい？」

「ああ、あ……の、」

可哀想に、エリーの声は震えて初めは言葉にはならなかった。

洗濯女の責めるような口調には、エリーでなくとも腰が退けてまう。

「昔、わ、私の住んでた所が魔物に襲われて、その時助けてくれた騎士様を率いていたのが、あの方で、」

あたしはすぐにピンときた。

エリーは騎士様と言っているが、実際にはその誰も騎士ではなかったはずだ。

ダーリンはあたしの国では身分を偽り、一兵士として何度か遠征にも行っていた。その頃、何の後ろ楯もないダーリンは、手柄を立てて騎士として受勲されるのはおるか、隊長職に就くことですら随分と苦労したのだ。

通常、騎士になるにはそれなりの身分である貴族の子弟で、かつ、手柄を立てたものだけになれるという、非常に名誉ある事なのだ。ダーリンのような一兵士が取り立てられる事は、殆ど例がなかった。特にダーリンは黒髪黒目の容姿がまずかった。あたしの国ではまず見掛けないその色は、認められるのに随分と時間がかかったのである。

おそらく、お義父様——ダーリンの後ろ楯となった伯爵様、魔界では剣術顧問役でもあるグルの一味のあの人も、ダーリンが並々な

らぬ努力をしたからこそ、怪しまれずに後見につくことができたのだろう。

当時騎士ではなかったが、統一された隊服に身を包み見事魔物を追い払った彼らは、村人たちにとっては紛れもなく国を守る騎士様だったのだ。あたしは嬉しくなる。

ダーリンは誰よりも先に、守った人々によって認められていたのだ。称号なんて、些末な事に過ぎない。

ちなみに、ダーリンが騎士となつてからの遠征は数回しか行っていないが、あたしはその行き先をどれも把握している。

というのも、その頃には既にあたしはダーリンとラブラブとしていたわけです、はい。ダーリンの情報は逐一入手してましたとも。

なので、あたしが知らないということは、まだあたしが正式にダーリンと出会う前だろう。

ダーリンはいつでもカッコイイが、仕事中のダーリンは更に更に！カッコイイ。

つまりエリーが憧れに近い淡い恋心を抱くのも仕方がない事なのだ。ほわほわと暖かい気持ちに包まれたあたしは『まあ、憧れならいいかなあ』と当時のダーリンを思いだしながら、一人にやふにやふとしていた。つまり、両手で顔を押さえながら思い出し照れ笑いをしていたのだ。にやふにやふ。

ところがその後、そんな呑気な事もいつてられない事態になってしまった。

—— いいかい、あんたはその事誰にも話しちゃいけないよ。

—— 魔王陛下は、魔女にたぶらかされて呪われたのさ

—— まったく、なんてことだろうね。もしも見付けたらただじゃおかないよ

洗濯女の言葉に、エリーがどんな受け答えをしたのか。あまりの衝撃に断片的にしか会話を覚えていない。

気が付けば部屋には誰もいなかった。

調度品の隙間から這い出たあたしのその後は、ただひたすらに安心できる場所、ダーリンの寝室目指して走ってはベッドの下に潜り込み、見えない憎悪から身を守るように、ただひたすらに丸まっていたのである。

一体こうして、どれ程の時間が経過したのか。

ベッドといっても半端なく大きい寝台は、ダーリンが人型のあたしを五人侍らしても余裕の広さだ。

すでに僅かに射し込んでいた光も今は届かない。

真つ暗闇の中でも夜目は利く。なんたつて猫だからだ。

しかし、ダーリンのマントは闇色。気を抜けば、まわりに溶けて無くなるような錯覚にあたしは震える。這い上がる孤独感に一人耐えた。

魔女だつて、あたし。……笑っちゃう

ある程度は覚悟していた。

けれど、実際にこの耳で聞いた言葉は想像以上にあたしの心を抉った。

救いは、あたしが猫で、女の人の憎悪対象は人のあたしだったことだ。

果たしてそれは、救い？

否定される人のあたし。ますます戻れなくなってしまった。

ダーリンは、あたしの事をどう思ってるのかしら？

いくら情報を制限しているといっても、きつと疑問くらいは抱いているはず。

それに、噂話も聞いているかも知れない。

その手の話を好む者はどこにでも存在するのだ。口を塞ぐことなど不可能に近い。

——ダーリンまで、もしかしたらあたしの事を……

突如、綺麗な光があたしを包む。

驚いた。跳び跳ねそうになった足に、力を込めてその場に留まる。

不思議と恐怖は感じない。目も眩まない。澄んだ青色は柔らかくあたしを照らした。

光の出所はすぐにわかった。

ダーリンからのプレゼント、リボンについた小さな石だ。

『?、??』

足でツンツンと続いてみるも、ただ淡く光るだけで、それ以外の反応は示さない。

チカチカと瞬いてはやがて静かに光は終息した。

な、何だったの？

首を傾げる。

青い清浄な光はほんの少しだけ、あたしの心の闇を洗い流してくれた。

『……!』

突如ピンと耳が立つ。

物音を聞き付けたのだ。誰かが真つ直ぐにこの部屋に向かっている。カチャリと開く扉に、それ以外の音を拾おうとあたしは耳を澄ませた。

誰かが動く端切れの音。

「レディ」

『！！』

ダーリンだわ、ダーリンがあたしを呼んでる！

心地よい低さの声は、とても近くから聞こえた。会いたい。

けれど、今は会いたくはない。もしもダーリンにまで本来のあたしを否定されたら。そんなことは無いとは思いつが、もしも魔界に名高い悪女があたしだと知られてしまったら。

不安に思うあたしがとった行動は、嵐が過ぎるのを待つように、じつと動かず息を潜めることだった。

会いたい、会いたい。でも、自分からは行けない。気付いて欲しい、でも、嫌。

ところがそんなあたしの心の葛藤も知らずに、ダーリンはあっさりあたしの場所を見破った。

足音はベッドのすぐ隣で止まったかと思えば、次の瞬間には黒い瞳がベッドの隙間からあたしを覗く。

あたしはギョツとして目を見張った。

魔王陛下に膝を付かずなんて、とんでもない！

慌ててベッドの下から飛び出そうとするあたしは、更なる災難に襲われる。

急いで跳び跳ねてしまったあたしの頭が、ゴチンッ！と鈍い音を立てた。

「きゅう！？」

思わずあたしの口から鋭い悲鳴が上がる。

……いいいい、いたい

木から落ちる。

袋詰め。

隠れ家ごと落下。

ヒゲ引っ張り。

魔界にきて、受けた暴行、数あれど、……今まで一番の衝撃だ。一番痛かったのはもちろんヒゲ。

でも痛い。一番ではないけれど、痛い。それ以上に頭がぐわんぐわんする。口から手を突っ込まれて脳天が揺さぶられたような衝撃だ。いい音がしたから当然だ。

結局痛みに悶絶するあたしに、見兼ねたダーリンがベッドの下に潜って救出される結果となってしまった。……もちろん、膝を付かせた拳げ句に四つん這いをさせてしまった。ダーリン、ごめんなさい。ダーリンはあたしの身体を寄せると、ぶつけた部分を優しく撫で撫でしてくれた。

ダーリンの剣臍ができた手のひらは、ゴツゴツとしていて撫でられ心地はあまり良くないが、あたしにとっては何よりの薬だ。

ゴロゴロと喉を鳴らす。我ながら現金な猫だ。先ほどの葛藤もダーリンの撫で撫で技能の前には何の意味もなさない、気もする。

「お前はやはり、人間臭いな。……こんな間抜けな猫は聞いたことも見たこともない」

うう、バカ猫の次はマヌケですか。

ダーリンったら手厳しい……

声をだすと、まだぐわんぐわんしている頭に響きそうなので、とりあえず尻尾を降って返事する。

「それに、警戒心もない。秘境の民の獣人ならば、もっと慎重だろう」

……面目ないです、はい。

「レディ」

よく透るダーリンの低い声に、あたしの背筋が自然と伸びる。

深い深い漆黒の瞳が、探るように静かに光を湛える。ダーリンの瞳は真っ黒だが、唯一光の反射で煌めく一部分が更に闇の深さを強調する。

あまりの深さにあたしは溺れてしまいそうだ。

「お前は、元は人だな」

疑問では無く、確信に満ちた声音にあたしは目を見開く。

イヤだ、違う。

「にやあああ！」

違う、違う、

「うにゃああああ！」

あたしは、違う！

「ふんにゃあああああ！」

「レディ、レディ！ 大丈夫だ、……すまない」

頭を振って必死に否定するあたしを、ダーリンは胸に抱えて落ち着くように背中をゆっくり何度も撫でる。

ゴロゴロ。……どんなときでもダーリンの抱擁は嬉しいのです。

ダーリンの不意打ち質問に、思わず取り乱してしまった。

『ごめんね』の意味を込めてダーリンの頬を指して擦り擦りする。半分以上はあたしがしたいからだ。にゃんにゃん、擦り擦り、ゴロゴロ。

あたしが落ち着いてきたのを見計らってダーリンが口を開く。

またもや不意打ち、衝撃発言に再びあたしは取り乱すのだった。

「しばらく、留守にする。いい子で留守番できるな」

なんですって、いやだにゃーん！

黒革の日記帳3

エリー・ファンタベリー

辺境、ファンタベリーの森出身。

邪教の生け贄にされかけたところ、召喚されたソルディ・ダンによって保護される。

家族は既に死去。（家族の死が彼女が生け贄にされるきっかけとなつたと推測。あまりに下らない理由のため割愛）

本人の強い希望により、魔界へと連れ帰り今に至る。

ソルディ・ダンの下心が透けて見える為、扱いには要注意。（あわよくば魔王様の側室にでも、という魂胆が見え見え）

マリベール・ロートリンス

伯爵名家、ロートリンスの長女。

アカンタ魔術学校、第十七期主席卒業。（学長殿の協力により当時の成績表を添付）

堕ちた勇者と浅からぬ縁があり、彼女が魔界にきた目的もそれと思われる。（堕ちた勇者の詳細については、別紙に記載する）

自力で魔界を渡ってきたところ、アंक・デネットにて捕縛される。彼女に地上に戻る意志はなく、また力のある名家の跡取り（嫡男は既に死去）でもあり、扱いには非常に注意をする必要がある。

魔王陛下におかれましては、——。

うちの猫をどうか見にいらいませんか。

最近保護したたのですが、うつとりする艶やかな毛並みに、琥珀のような瞳で——。

とても、いい子で呼べばすぐに——うんたらかんたら。

きっと魔王様も気に入ると思います。

最後の親書は丸めてレディに投げたら、凄く喜んで飛び掛かっていった。

報告書に上がっていた例の二人が謁見に来た。

まずはマリベール・ロートリンスについての処遇に頭を悩ませる。

彼女の無理な界渡りは、魔界の膜を傷付けた。暗黙の理解ではあるが、こうも大つぴらにやってくれと見て見ぬフリは出来ない。

かといって、あまり重い処罰はロートリンス家とアカンタの学園長が黙ってはいない。

辺境へ追いやるならば、目的を持った彼女は思うがままに行動し、魔界の法を犯す恐れもある。そうなると重い処罰は必須となり、やはり二つの勢力が黙ってはいない。

とんだ厄介事が舞い込んでしまった。

なんとか目の届く範囲内で、魔界の常識を学ばせつつ、とつとと帰って貰うように仕向けなければならぬ。

と、思案していたら、ソルディ・ダンが謁見の間に乱入してきた。

例のエリー・ファンタベリーも一緒だった。あえて飾り立てずに素

朴な服装なのは、以前豪華絢爛な貢ぎ物に見向きもしなかったからだろうか。

先に謁見の間にいたロートリンスを見て、何を勘違いしたのかやたらと早口で貢ぎ物を勧めてくる。

さすがにイラツとしまったので、退出を促すと火の付いた勢いで出ていった。

少しきつく言い過ぎたかも知れないが、肝心のエリー・ファンタベリーをその場に残したままだ。

捨てられた仔犬ように見てくる彼女を一体どうしろと？

再び頭を悩ませていたが、救いの女神が降臨した。

普段は蜂蜜色の毛並みは、日射しが差し込んだ謁見の間では神々しいまでの黄金色になっていた。

救いをもたらす黄金の猫は、堂々と謁見の間へと降り立ち、一つの間啓をもたらしたのだ。

.....

すこし、大袈裟に書きすぎたかもしれない。

レディが散歩から戻ってきた。

ドードの照り焼きらしきものをくわえたレディを見て、閃いたのが本当だが、気分的にはそれくらい盛り上がったのである。

二人にレディの侍女となるように言い渡すと、当然ロートリンスは拒否した。

叱咤されて、耳がしょんぼりとしてくるレディ。その様子を見てみると、不可解な衝動に襲われる。撫でくりまわしたいというか、下がった耳を両手でそっと摘まんで立たいとか。

ところが、レディは逃げずにロートリンスに向かい合った。耳は横

に引かれ、背中や尻尾を逆立てる。

勇猛果敢にも立ち向かおうというらしい。

さあ、行け！ 言ってやれ、レディ！

と内心、誇らしく応援ながら様子を見守る。

しかし次の瞬間には「ふひーっ！」と空気が抜けたような、気の抜けた声が響き渡る。

皆身動きせずに一挙一動を見守っていただけあって、それはもう、綺麗に響いた。

可愛い、可愛い過ぎる。

ニヤつきそうになる口元を必死に隠しながら、ちらりとレディを確認すれば、生まれたての小鹿の様にふるふると震えていた。

この様子に胸を撃ち抜かれてしまい、とうとう衝動に負けてレディを呼ぶと、文字通り飛んでやってきた。

魔王の威厳を保つ為にも、片手でしか相手できないのが非常に残念なところだ。

そのためこの後、服を一枚失う羽目になるとは、一体誰が予想出来たかというのか。

二階の渡り廊下を歩いていると、マリベール・ロートリンスを下階で発見。

柱の影に隠れて、何か熱心に見ている。興味をそそられ視線を辿ると、中庭にレディと虎型ヴェルガーがいた。

エネリ・ブラウはまだ巣穴を離れる準備が整っておらず、今はまだ集落にいるはずなので、あのヴェルガーはその弟、ガウディ・ロウだ。

レディはガウディ・ロウの尻尾に夢中になっていて気付いていないが、一方でガウディ・ロウはロートリンスに気付いており、時折牙を見せては牽制をしていた。

ロートリンスは、くわっ、と鋭い牙を見せ付けられる度に身体がびくりと震えてはいるが、一向に立ち去ろうとはしない。

睨むように熱視線を送っていたが、妙に右手がわきわきと指が動いていた。

まさか、触りたいのではないのだろうか？

不用意に他者に触られる事を嫌うヴェルガーに無体を働きたいなどと、とんだ命知らずがいたものだ。

そのうちガウディ・ロウがむくりと起き上がり移動を開始するが、そこで信じられないものを見た。

ちよつと待て、ガウディ・ロウ！

いまレディの首根っこを思い切り噛んでいなかったか！？

いや、見間違いではない！

首に噛み付かれ、ぶらぶらと揺れる蜂蜜色の小さな身体。

ガウディ・ロウの鋭く太い牙を先ほど見たばかりなのに、あるところかそれがレディの細い首に食らい付いているなんて！

慌てて庭に降りようとしたところ、運悪くシュベルに遭遇する。

「いつまで経っても来られないのでお迎えに上がりました」と言われて思い出す。そういえば、会議に行く途中だった。

しかし、それどころではない、レディが！

シュベルにその旨を伝えると、「大丈夫でしょう、なんなら使いをだしますか」と言われ、取り合って貰えなかった。結果、言いくるめられ半ば強制的に参加させられた会議の内容は、よく覚えてはいない。

会議後、すぐ扉の前に待機していたアビルの足下にいるレディを見て、胸を撫で下ろす。

噛み後が無いが首元をよく確認したが、そんなものはどこにも見当たらなかった。

猫とは意外と回復力があり、かなり丈夫な生き物かも知れない。

と、思っていたが、後から聞いた話によると、ガウディ・ロウはちゃんと加減をして噛んでいたらしい。

一人で慌ててしまい、恥ずかしい思いをした。

今後もう少し冷静に、そして寛大になろうと思う。

最近、日記を読み返して気付いたのだが、レディに関する記述が多く、段々と猫観察日記となりつつある。

というのも、目下の関心事の大半はレディに向いているからだ。

今回も、懲りずに猫に関する事を記そうと思う。

最近のレディはアビルの後を付いて回っている。

レディには今でこそ専属の侍女をつけたが、それまでの身の回りの世話は全てアビルの仕事でもあったので、懐いたと推測する。

特に食事となると、アビルの足に擦り寄り催促していた。あまりに

その様子が可愛らしかったので、アビルには食事の準備だけを頼み、最近では自らレディにごはんを与えるのが、楽しみになってきている。

だいぶと魔界に馴染んできたレディだが、いまひとつ相性の悪い相手が存在する。

宰相のシュベルツァー・ノール・カルティエだ。どうやら、シュベルはレディが仕事の邪魔をする存在と認識しており、二人（一匹？）揃えば余り良い雰囲気とは言えない。

元を辿れば、諸悪の根元はついつい誘惑に負けてしまう俺であり、レディではない。

レディには申し訳ない気持ちでいっばいだ。

なんとかシュベルとレディが仲良くならないだろうか？

それにシュベルとレディが仲良くなれば、シュベルがレディに甘くなり、執務室でレディに構っても咎められないかも知れない。

そう、シュベルがレディの可愛さに気づきさえすれば……

そんな思いから、妙案を思いつき実行に至ったのである。

早速、フレイル——侍従頭に指示を出す。

シュベルのローブの内側に、レディの好物ドン・グラの燻製を縫い付けた物を用意させた。

フレイルはこの提案にかなり積極的に乗ってくれ、細々とした準備も全て取り仕切ってくれた。

頼もしい限りだ。

が、

若干顔がニヤつき過ぎやしないか？

計画の当日。

謁見の間の兵士の配置が、いつもと違う事に気付く。何だか、少し多のような……

というか、あれは魔界特別防衛軍、副将フリージアではないのだろうか。

あの目立つ白金の髪に尖った長い耳はピコリス族の証。本音を笑顔の中に包み隠す“微笑のフリージア”。近衛の鎧に身を固めているが、間違いない。

謁見の間を護る兵士たちは、兵の中でも抜きん出た実力を持つ近衛騎士団の中から割り当てられるが、フリージアは更に別格であり、通常ならば謁見の間の警備に当たるなんて有り得ない。何より今は所属部署が違う。

まさか、勇者でも乗り込んでくる予定でもあるのだろうか？

胡乱気に見詰めていると、フリージアから爽やかな笑顔で、ぐっと親指を立てられた。

奴はどこからか、その長い耳でこの催しを聞き付けたらしい。

いつもより多い面々は全て見物人だということに気付いた。

色々と注意したいが、今日だけは許す事にする。

さっそくシュベルがやってきた。その後ろでは、フレイルが指でぐっと成功サインを出す。

挨拶をするシュベルに不自然に思われないうちに、フレイルに向かって頷く。

この日のために、シュベル付きの者にも魔王の権限を使って指示済みだ。

シュベルの準備は万端に整った。

実はシュベル着ているローブにはドン・グラが仕込まれている。

筋書きでは、好物の臭いに気が付いたレディがシュベルにおねだりをし、不思議に思いながらも何気なくローブの内側を探ると、何故かドン・グラが！

せっかくなので、レディにあげたらゴロゴロ懐かれた！ である。ドン・グラに気付かなくても、健気に付いて回るレディに心動かないはずがない。

レディに関しても下準備として、しばらくドン・グラ断ちをしており、ドン・グラに対して非常に飢えているはずである。極めつけには、今日はシュベルがとっておきのおやつをくれる、……かも知れない、と仄めかしておいた。

程無くアビルを呼べば、上手い具合にレディも引っ付いてやってきた。

アビルには悪いが、何か異変に気付く前に用を言い付けて早々と下からせる。少々幼いアビルは素直すぎるために、こういった謀には不向きなのだ。

結果は上々。

さつそくドン・グラの臭いに気が付いたレディは、シュベルの前に行儀良く座り、きらきらとした瞳で見つめる。ちなみに俺はここで負ける。

皆の期待が高まる。しかしシュベルはレディが寄ってきた事には面喰らったが、それ以降は害は無いと判断したのかそのまま普段通りに仕事を始めてしまった。

放置され焦れたレディは、やがて「にゃーん」「みにゃあ」とおねだりを攻撃をしはじめた。

鬱陶しそくに、シッシツと手で払うシュベル。

続いて尻尾を床に叩き付けながら「にゃおん、にゃおん！」と抗議するがやはり無視。

素っ気なくあしらわれたレディはそれ以上深入りする事もなく、じっとシュベルの後ろ姿を見詰める。

レディの耳がぐつと横に引かれたのは横目で確認した。戦闘体勢に入った印だ。心なしか顔も険しくなったような気もする。

ハラハラとしつつ見守っていたが、やがて興味を無くしたようにプイツと顔を背けてこちらにやってきた。

ゴロゴロと喉を鳴らしながら擦り擦りして後ろの定位置に入る、かと思いきや、玉座の背もたれの上に昇り、そのまま微動だにしなくなった。

滞りなく謁見は進む。

今回の謁見者達は、まったく何も知らないような者もいれば、レディとシュベルに視線を移し、何事も無かった事を確認し、あからさまに落胆する者もいた。

思った以上に情報が漏洩しているらしい。

もはや、これまでか。

シュベルの心の変わりも望めそうにない。残念ながら、この計画は失敗らしい。

心の中で溜め息を吐く。

やはり、そんなに上手くはいかなかった。

レディには今日のお詫びとして、後で好きなだけドン・グラを与えようと思う。

しかし、その考えは甘かった。

誰もがレディの存在を気にしなくなった頃、それは起こった。突如として「うわぁ！」という、シュベルの悲鳴が謁見の間に響き

渡る。

慌てシュベルの方に注目すると、レディの蜂蜜色の尻尾がゆらゆら揺れながらシュベルの服の中に入って行くのが見えた。

「うひい?!」「いつたい何を!」といいながら、身体をくねらせるシュベル。

その直後、シュタツ! と蜂蜜色の塊が飛び出したかと思えば、一目散に逃げていった。

いつたい何が!?

一番いいところを見逃してしまった!

皆が呆然と、今の出来事の状態を把握しようと頭を働かせる中、フリージアの笑い声だけが謁見の間に響いていた。

後から奴に詳しく聞くと、レディは諦めたのではなく、虎視眈々とその機会を窺っていたらしい。

皆の注意が逸れる頃、シュベルの意識が別のものに注がれた隙を狙っての、見事な狩りの瞬間だった。

間髪入れず飛び掛かり、服と首元の隙間に身体を擦り込み内部に侵入。ドン・グラ目指して進撃の後、戦利品をくわえて逃げたのとことだ。

後に残るは、よれたローブに身を包み、呆けたように座り込むシュベルのみ。

その間、僅か一呼吸にも満たない、実に鮮やかなハンティングだった。

敗因は、どんな事にも動じない仕事の鬼、シュベルの鉄壁の理性が想像以上に強固だったことと、レディの襲って奪う、というもつとも単純で、野性的かつ攻撃的行動を予測出来なかったことにある。

……この一件で、シュベルとレディの仲はより険悪になってしまったのは記すまでもない。

今回の騒動の仕掛人としては、遺憾の意を表する不本意な結果となつてしまつた。

双方のためにも、今後の関係回復を試みたいと思う。

黒革の日記帳 4

最近、夢を見る。

暗闇と、恍惚と、翳る宝石の夢。

「地上への進軍を！」

過去に我らの祖先を虐げ、この世界へと追いやった者共の血で怨みを晴らし、大地を紅く染め上げましょうぞ！

彼らの血で彩る大地は、さぞかし見物で我らに恵みを与えてくれるでしょう！」

若さ故に愚かな上奏。しかし力強く威勢の良い声が謁見の間へと響き渡る。

将となるには、抜きん出た技量はもちろんのこと何事にも動じない不屈の精神、これらを備えた猛者である事が第一の条件であるのだが、それとはまた別に、上に立つには重要な要素が存在する。

それは“声”だ。

サンドレオールの子若き領主は、よく響く良い声を持っていた。

彼の声音は、人の琴線をかき鳴らし奮い立たせ、率いるに十分な威力を発揮する事が予測できる。

だが、声音だけでは目的を果たす事は到底不可能である。

地上はそう易々と落ちはない。

聖地に君臨する“聖王”は、俺と対をなす、光。一筋縄でいく筈が

ない。守りを固める聖騎士たちもいずれも魔術と剣の手練ればかりだ。

神殿の巫女とも友好を結ぶ“海神”も、恐らくは黙ってはいまい。“海神”と同じく星の四大元素一つである、風を司る“天帝”は人の器を持つて生まれ、傀儡戦争では数多くの輝かしい武功を立てた。セント・ノールの焰の守り手は、多くの魔術師を育てており、世間に名を馳せる教え子も存在する。

何よりも注意すべきは“軍神”。名の通り戦を司る戦神を討ち取るには、こちらにも名のある多くの将校を失うことになるだろう。

軽く予想を立てるだけでも、間違いなく、それらの“神々”とぶつかる事になるだろう。

戦火が燃え広がれば、それだけ敵も増える。

叡知の塔の賢者たちに、永久氷壁に住まう冰雪王、緋色の鱗の千年竜にその竜騎士たち。

“神”の称号を持つもの以外にも、地上には油断ならぬものが大勢いる。

しかし、“水”と“火”が衝突し混乱した後なら、勝機は十分に……、

危うくひよっこりと顔を出してしまった野心を奥底へと引っ込める。真面目に分析してしまったことに、内心苦笑いを浮かべてしまった。なにも地上の大地に、我が民の血を吸わせる事はない。

どうやら俺も、彼の声に乗せられてしまったらしい。

サンドレオールの前祖は千年前、初めてこの地を踏んだ。世界と言うには、あまりにも不安定で危うい、まっさらな荒れ地を見た。誰も落胆したりはしなかった。彼らの目には光があった。希望があった。かつての忌まわしい居場所を捨てて、己の手で造り上げる新

天地への、期待と夢に溢れていたのだ。

荒れ地を根気よく耕しては緑を植え命を育み、そうして寿命を迎えては魂は天の流れに身をまかせ器は大地へ帰り、ようやく秩序が生まれた。

世界が安定するまでに、実に千年。

彼らの望んだ世界となりつつある。

ところが、先祖よりもはるかに恵まれた土地に住まうはずの子孫は、先祖から譲り受けた地の恵みよりも、地上の恵みを望むと言う。

「陛下はご存知か、我らの地の実りは既に尽き、滅びの道を緩やかに降っている事を。」

今立ち上がらねば、ますます飢えは世界に広がり、略奪と殺戮が大地に蔓延ることでしょう」

「そなたの言い分は理解した。

だが、それを成す為にどれ程の命と、どれ程の時間を浪費するつもりか」

「先祖が愛した土地を、このまま痩せ衰えろえてゆく様を、民が飢える様をこのまま見過ごせとお思いか」

手負いの獣が唸るように、余裕のない眼差しだ。

何がなんでも、地上の富を望むらしい。

「この件は、ひとまずこちらで預かるう」

「陛下はご理解を……」

「下がれ」

有無を云わさぬ口調にようやく引き下がった。

それでも後ろ髪が引かれると言わんばかりに、謁見の間を後にする。溜め息を吐いては、隣に控えるシュベルに視線を向ける。

「サンドレオールの跡取りは随分と血の気の多いのがついたようだな」

「……いえ、彼は確かに聡明とはいいますが、もう少し民を慮る人物で、あのような短慮な行動は理由が無ければ……、……少し調べてみましょう」

「頼む」

まだまだ後は控えている。

次の謁見者を呼べば、すぐにやってきた。

「何用だ？」

マリベール・ロートリンスとエリー・ファンタベリーだ。

レディの侍女という肩書きを持つ彼女達だが、実際には猫の世話といっても最近のレディは勝手に何処かへ散歩へ行つては戻つてこないし、かと思えば誰かにピッタリとくっついて離れない時もあるし、今一つ行動範囲が掴めない。人の彼女達に、窓から窓へと跳んだり隙間を行ったりするレディに付いて回る事は不可能だ。

それにレディは、未だに見たことがないが、半端な人型もとれる、らしい。気儘に猫らしく過ごしているようだが、食事時にはいつもひよっこりと戻ってくるので、彼女達の仕事の内容はいう程無く、日中はかなりの自由時間を持てる。ロートリンスは図書館へと籠り、エリーは城内の下女の仕事を手伝ったりと日々を過ごしているようだ。

レディの侍女というのも個々に対するこちらの思惑は違えど、彼女達を城に住まわせる為の“理由と名目”であるので、問題ではない。

城の者たちと触れ合う事によって、自分のやりたいことを見つけてくれればと願う。

顔を青ざめ、唇を震わせながらもまずはロートリンスが切り出した。

「わ、わたくしのドローズがつ、し、下着が無くなりましたわ！」

……… なんとかいうか、力が抜けた。

世界の命運を賭けた問答の次は、とるに足りない日常の世話か。

魔王とは、何でも屋のような、便利屋のような立場なのだろうか。少し逃避して自問自答したい。

「……… それは、ただの物忘れじゃないのか？」

果たして、謁見の間で上奏すべき事なのだろうか。

まずは、侍従長に言え。

異性に言いづらいのならば、……… いや、俺に上奏した時点でそれはない。

誰だ、通したヤツは。

「なにをおっしゃいますの、乙女の一大事に！ わたくし、確かに部屋に置いてましたわ！」

我が国一の美女、アーマリエ側妃御用達の店で、最高級の生地で作立させたものですよ？ 天使の羽毛のごとく最上の肌触りが約束された一級品ですよ！？ 誰もが一度は穿いてみたいと思うはず！」

側妃の名前も聞いたことは無いし、地上の品はいまいちピンとこない。

内心、首を傾げていると、シュベルが呆れながら代弁してくれた。

「……… 魔界の住人が、地上の品であるその下着の価値を知っている

と思うのですか？」

「なにいつてますの、我が国のあんなにお綺麗で有名なアマーリエ側妃を知らないとは言わせませんわっ」

ロートリンスにとっては自身の下着よりも、アマーリエ側妃の有無の方が重要らしい。

だが、それに堪に障ったのはシュベルだ。

「貴女は魔界の特産物、美人所に、観光名所、……言えますか？」

「……………」。

世界でも、一、二を争う大国の美妃ですよ？」

「ここだつて負けてませんよ」

「特産物とはかく、わたくしは魔界の有名人くらいは知ってます、魔界を治める魔王とか！」

本人が目の前に居てるのだが。

「それくらい知っていて当然です。それよりも、そこの側妃と我らが魔王陛下を同列に扱わないでいただきたい！」

「んまあ！ そこのですって？！

……アマーリエ側妃は、珊瑚姫の如く美しく清らかな所作、乙女の手角獣の如く気品溢れる眼差し、女神のごとき慈悲深い微笑みは、あの天帝すら凌駕する美しさと評判のお方！

その方をご存知ないなんて、ホホホ！ これだから辺境世界の田舎者はっ！」

「……言ってくれましたね、言うに事欠いてこの私を田舎者呼ばわりとは！」

貴女こそ知らぬでしょう、魔界一の美貌を誇る、六柱アスタロットを！ ハッ、ご存知ない！？

ああ、残念ですね。容姿の美しさは勿論のこと、彼女の華麗な空中円舞を見たことがないとは。

地上のチャホヤされて弛んだ身体の側妃と違い、魔界屈指の実力者たる彼女の身体の造形美といったら！

まさに人の域を越えた悪魔的美！」

子供の喧嘩のような応酬が続く。

シュベルも普段から澄ました顔をしているが、あれで筋金入りの負けず嫌いだ。子供のような喧嘩にも負けは許されないらしい。

こんな時こそレディと戯れるに限るが、視線をさ迷わせると、喧嘩する二人とこちらと交互に見て、助けを求めるような視線をくれるエリーがいるのみで望む姿は見当たらない。

溜め息を呑み込みながら、わざとらしく音を鳴らして問うてみた。

「……………それで？」

二人とも身体を強張らせたかと思えば、貝のようにぴしゃりと口を閉ざす。

それまでは、ロートリンスの影に縮こまっていたエリー・ファンタベリーが戸惑いながらも口を開いた。

「私のキャットキャップ……、あの、頭に被る頭巾なんですけれど、それも見当たらないんです」

「そ、そうだったわ、それだけではありませんわ！ 虫とネズミの

死骸が連日わたくしの部屋の前に……！
一体、誰が！ なんの嫌がらせですの？！」

……雲行きが怪しくなってきた。

気を取り直して詳しく聞くと、双方とも洗濯後、確かに部屋に置いたはずだが、いつの間にか物が消えてしまったようだ。他にも支給されたはずの侍女服も一着行方不明となったという。

「わかった、早急に調べよう」

詳しく捜査する旨を伝え、下がらせる。

さすがに二人共に、となれば勘違いでは無いのかもしれない。

まさか魔界の王のお膝元で、泥棒が出没するなど、有り得るのだろうか。下着に、頭巾に、侍女服？

まさか犯人は裸だったのか？

そんな馬鹿な。

しかし考えてみればこれはかなり急を要する事態だ。

彼女たちの部屋は、レディに仕えやすいように寢所から程近い、元は正妃のために作られた部屋を与えた。最近まで、そこに誰かを入れたことも無く予定も無く、勿体無いので物置小屋のようになっていたのだが。

城の中でもかなり深部であるそこに、得体の知れぬ何かが出入りするなどと、例えば下着泥棒や嫌がらせという下らない目的であっても、許される事ではない。

こうなれば、魔王の威信にかけても全力で調査をしなければならぬ。

さっそく、隠密行動に長けた信頼できる者を呼ぶ。すぐに床から黒い水溜まりが染み出たかと思えば、中から髭を大事そうに擦る紳士が現れた。闇を使った空間移動だろう。

「お呼び預かりこのネメシス、魔王陛下の御下へ馳せ参じました」

優雅な動作で膝を折る。

それまでは、後ろに控えていたアビルは思わぬ登場に「きゅ!？」

と小さく短い悲鳴を上げては、半端に耳を出してしまった。すかさ

ず侍従長のフレイルに無言で小突かれる。

見ずともこれくらいは簡単に想像できる。

「ああ、フレイル殿っ、なんという無体をなさいます！　このよう
ないたいけな少年に」

すぐさま悲痛な顔でネメシスが止めに入る。

「るせー！　教育的指導だっ、ちつと黙れ、この幼年趣味の変態め
っ！」

フレイルは普段は良くできた侍従ではあるが、よくアビルにちょっ
かいを掛けるネメシスには、突っ掛かる。

本当に、普段は場を弁えた、良く出来た人物なのだか……

心外な！　とばかりに鼻を鳴らすネメシスも、呼び出した主を置いて
きぼりして赤裸々に性癖を語りだした。

「幼年趣味？　勘違いしないで頂きたい。

私めが愛でているのは、半人前と罵りを受けながらも気丈に振る舞い、
それでいて懸命に責務を果たしつつ、その裏で！　己の未熟さを痛
感じ恥じ、胸の内での葛藤に気付かない内に小刻みに震え、頼りな
く下がり、庇護欲をそそる半端者の象徴！

すなわち、立ったり揺れたりぺによつと落ち込んだり、秘めたる感
情を叫ぶ耳や尻尾！

極めつけは、それに気付いたときの羞恥に耐える表情！

…… たまりませんなあ」

すかさずアビルを抱えて後退するフレイルは「うつつウチの見習いに近付くなっ、この変態め！」と叫び、「もう見習いじゃないです！」と憤るアビル。

「ちなみに申しあげますと、最近一番ぐっ！と、きましたのはレディ様が猫耳を恥じらう姿ですかなあ」

……………そのとき、すごく殺意がわいた。

ぎょっとしてこちらを見る面々。

「げえっ！」「おおお落ち着きを！」「謝りなさい、今すぐに！」と口々に開く。

「少々戯れが過ぎました、御願いますからその魔力しまって下さい。私は魔王陛下一筋にございます」
「……………」

余計に嫌だ。とは思ったが、口をつぐむ。もう矛先がレディでなければ、なんだっていい。

と、いう出来事の為に本題になかなか入れず大変だった。と、寝所で日記の最後を締めくくる。

きりのいい所まで書いた頃、ちょんちょんと裾を引かれる感触に視線を下げると、たつぷりと水を与えられ、青々と育った葉のような瞳と目が合った。

艶やかな蜂蜜色の毛並みを持つ地上の猫。

レディだ。

嬉しそうに緑色の瞳をぱちりと瞬きする様子に、思わずこちらも瞬きを仕返してしまった。

当初に感じた壊してしまいたくなる衝動よりも、今では愛しさのほうに勝っている。

伸び上がって椅子に引っ掛けていた前足を下ろして、くるりと背を向けたかと思えば、寝台の下に顔を突っ込む。ごそごと尻尾を揺らしていたレディが、羽ペンをくわえてこちらに戻って来た。

行儀良く前足を揃えて座っては、緑の瞳を煌めかせて催促するよう見つめる。

どうやら構って欲しいらしい。

羽ペンを見て「そういえば」と思い出す。執務室に常備していた一本が、珍しいことに何処かへ無くしてしまったようだったのだが、アビルとフレイルが凄く狼狽していた。身の回りを整えるのは彼ら侍従の役割でもあるので、思わぬ落ち度に驚いてしまったのだろう。しかし、犯人は意外とすぐ傍にいたらしい。執務用にあつらえられた質の良い白い羽ペンは、今やレディのお気に入りの玩具の一つとなったようだ。確かによく執務室ではシュベルの目を盗み、それでレディに構っていた。

……彼らには、今度内密に謝っておこう。

誘いに応じようと、座ったまま羽ペンへと手を伸ばせばレディはひらりと身を避らす。

首を傾げる。

遊んで欲しいのではなかったのだだろうか。

少し開いた距離を詰めてレディがすりー、と足に身体を寄せる。やっぱり構って欲しいようだ。

再び手を伸ばせば、またもやひらりと軽やかに身を避けた。

「！……こいつっ」

からかわれている。

追いかけると、羽ペンを放り出してぴょんぴょんと兎の様にはしゃぎ回るレディ。名前とは反して淑女からはかけ離れた行動に、ついこちらも熱が入る。

寝台を転げ回りながらも、一瞬の隙を突いて小さな身体を抱き上げた。

「ほら、捕まえた」

意外にも暴れることもなく、大人しく腕に収まる。それどころか「みゃあん」と顔を寄せながら甘えるように鳴いた。

なんというか、心が物凄く動いた。

身体を洗われて、ふかふかになった毛並みがなんとも心地好い。あの二人はちゃんと仕事をしているようだ。

蜂蜜色の毛並みに顔を埋めながら、一緒にころころと転がってしまった。

今夜はいい夢を見れそう気がする。

……………。

柔らかく、頬を撫でる風。草花の新鮮な青臭い匂い。
広がる光景に目を疑う。

向こうには切り立った崖に建造された見事な城。城の直ぐ後ろを流れる雄大な滝。

眼下に広がる城下の街並み。

崖の上には白い翼を持った、鳥ではない、大きな獣が飛翔している。

……あれは、馬？ いや、天馬だ。

滝から上がる飛沫が日の光を反射させて、実に見事な大きな虹が架かっていた。

美しい、都だ。

こんな場所は魔界には存在しない。

もっとよく全体を見たい。

そう思つて辺りを見渡せば、都から少し離れた緩やかな隆起を象る丘の中腹に立っていたことに気付く。

更によく周囲を見れば、丘の頂上には一本の樹が見えた。

あそこに行けば、何かわかる気がする。

やがて頂上に聳える大樹が出迎えた。

何の変哲も無い、ただの大きい樹に見えるが、この樹はどこか特別な気がする。

伸び伸びと自由に開いた枝に、青々とした葉を覆い繁らせ、風に揺られて音を奏でては、心休まる心地好い空間を提供している。

ここからなら、虹の都の全貌がよく見えた。

滝を中心に左右対称に造られた城。計算され尽された芸術と云わんばかりの見事な造形に、思わず溜め息を漏らす。

しかし、それ以外何もない。

少々肩をすくめる気分で樹の幹に背を預け、ずるずると座り込む。そよぐ風に揺れる葉の隙間から射し込む木漏れ日はどこまでも優しい。

周囲に散らばるように咲く白い花も、風に逆らうことなく小さく揺れる。

なんて、のどかで無防備な。

何気なく視線をずらせば、心臓が跳び跳ねんばかりに脈を打った。

女だ。いつの間に？

直ぐ側の樹の根元には女が一人、並ぶように座り込んでいた。顔はわからない。

彼女は先ほど俺が目を奪われてしまった虹の都を眺めていて、向こう側に顔を背けている形になっているからだ。

まるでどこかの侍女のような清潔感のある服装に、長く柔らかそうな癖っ毛を風に遊ばせていた。

髪の色は、さつきまで一緒に戯れていた愛猫を思わせる。

レディだ。レディを思わせるような、蜂蜜色の髪。

女のすぐ隣では蔓で編まれたバスケット。

中は見なくても知っている。パイが丸のままで一つ入っているはず。いつもおやつに持ってくるそれは、彼女得意のお手製のものだった。心得ている俺はいつも一切れだけもらっていた。彼女は華奢な見た

目を裏切って、大食らいだからだ。

風に舞う優しい蜂蜜色の髪。

けれど本人は余り好きではないようで、いつだったか、干した藁束のようだと嘆き、雑じり気のない金髪が良かったと愚痴を溢したことがある。

彼女が何と言おうと、俺はこの色がいい。

それが彼女の髪だからだ。

一束掬って口づけければ、たちまち甘い官能が身体中を駆け巡る。

それは蜂蜜のように、とても甘い――

……………？

何故、そんな事を知っているのだろうか？

何故、そんな柄にもないことを。

虹の都は初めてみるし、第一ここは地上だ。

俺は滅多に魔界を出ることはないし、ここ数百年は聖地か古い知り合いのいる場所ぐらいしか巡った事がない。

長すぎる生に、とうとう耄碌してしまったか。

けれど、どうしたことが。

風に揺れる蜂蜜色の髪を見ると、どうも触れなくなってくる。触って確かめなくなってくる。

どうしても抗えない衝動に、手を伸ばす。

伸ばした手は蜂蜜色の髪を通り過ぎ、触れたのは細い首筋だった。簡単に掴めたそれに、何故かゆつくりと力を込めた。

黒革の日記帳 5

ゆっくりと指に力を込める。

一本一本、丁寧に力を込めて締め上げる。

指から伝わる柔らかい感触の、なんて愛しいことだろう。

か細く震える睫毛は涙に濡れて、上質の金糸の如く煌めく。うつと
りとその様を眺める。

少し力を緩めれば、うつすらと開かれる若葉のような瞳。

驚愕に歪められた瞳を覗き込めば、狂気に支配された自分の顔が映
る。

彼女の視界は占めるのは、今、自分だけだ。

喻えようない歓喜に心が震える。

大丈夫、もう誰にも触れさせない。

動かなくなつた身体は、時の干渉を受けない暗闇の空間に放り込ん
でずっと愛でよう。

ちがう、ちがうんだ！

それと同時に心が悲鳴を上げる。

こんなことをしたいのではない。

こんなはずじゃない。

花の蕾が膨らんだとか、小鳥が巣立つたとか、たわいのない話
をしながら笑って触れて、優しい満ち足りた時を過ごしたかった。

それなのに、なぜ。

矛盾した思い。

正気と狂気の狭間で揺れ動く理性。

ぐったりと力を無くす身体。

あ

あああ、あああ

——……や

んにゃあ……

んにゃーん

ざらざらとした何かを、頬に、目蓋に、額に、顔中至るところに擦られる。

うつすらと目を開ければ、先ほどの緑色の瞳が目の前にあった。ヒュッと小さく息を飲む。

全て、夢、では……

鼻の頭に、ざらりとした感触。舐められた。

……………れ、レディ？

それで漸く飼い猫の存在を思い出した。

不安そうに見詰めてくる緑色の瞳から目を離せずに、手だけ伸ばして確認すると、指先にふかっと暖かい毛皮の感触。

「にゃあん」

反応があつた事を安心するように、レディは瞳を細めると額と額をすりすり擦り合わせてきた。

ふわふわした毛皮の感触に、いつの間にか痛いほどに輦められていた眉間が緩む。

しかし瞳は夢の中の色とあまりにも酷似していた。
不安に駆られて、胸に寄せる。小さな身体に頬を寄せれば……

……………トクン、トクン

規則正しく脈打つ鼓動。命の音。それにひどく安心する。

どれ程の時間をこうしていたのか、しばらくしてレディが腕の中でそもそもと落ち着きなく動き出す。

自分の落ち着く体勢を見付けたのか、ようやく「ふー」と息を吐いた。吐息が首筋に触れて、くすぐったい。

一息をついた後、くりつと顔をこちらに向けた。

「……………ああレディ、おはよう」

言葉にして気付いた。

宵の闇は明けてはいない。

朝と夜との区別がつかぬほどに混乱していたということか。
気恥ずかしさに再び心地よい温もりに顔を埋める。

彼女と同じ、蜂蜜色の。

……………“彼女”？

不意に浮かんだ夢の中の光景。
奇妙な夢は、いつも見ていた。
ただし抽象的で断片的なものばかりで、目を醒ましても、ここまで
はつきりとは覚えていた事はない。

それに、初めて現れた虹の都。
いつも見ていた夢が“彼女”についての夢だったことに、今やっと
気付いたくらいだ。

不思議なことに、いくら思い出そうとしても、その“彼女”の顔に
はぼつかりと闇が空いていた。

夢の内容を思い出し、ぞくりと肌が粟立つ。

その“彼女”の首を絞めたのは、一体誰だ。

だんだんと小さく揺れる命の灯火を嬉々として眺めたのは、一体誰
だ。

指に残る生々しい感触。

夢のはずなのだ。あれは夢。

夢？

腕の中で苦し気に身を擦るレディに我に帰る。

無意識に力を込めすぎたようだ。

慌てて力を緩めると「まったく、もう」とでも言いたげに鼻を鳴ら
す。

それでも腕の中から出ようとはしなかった。

よかった。

四方から迫るような闇が恐い。

また、夢の中に引きずり込まれる。震えるような歓喜と恍惚とした狂気、そして救いのない正気。

荒れ狂う感情の波が押し寄せて、たちまち溺れてしまいそうだ。腕の中のぬくもりだけが、現実へと繋ぎ止める。

恐い？

暗闇こそが我が力。一体なにを恐れる事がある？

いや。

自分の力こそ、恐ろしい。

時折、感情と共に噴き出す、制御できない己れの力が怖い。

何年生きようが思い通りにならない力は、確実に心を蝕んでいった。

誰にも心は移さない。

何にも心は揺さない。

けれど、自分という存在は認められたい。

他者のために造った魔界は、誰よりも一番に自分のために造ったのだ。

寝台の隣に手を伸ばす。

目的の物はすぐに見付かった。

黒い革の手帳だ。

長すぎる生を綴ったもの。
パラパラと擦れる紙の音。

——随分と長い、眠りについていたようだ。

手帳に記された一文を指でなぞる。

それ以降の記録は存在しない。

眠る以前の記録しか存在しない。

当然だ、眠っているのはペンは持てない。

ならば、何を思い煩う必要がある？

何故こんなにも、腑に落ちない？

果たして本当に眠りについていたのだろうか？

物思いに耽る。

「んにゃ、にゃん、うにゃん」

気の抜けた鳴き声に視線をレディに移す。

膝にくたりと身体を預けながらもごもごと口を動かし、なにやら「うにゃうにゃ」と呟いている。

……寝言だ。

自然と頬が緩む。

そういえば、まだ夜は明けてはいなかった。

朝までぐっすりと休みたかったろくに。眠たいところを起こしてしまい悪い事をした。

そっと撫でようと手を伸ばし、止まる。

……そよ風？

レディのひげの辺りから、なんとも心地よい風が流れてくる。
春の陽射しの木漏れを揺らす様な暖かい微風が辺りを包み込む。

戸惑いながらも興味に駆られ、レディを“視”る。

風は確かに、レディから流れているようだ。寝ぼけながら無意識に周囲に魔力を広げては働きかけ、心地よい空間を造り出している。確かに、拾った当時には欠片も無かった魔力が、最近では目を見張る速度で増えている。といっても現時点では、そこらの猫と比べると高い魔力の貯蓄量だが、程度としては魔界に住む一般人と同じくらいで、人型となれる“二つの姿勢”と比べれば少ないくらいだ。

寝惚けて自然に発動するなんて、元々そんな力を持って生まれたという事だろうか？

更によく“視”ると、気になる事を発見した。

レディには何か術が掛かっている。

そつと背中に指を這わせ、何かを摘まみ上げる動作をすると、レディに絡み付いていた術式の一部が姿を現す。

「なんだ、この術式は」

それは古の時代に作られた、対象を知性も何も無い醜い獣へと変貌させる邪術だった。

古き時代の悪しき産物。

悪趣味な輩が面白半分に使用した、道德なき魔術。

こんなものが、なぜレディに？

よく解読すると、知っているものとは少し違う。
描き換えた跡がある。

この魔力。これは、レディの仕業だ。

それにしても、無理やり魔力を擦じ込んで別の術式に変えるなんて、
レディはよっぽど猫になりたかったのだろうかと……

いや、違う。

これは邪術に抵抗した跡だ。

つまりレディは、以前それなりの力を持っていた魔術師で、それも
知識はかなり豊富かもしれない。知らなければ古の邪術を描き換え
るなんて、そんなことは不可能に近い。

しかし、古の時代に触れることができる者など限られて……

——聖女が行方不明に、

脳裏にシュベルの報告が甦る。

一つの可能性に胸が冷える。

聖女とは、全てに愛され全てを愛す、世界に祝福されし祈りの乙女。
聖女は聖王の、神の代行者。

地上の民に親身になって触れ合う彼女は、彼らにとって一番に親し
み深い信仰の対象だ。

確かに聖地に住まう聖女ならば、古の時代を知る機会は沢山存在するはず。

聖女？

まさか。

たった今、寝返りをうち、急所を無防備に晒け出し腹を見せる、普段は賢く、影に隠れて絶妙な悪戯をしでかし、時折大失態をやらかす少々間の抜けた、この猫が？

いや、しかし、レディが聖女だなんて、それはあまりにも突拍子すぎる。

けれど万が一、もしそうならば、聖女は聖地へと帰さなければならぬ。

どちらにせよ、レディの意に添わぬ形で猫になってしまったに違いない。

いったい地上で何が？

忌まわしい呪術が初めて目の前で使用された日の事は、千年以上経った今でもはっきりと覚えている。

病んだ父王と狂った高官が、諫言した勇士に施した惨い仕打ち事を見たのは、当時年端もいかぬ少年時代。

知性なき卑しい獣の振る舞いに、そのほとんどが嘲笑し、侮蔑の眼差しを向けた狂宴の広間。

吐き気がする。

こんな術をレディに使用するとは、使用者には虫酸が走る。もしも会う事があれば、自分の犯した罪を嫌というほど後悔させてやる。

決して楽に輪廻の流れに乗れると思うな。

不意に心地よい風が止む。

恐る恐るこちらを伺う上目遣いのレディだった。

しまった……！

起こすつもりは無かったが、古い記憶に気が高ぶり直ぐ傍で寝息を立てるレディへの配慮を怠ってしまった。

慌てて小さな額を擦ると、気持ち良さそうに目を細めた。

「魔王陛下、地上より世界会議の知らせが届いております」

翌朝、執務室でシュベルから恭しく手渡された書簡に目を通す。

そろそろかと思っではいたが、非常に良いタイミングだ。

年に数回の聖王が主催する、世界各地に散らばる“同盟”を結ぶ実力者たちの話し合い場が設けられるらしい。

もつとも、ここ数百年は参加していないし、向こうも出席するとは考えてはいない、形だけの案内だが。

「出席する」

「はい、では通常通りに断りの返書を……、って、え」

書状を片手に固まるシュベルに畳み掛ける。

シュベルには、これから急いで準備に奔走してもらう事になるので、固まって貰っては困る。

「連れていくのは、フレイル、オックスゲヴァルト、……それとサンドレオールのは、まだ城内にいたな」

「は、はい」

「使いを出せ、連れていく」

「ええーっ！」

気になる事が多すぎる。

“火”と“水”の関係悪化。

地上への侵略の上奏。

不可解な夢。

消えた聖女。

堕ちた勇者。

そして、もうひとつ、気になる報告。

すべては地上に、鍵がある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2081w/>

魔王陛下の愛猫

2011年11月6日12時26分発行